

ふかほりに、子供が見せる好いところを面倒みた方が、遙かに好い躰けが出来る例などがそれだ。もう一つ例を挙げれば、ヴァイオリンなど教へる場合、正しい調子、或ひはほほ正しい調子にばかり氣をつかつて、違つた調子などあつても、それを忘れ去つてしまふのが、賢明な教へ方と云へるのがそれだ。よく注意するならば、この規則は仁愛ニヤウの規則にほかならぬことがお解りになれようが、しかしこの規則が如何に及ぶところ多いかを發見するためには、けだし數年の歳月を要しよう。

この規則よりもつと簡単な、しかも先づとりつき易い、また人の思つてゐる以上に効果的な規則がある。それは好意的なジエスチュアをわれから形にあらはすことである。つまり手や顔を先づ手始めとして、憤激の始まりをあらはすやうなあらゆる身振り、——たとへば拳しを固めるとか、齒をくひしげるとか、眉をしかめるとかいつたことを、ときほどいてゆくことであつて、云へばこれは禮節上のことにしか過ぎぬが、しかし愛憎の動きに常に伴ふ人の内的統轄レジムに對して、禮節といふものは大なる影響力を持つてゐるし、また決してゆるがせに出來ぬものなのである、といふのは人間のからだの統一上、また體內相互間の不斷の連絡や傳達からいつて、外面が變れば、またそれに従つて、内面も變らざるを得ぬものだからである。従つて愛想の好い身振りをもちひて、胃（憤り）や肝臟（怒り）をなほす醫術といつたものがある勘定になる。およそ眞の仁愛は、長生きする方法にいたるはもとより、各方面に如何に有效なるものがあるかを、よろしく想察願ひたいと思ふ。怒つてゐる子供に對し

て、「なんて變な顔をしてゐるの？」とさとす遣り口と、これは同じ式の注意である。（身振りジエムトは氣質ユムール〈體液〉を制御す。）——このマキシムを、しつかと肝に銘するがよい。あらゆる機會に禮儀をもちひようとするのは、至極賢明な遣り口と云ふことが出來ようかと思ふ。

第四十四章 性分 (NATURES)

人間のあひだの容貌や外観の相違は、誰にもすぐと気づけるし、また本でも讀むやうに、そこに讀みとれさへするものがある。筋肉の隆々とした赤ら顔の大男は、黝んだ肌の陰鬱な眼差をした小男と、同じやうな情念、従つて同じやうな見解を、持つ筈がない。肥満した男も、さらに前二者とは別種の趣きがあるであらう。といふのは單に身體のつくりから云つても、前二者は征服欲に躍起となるに反して、肥満した男の方は、おのが場所を保持することに、専ら腐心するものだからである。だがかうしたポルトレットは甚だ抽象的で、ニュアンスにも乏しい。それより人間の顔の方が、もつと豊かなあるものを告げてゐる。だから人の眼差、鼻恰好、皺といふ皺などから、もろもろの情念や持論が、出て來てゐるとまで、云ふことが出來よう。その人の欲望や目論見や計畫などは、顔のそこに宿つてゐる、いな、その入口に立ちはだかつてゐることさへ、屢々なのである。口は發議する。抗辯する。嚇す。手となるともつと雄辯に物を語る。短い手、長い手、脂ぎつた手、瘡せた手といつた具合に。しかもこれらすべては遺傳性のものである。外的運命を告げるものでなしに、おのがフォルムに

順じて、おのが周圍を統御してゐる一つの纏まつて鞏固となり、打ち克ちがたくまでなつた本性なのである。だからして手相を見て未來を卜する占ひの老婆は、人それぞれにその未來をつくり上げるものだとさへ白狀してゐるではないか。

それと違つて内的の運命のことを、人は宿命と呼んでゐるが、人一生の全歴史が、前以て既に記されてゐるものとしてよいであらうか。さうは簡單にはきめられまい。われわれの行爲には、われわれの身體のフォルムが、ついて廻つてゐるものだが、それと共に事物のフォルムも、またそれ以上に、周圍にゐる他の人間たちのフォルムも、われわれのアクションは帯びてゐるものなのである。生業、戦争、破産などは、人のアクションを變へるが、その人の身の振舞ひ方や、髪の毛の鬘一つをも、變へるものではない。その個々の持前の性分は、常にそこに相同じく再認されるものなのである。一人の男が王にならうと、乞食にならうと、例によつて例の如き同じ黒い眸か灰色の眸、慎ましい或ひは無遠慮な同じ口許、同じやうな手恰好といつた具合なのである。各人の裡に於る生れつきの性分のかうした永存性と、邂逅 (rencontre) の限りなき多種多様さとのあひだを、われわれの歴史はローラーをかけたやうに、各瞬毎にこれら二重の押型をうたれつつ、展延して行つてゐるのである。だからわれわれはわれわれの身體構成を受け容れたまま、それを變へることが出來ぬものだと云つて差支へないのであるが、われわれのアクションをも同じく繼承して受け容れてゐるのだとは、決して云つては

ならぬのである。

だが尠くもわれわれの徳や悪徳は例外だらうと仰有る方があるかも知れぬが、それまた少しく早まり過ぎる。遭遇事ランコントルといふものを度外視して、徳や悪徳を論ずることは、出来ぬものだからで、いつた善行悪行のなかに認められるものは、常に一定不變のある種の身の處し方、感じ方といったものなのである。だから憤りとても常に邪惡なものとは限らぬ。猜疑は常に非道なものとも限らぬ。策謀とても徳義に適ひ、道理ある場合だつて屢々とある。同じ氣質、同じ性分から、時には深慮、時には偽善があらはれることがある。同じ愛でも相手に對するこつちの氣持一つで、或ひは獻身的にも、或ひは敵性的にもなるものだし、渝らぬ誠のなかにも、一種の我意がある場合もある。人さまざまの氣質の目錄タテマを、かりに著婆扁鵲が親しく手を下して作成したとしても、もろもろの徳や悪徳の目錄タテマと、びたりと符合する筈がない。だから怖らくエスキュラップなら、あらゆる徳や悪徳に、それぞれその獨得な色と顔とを興へることを工夫したらう。何故なら肥つた男は走らせたらへまだらうし、また瘠せたとげとげした若造は、安樂椅子にをさまつて、人を傾使するには向かないだらうし、ためにさうした背馳から意地悪や不機嫌が生れて來るに對し、人の本性をそのおのづからな開展にゆだねたなら、めでたく見事に行くであらうことは、およそ明らかだからである。従つて人には縮れつ毛の性を矯すことが出来ないやうに、その本性を變へることも出来ぬのであるが、しかし本性に信賴を寄せることな

ら出来る筈である。もつと云へば、人はその本性を變へることが出来ぬからこそ、その本性に安んじて頼れるのである。そこまで悟りをひらいたものは、しつかと大地を踏みしめたものだ。シーザーやアレキサンダーのやうな、あの偉大な力といふものは、彼等が人間のあひだの違ひを愛したことに、——梨の木が梅の實を生まぬことを咎め立てようとしなかつたことに、疑ひもなく發してゐるのである。

第四十五章 自愛 (L'AMOUR DE SOI)

大抵の場合、私は無造作に人間をそのあるがままにとることにきめてゐる。人間を變へる奇蹟的な力を、假に私が有してゐたところで、向ふ見ずにそれを行使するやうなことは、したくないと思ふ。けちんぼ、短氣者、吞氣作、馬鹿正直、狡猾家、野心家、法螺吹き、粘液質型など、これらの性分の人に對し、もちろん私は氣に入つたり入らなかつたりだが、かうした人さまさまのカラーとても、扉を塗り直す場合と同じく、建物全體の色を變へずに、扉の色だけ變へて濟ませられるといつたわけのものでないことは、私だつて知つてゐる。それどころか、これらの特色を變じて、他のものと入替へようとするのは、ただにその間の平衡を紊すのみか、角を矯めんとして牛を殺すやうな具合に、そのすぐ背後に潛んでゐる徳を、毀損する怖れが大いにあるのである。いへば私は、各人の徳と惡徳は、堅くその人に結びつき、根を張つてゐるものゆゑ、着物でも脱ぎ替へるやうに替へられるわけのものではない。といふアリストテレス的理念を、あくまで遵奉せんとするものである。だから人をいくらかでも中庸人に似せさせようとして、まるで貨幣でも磨き仕上げるやうに、その持前の凸凹を

磨きこすり、平滑にならしめようとする骨折りに對して、私は毫も賛成することが出来ぬ。むしろ私はそのあるがままのものを人が出しきり、おのが本性を残りなく發揮する方が、望ましいと思ふ。といふのは人はおのれ自身の外部に、われと飛び出せるものでもないし、また他人の徳を借用に及ぶわけにも行かぬものだからだ。根が褐色の人は褐色に生きるだらうし、褐色の徳を持つだらうからだ。

さう云つたからとて、奴隸たれ、自己の奴隸たれなどは、私はさらに云ふ心算はない。周圍の事情などのため、甘んじて歪曲され褪せさせられてゐる人、——おのが固有の本性の一部を、各衝撃ごとに失つてゆく人、——さうした人をこそ私は奴隸根性の人と見たい。その反對におのが内的の掟に順じて、その凸凹を出来るだけ伸してゆく人を、私は自由人と呼びたいと思ふのである。人はそのあるがままを伸しゆくことに依つてのみ、有效に自己變化が出来るものであつて、その結果よくならうと悪くならうと、それは私の興り知らぬところで、自己を發現しゆくものが善、去勢させるものが悪と、むしろ私は云ひたいと思ふのである。そのことは徳 (virtu) といふ美しい言葉そのものが、それと私に誨へてくれてゐる。たとへば植物の vertu (徳・力・美質・操) といふと、植物がその本性に従つて生じたす成果 (effets) を指すので、その作用が人體を益しようとするやうと、問ふところではないのである。それと同じやうに、人間もそのあるがままに用立ててこれを行使すべきで、梨の木が梅の

實を生まぬことを咎めるやうな愚は、犯してはならぬのである。プラトンの薰陶からアリストテレスは生れたが、殆どプラトンと對蹠のやうな存在となつた。プラトンの單なる亞流といふのだつたら、その猿真似にしか過ぎぬが、從來のアリストテレス以上のアリストテレスがそこに人となつたとすれば、世にも美しい薰育から實つた天成の美果と、それをいふことが出来よう。多くの人からよく仕へられて、偉大な事業を完遂した世の傑物たちは、何よりも先に人と人との違ひ目を違ひ目として認めて、そこを愛しさへした人達であると、私は確信するのである。それと反對に下役たちが主人を真似て、その鼻恰好までも模さうと努めるやうな場合、萬に一つも事が成らぬのも、また當然ではあるまいか。

かやうな言は商工業などの事務方面に於ても、屢々立證することを得よう。性格の相反した二人の力で、店が榮えてゐる例も數多くとある。私の知つてゐる大きな企業會社も、互ひに己が立場を終始固執して、譲らうとせぬ二人の正反對の人物によつて、見事に經營されてゐた。一人は造る方に才があり、他の一人は賣捌く方に腕があつた。販賣手腕のある方の男は、人を納得させるこつを知つてゐたし、また説得することを何より好んでゐた。生れつきの禮讓といつたものを、彼は身に備へてゐたし、會話の際など實に氣永で、それといふのも大の話好きだつたからでもある。ところがつくる方に腕のある男は、人の氣に入ることなぞ、すこしも頓着してゐなかつた。といふのは無情な事物をばか

り彼はこつこつ相手にして、話をするにしても自分自身に話しかけるだけで、それも代數と作圖の方向向きのことばかりであつた。もしも二人のうちのどちらかが、協調精神などを發揮して、相手を模したりなぞしたら、二人のコンビもそれほど實をあげるわけには行かなくなつたらう。奉仕しようとする意思のなかに、わが身を貶めてもよいといふ氣持は、およそあつてはならぬのである。佛蘭西大革命の場合や、ソヴェート共和國のあの驚くべき歴史などを徴すれば、強烈な人柄の仁は、政治鬭争の渦中に於て、一段と自己肯定をなし、己れを鞏固に鍛へ上げまでしつとも、共同行動はそれらのために毫も煩はされざることが看取されよう。それに反し自己に見限りをつけたものは、なんの力添へともなつてをらぬのである。だからして私はあらゆる人に、おのれ自らを愛せよと勧めたく思ふのである。さう云ふと世才に長けたモラリストたちは、烈火に薪だと私の言を笑ふかも知れぬが、決してさういつたものではなく、おのれ自身であることに耐へられず、羨望の念——もろもろの情念のうち、もつとも物狂はしいのが、この羨望のパッションなのだが、——それに惱まされてゐる人達を、私はタイラントともエゴイストとも名づけたく思ふのである。羨み屋は自分自分を自愛してゐるとは云ひ難い。その反對に、彼は自分自身に直面して、しきりと物悲しいのである。自分以外の他のものになりたい思ひで一杯なのである。まさしく空しいそれは野心だ。何の實質も、力も、望みもない野心だ。羨望は絶望にも相通するとも云へよう。たとへば私の隣りにゐる學友が、數學にすらすら

通じてゆくその神速さを、私が羨むとする。私のものでない彼独自のものを、私が羨んでどうしようといふのだらう？ あらゆる私の數學、私の身に附いた數學は、すべて私から發せねばならぬし、私の裡から引出したものでなくてはならぬではないか。私から發現させたものでなくては、私は決して自分のものにするわけには行かぬではないか。この種の勇氣、この種の經驗が、まさしく眞の自愛といふものなのである。この種の自愛を對者のうちにまつたからしめるやうに、對者に對して手をかすことは誰にも出来る。人のために盡せるものといつたら、かうした盡力しか、およそこの世にはあり得ないし、人をしてかく自我をまつたからしめる手助けをすることは、まさしく羨望の念と對蹠にくらむるものなのである。が、羨み屋といふものは、私の見るところ、他の人達がそれぞれ自己の裡にわれと信念を抱いてゐるさまが、自體氣にくはぬといつた性分なのである。そして羨み屋の計りごとといつたら、——策略にかけては實に曲者揃ひの彼等のことであるから、——人をしてわれとわが愛想をつかさせ、同じく羨み屋にしてしまふところにある。だから人の希望を縮ませるやうな羨望の冷やかな光線の最初のタッチを、私は身に向けられるのを感じるや否や、足にまかせて私は逃げ出すことにしてゐる。といふのは私の怖いのは、相手が弱者の場合にのみ限るからだ。

第四十六章 コントラスト (CONTRASTES)

何もかも單純化せずには濟まぬ世間智にかかると、人間は善玉か悪玉のどちらかに、片附けられてしまふ。が、現實の人間は途轍もない方面を現すことがよくあるものである。普段はお人好しでも、恐怖に襲はれるとすぐ姦惡になることがある。賭事の金には精確のくせに、商賣の金となると、狡く誤魔化さうとするのがある。或ひは全然その逆の場合などもある。商賣上の拂ひはきちんとしながら、國庫から盗むことは平氣なものもある。提携者として信のおける人でゐて、バランスとなると改竄しかねぬ相手がある。赤字の習慣から浪費癖がつき、投遣りで、借財のことなど、とかく忘れ勝ちの人も、一朝にして大金持となれば、うまく身代を管理してゆく能がでる。やさしいアクションには尻が重く、そのくせ、むつかしいことは、せつせとするものもある。今日は殘忍かと思ふと、明日はヒロイックに振舞つたりするのもある。臆面もなく嘘をつく人が、時とはずみでは無賤なくらゐ、率直となる場合がある。安んじて財布を預けられる人が、物のはずみでは人の財布から金をくすねたりする。かういつたやうなコントラストは、戰爭の場合など、なほ一そうと著しいものがある。危難の庭に臨

んで、忠勇兼備、しかも誠實で傲らず、傷者をいたはり、砲弾を物ともせぬといふ人柄の仁が、女性の賣淫に就て、おぞましい見解を披瀝し、常用の慣はせと口外して、恬として恥ぢぬものがあるかと思へば、或る種の名譽を切望しながら、他の種の名譽については、毫もこれを顧みようとせぬものもあり、癩癩持ちで粗暴で横柄な隊長が、ひよつとしたはずみに正しく賢く憐み深く、いたつて好々爺となるやうな場合もある。同じ一人のひとでゐて、さうなのである。が、かやうなさまざまなアクション、相反した諸々の感情を、同じ一人の人でゐてあらはした場合に於ても、そこに現れるのは、同じ髭構へであり、同じ眼つきであり、同じ筋肉群であり、——つまりはその人獨特の徳不徳をかね備へた不易の性分が、露呈されてゐるのである。人の祕密を探つて、それを悪用しかねぬ不實きはまるたちのスパイを、私は一人知つてゐたが、その彼にしても、人から打明けて頼まれた祕密は、飽くまで重んじてゐた。それぞれの人のなかに、頼りとすべきかうした橋、安んじて渡つて行けるやうな橋を見附け出すことは、偉大なるわざとしてよいのである。

が、如何にしてこれを整理すべきかといふに、ここで據りどころとなる二つのイデオロギイがあり得ると思ふ。何れもはるかな展望を持つそれはイデオロギイだ。その一つとして、稼業は徳をつくるといふことを挙げたい。アクションがむつかしい折りなど、殊にさうである。よき泳ぎ手はよく泳ぐがゆゑに、英雄となれる可能性がある。また水の上ではなすこともなく、ただ慄へ上つてゐる人は、陸の上で馬

を御することに、その名譽を賭さうとする望みがある。憐憫の要のない人達に接した外科醫も、縫合すべき怖ろしい傷口や、これからなすべき立派な勤めを見ただけで、おのが力以上に身をつくさうとする望みがある。物をはつきりと直視して、欲するが儘にそれを變へることは、完全な幸福を生ぜしめるものである。紙幣や貨幣の質造人は、利得のためもあらうが、また仕事のむつかしさに心惹かれて、仕事に精を出すものと私は想像したい。あらゆる詐術は詐術それ自體が面白くて堪らぬものである。さういへばあらゆるアクションは詐術(ruse)だといつてもよい。ユリシイズに私が信賴する所である。

もう一つのイデオロギイは、すべての——或ひは殆どすべての人間には、それぞれ純粹な徳の部分が、身に備はつてゐて、きまつてそれにある種の名譽を賭してゐるといふことである。自分自身に對しての誓ひ、つまりみづから責任感を覺えての保證づけなら、泥棒の約束だつて頼りとすることが出来よう。われと見限つてゐる自信のない人をだますことは、殆どすべての人が何の氣遣ひなしにやつてのけてゐることは、商賣取引の場合など見てもそれと解らう。決して人に欺かれぬと自慢する奴には、出来たら瞞してやらうとこつちで思ふ。けだし絶好の獲物とされるからだ。が、頑是ない子供を瞞さうとして躍起となる商人など、およそあるまいと思ふ。商業道德の權化のやうな實直な香料商セザール・ピロトオにしても、商賣となれば、二つの香料壘のうち、見てくれの好い誤魔化しの利くものの方を選

んで賣つたに違ひあるまい。カルタ遊びでは、人に一杯くはすことが法となつてゐる以上、誰だつて相手をペテンにかけるのをためらふ者はあるまい。友を瞞すことなど思ひも寄らぬ人柄の仁でゐて、いざ戦さの掛引となると、何の苦もなくやつてのけられる人がゐる。「今日は」とか「さよなら」とかいつた調子のもとの變らぬ禮節上の約束に、信をおくやうな人は、言葉を知らぬものと云つてしかるべきなのである。かと思ふと、人間の鏡ともいふべきお伽噺などのなかでは、魔法遣ひや神々までが、きまつて何かの宣誓の形式を結んだりなぞしてゐる。だから云つてみれば、信念も掟も持たぬ人間なぞ、およそない勘定になるが、また考へてみれば、同じく信念や掟をあらゆるものに適用しようとするものも、殆ど、いやおそらく全くゐないと云つてもよいのである。慎重と信頼は、ともに相寄り相扶けて鞏固になつてゐるものなのだ。

註 *セザール・ピロトオ　バルザックの小説中の人物。

第四十七章　精　靈 (Tous Saints)

精靈祭はスーヴニールの時である。追憶といふものは敬虔なものだ。われわれの夢想のなかに、その時、黄金時代が現れるといふのも、さうした譯からであらう。追憶のなかに美しく偉大なものが保持され、醜く卑小なものが遺棄されてゐるわけは、おそらく生理學的な謂れからに過ぎぬのであらう。いつたい怖れたり憎んだりすることは、辛く苦しいものだが、それはこつちが奴隸としてけちくさく生きることだからだらう。つまり己れを弱者と観することだからだ。それにひきかへて歎賞の念は健康的と云へる。だから名利の煩ひたる現世からすつかり解脱した人を、しぜんわれわれは美しいものと見る。傳説は補強劑の如きもので、元氣回復には極上のものであるが、かういつたのがまた追善や記念祭の方式でもある。しかも烈しい愛慕の念は、さらに何物かをそれに附與せずには止まぬ。死者のことをよく思ふことほど、故人に對して供養になるものはない。故人の冥福を祈るといふのも、まさにそれと同じ意味なのであるが、かうした點からいつて、神話には非の打ちどころがないのである。故人の過失は宥すがよい。それには先づ自ら進んで、みんなそれを宥すことだ。さうすればすべては

造作なく片附く。死者は榮譽のなかに育ち、黄金時代のパラダイスに榮えゆく。それに反して地獄などといふものは遙かに不自然だ。まだ生きてゐる人に墮地獄を約したりなぞすることがあるが、そんな約定など遂げられたためしがない。最悪の場合でも、さうした悪人たちは、死で消しぬぐはれるのがおちである。故人を懲罰のための呪咀式が、記念祭として恭しくあげられたためしなぞ、およそ何處にもあるまい。もうこの世にない人を、呪ひ一方でしか考へられなくなつたとしたら、いやでもその故人を忘れるばかりである。

かうした想像力の働きと、自發的な愛情の喜捨とに依つて、われわれは英雄たちや半神の一群に、先立たれてゐることがお解りになるだらう。あらゆる死者の祭りたる精靈祭 (La Toussaint) の名そのものが、それと示すやうに、われわれはあらゆる聖人たち (tous saints) に、それこそ先んぜられてゐるのである。ために誰もが英雄的エポックを考へてゐるのである。たとへば貴族は偉い大貴族たちを心に偲んでゐる。公證人はむかしの名高い大公證人たちを追慕してゐる。軍人はナポレオンやデュレンヌやシーザーを遙かに欣慕し、おのれを數ならぬ身と歎じてゐる。職人はむかしの名匠には到底に及ばぬことを歎き、産業革命家は主義に殉ずる人の昔より少くなつたことをこぼしてゐる。かうしてみながみな今の世界を牛耳つてゐるものは、損徳と欲求の念のみだといふことに、意見の一致をみてゐる。そしてむかしのどんな時代でも、大いなるイデオと小さな野心とが、交りあつてゐたといふこ

とを、認容しようとする人はごく少く、シーザーにしても凡人と同じやうに、食ひ氣や睡む氣の欲求に屈してゐたことを、あまり人は公認したがらず、英雄たる以上、飢渴や疲勞を覺える氣遣ひはないと、勝手にきめたがつてゐる。得手勝手な斯様な推測から成つたのが、世間一般の民話である。「息子が父親より勝るといふためしは極く稀れである。大概是劣つてゐるのが常だ。」とホーマーも云つてゐる。悲愴なイデオで、よろづ品下りゆくことを、嫌でもわれわれに納得させようとするイデオだが、かうした考へ通りだと、われわれは味氣ない時世ときよに導かれゆくと思ひがする。だが人間は誰にも教へられずに膝まづくことを學び、われとわが蔑すむべきことを知り、死者のために祈る氣をひとりでに起したといふことは、はつきり信じておいて貰ひたいと思ふ。

かういつたことのために、進歩が確保されたものであることは、是非共ここで云つておきたいと思ふが、どうやら世人はあまりこのことを知らぬやうだし、またかうした出處は隠れて見えかねるのである。だがあらゆる崇敬 (culte) の現實的對象たる祖先や英雄は、われわれより秀れてゐることは、明らか事ではあるが、しかし彼等が現に現實的生命を賦與されてゐることが、われわれにとつて、一段とわれわれより勝つてゐるとされる理由そのものである。といふのは嘗ては彼等とてもわれわれ同様に、賤しむべき下等な欲求ではあるが抗し得ぬといつた鐵則に縛られてゐた筈であるからである。どんな旺んな誓ひを立てても、人には丸二日睡らぬといふわけには行かぬのである。が、

われわれの分際として、片時も忘れることの出来ぬかうしたことも、相手がむかしの英雄だと、われわれはすぐ忘れてしまふのである。だからわれわれが模さうと努めてゐるのは、嘗て存在したことのないモデルをばである。「死者は生者を統治す。」このコントの偉大なる言葉は、死者はわれわれの王であり、また充分にその資格があることを言つたものである。あるのはただ偉大なる死者のみだ。何故なら死者は精霊エスプリにしか過ぎぬからである。またエスプリでなくしてなんであらう。だから地上から剪り取られたこれらの死んだ根莖に、われわれの悪徳や弱點を接木しようとしても、それはおそらく無駄であらう。それにわれわれの想念といふものは、讀書に依つて、——つまり不死なるものからの勸告を仰ぐことによつて、築かれてゐることは、論を俟たぬであらう。われわれ生者は單なる物質マテリヤルでしかないのに對し、彼等故人は精神エスプリにしか過ぎぬのである。といふことはつまりわれわれはわれわれが持ちたく思ふあらゆる徳を、死者に賦與してゐるといふことであり、現にわれわれの肉體は幾多の偶然に翻弄され、風の中のランプのやうに明滅してゐるものだといふことの謂ひである。彼等とても嘗てはわれわれの如くであつた。が、今や幽明を異にして、彼等はこの塵世を脱し、弱點や疾病や死から、永遠に釋放されてゐるその淨いすがたに、われわれは再會して、これを仰いでゐるのである。だからエスプリはまさしく偉人たちのこのパラダイスにしか過ぎぬのである。しかも故人たちはおのれを脱せんとし、またおのれを裏切らうともせぬことに、こつちでは安心してゐられるのである。そ

れはもう彼等のなし得るところではないからだ。だからかういつたのが、「人間精神」の力強い虚構フィクションといへるのである。それにエスプリはその成長を寸時もやめぬ。何故なら死者の群は、刻一刻と充員されつつあるからである。

さればこそコントも、「死者のつりのりゆく重み」と云つてゐるが、これは死者はわれわれより聰明だといふ意味で云つたものである。死者は四方八方からわれわれを取圍む。あるものは豪勇を以て、あるものは知性を以て、あるひは正義や、節制を以てといふ風に。これら靈魂がわれわれのアクションの上に、いかに微かに倚りかかるにせよ、さうした數多くのモデルのささやかな壓力は、われわれ生者の群を、いくらかでもわれわれ自身よりも向上せしめずには止まぬのである。それでゐて生者は死者に較べて遙かに品下れることを絶えず面目ながつて、死者に赦しを乞うてゐる。絶えず身を屈して故人を褒め上げてばかりゐる。が、疑ふといふことをすこしも知らぬ子供たちは、令名赫々たる故人のモデルに比肩しようとして向ふ見ずに乗出すが、かうした子供心の鼻息高い誓ひが、おほかた大人の徳のすべてなのである。デカダンスといふ想像的な理念に依つて、現實的な進歩が徐々になされてゐるのも、かうした譯からである。死者に對する崇敬の効果といつたら、およそかくの如きものがさうなのであるが、ここに見落してならぬのは、動物にはかうした配慮が絶無だといふことだ。

第四十八章 骨相學 (PHRÉNOLOGIE)

骨相學は滅びてしまつた。碩學ブルウセエ[※]出でて、遂にこれを救ふすべがなかつたのである。何故なら人さまざまの感情や情念や性格などに就て、ブルウセエが遺した精密な分析は、骨相解剖學のお蔭でないことは、あまりにも明らかだからである。腦髓の各變に、それぞれ決定的な定業 (vocation) を求めようとする無鐵砲なこの學說を蘇へらすことは、ブローカ^{※※}にもシャルコ^{※※}にも出來なかつたのである。しかしながら人間の頭恰好といつたものは、興味深いものであることには變りはない。もちろん人間のからだ全體といふものは、もろもろの想念の働き手ではあるが、なかでも特に腦髓はそのさまざまな關聯具合からいつて、からだ全體の縮圖をなしてゐると共に、われわれの見解を、體液や顫動や攣縮などに依つて、腦髓が或ひは調整し、或ひは緩和し、或ひは激化させてゐるのである。行動の際の各個人に就て、充分な研究を濟ませた後でなければ、大腦の學理は體系づけられぬとコントは卓見を吐いて、ガルの^{※※※}諺語を一蹴したが、かうした點に於てコントはブルウセエの流れをくむものと見るべきであらう。行動の際の各個人の行當りばつたりの考へ方——正しく云へば、純理的神話に屬

する考へ方に於ては、プラトンやモンテーニュやパスカルやラ・ブルュイエールなど、けだし最上の師としてよいだらう。

感情・行動・思索——これらは一つの共通語の上に築かれた區切り方、或ひは級數のやうなものであつて、吝嗇や野心に專屬する器官といつたものを探し出す面倒を、前以て既に省いてくれてゐるのである。だから云つてみれば、感情的な吝嗇者といつたものが世にはある。小心翼翼たる輩である。行動的な吝嗇者といつたものもある。貪慾な徒輩だ。思索的な吝嗇者といふやうなものもある。勘定高い連中がそれといつた具合である。同じやうなことは、野心家に就ても、また戀愛病患者に就ても云へよう。だから私が人のあたまの前や後への出つぱりで、その人の天職 (vocation) を判じようとする場合、先づ感情や行動や思考が、如何にその人にあつては釣合ひを保つてゐるかを、看取せねばならないといふわけになる。といふのは人の全情念は、或ひは夢想的か、或ひは霸氣滿々か、或ひは先見的かのどちらかだからである。それに腦髓はその後部に於て、下級生命のメカニスムと聯關してゐるものゆゑ、如何なる順序をもつて感情や行動や思考は、人の動物性から高まつてゐるかを、見極めることもまた必要なのである。この問題をコントは一聯の詩句を以て道破したが、美しい詩句とはお義理にも云へぬながら、説くところにはなかなか深遠なものがある。妄動^{ワフエクシオン}に動きて振舞ひ、振舞はんがために思考す。いつたい如何なる生命にあつても、また生命のどんな時に於ても、われわれは先づ

苦しんだり、喜んだり、憎んだり、愛したり、怖れたり、望んだりすることを手始めとし、その後で
すぐと我々の手や足の即興にまかせて、行はうと試みるものであつて、工夫したり、先見したり、吟
味したりするところの所謂想念イマジネーションなるものは、アクションの躰カクシの際にのみ、俄かに現れるものなので
ある。いはばかうして人は目覚めるのであり、はつと我れに返るものなのである。従つて大脳といふ
ものは、かうした働きオペレーションを可能ならしめるところの關聯を、また關聯の關聯を、後部から前部にかけて
含んでゐるものと、私は推量するのである。

だから大脳といふこの數學家は、前の方、ちやうど額の下あたりに、結びつける働き (l'esprit de
combinaison) を有してゐるが、この働きはあたまの上部にあるアクションの諸器官オルガニと、均衡もあまり
とれぬし、また頭蓋カクドの後部や下部に、結びつける働きがそこに作用する迄は、狂熱心や愛憎の念が煮
たぎられてゐるが、それらとも移りがわるいし、生硬のままに想念イマジネーションとなつて、まだきに逸脱しやうい
感情とも、コンビネイションのエスプリは、うまく調節がゆかぬのである。かうした意味で、大脳は冥
想家でまた詩人なのであるが、しかしそれはあくまで靈感を受けた行動派の詩人で、決して勘定づく
の振舞の詩人ではない。あたまの後ろでか、上部でか、或ひは額の尖端の働きでか、人が銀行家にな
つたり、醫師になつたり、政治家になつたり出来るその出来具合を、以上の點から探究してみるがよ
い。後ろが平べつたいあたまの人の多くには、その大脳の下部に、感情の強烈な用意といふものが宿

つてゐて、それは鼻の兩側の頬肉の締りと豊かさで、それと察し得ることだけを、ここでは注意して
おきたいと思ふ。頬肉がこけ、あたまの後ろがすつこけてゐる人は、きまつてコンビネイションの働き
が貧しく、あまり先きが見え過ぎて、結局なにも見えぬといつた人柄、——つまり理窟屋になるか、
ネクタイでも呼賣するほかに、あまり才のない人とときめても間違ひはないと思ふ。

註

* ブルウセエ (一七二二—一八三八) 佛蘭西の生理學大家。既出。

** プローカ (一八二四—一八八〇) 佛蘭西の醫學者。

*** シャルコ (一八二五—一八九三) 佛蘭西の神經病學大家。

**** ガル (一七五八—一八二八) 獨逸の醫師、骨相學の泰斗。

第四十九章 人種 (RACES)

人類の三つの人種に就て、コントが云つたことは、常に考究の價値があると思ふ。われわれの周圍を見ても、智が勝つてゐるか、情が勝つてゐるか、或ひは行動が勝つてゐるかに依つて、人間を三つの種屬に分けられるやうに、——行動人種としての黄色人種、知性人種としての白色人種、情的・感性的人種としての黒色人種の三つに、同じく人類を大別することが出来よう。が、かうした区分は、あくまで二次的なものと解されたい。何故なら黒人であらうが、白人であらうが、或ひは黄色人であらうが、あらゆる人間の裡に於る愛憎の念や、嫉妬、熱狂、希望、悔恨、喜悅、悲哀などの情感といふものは、その根源及び發現の仕方からいつて、何れも同じやうなものだからである。また黄色人、白人、黒人を問はず、およそあらゆる人間の裡に於る行動の掟、慣習、習俗、勤勞、辛抱、掛引などといったものも、萬人にあつてみな大同小異である。よろづの人の裡に於る知性にしても、また同じである。幾何學、天文學なども、すべての人にとつて同じ共通のもので、最初の表徴で人にすぐそれと見分けがつくものなのである。だからいくら人種的に肌の色が違はうと、そこに私の人類同胞を認

めるのに、嘗て私は困惑した覺えがない。われわれの周圍の人の性分の違ひを、興味深く眺める癖は、大いにさうした際に裨益するところがあるだらう。といふのは獲物を外で漁らうとする黄色人獨得の勤勉さといふものは、一人ならずの白哲人種の顔にも、讀み取れるところだし、美しい眼差をした黒人特有の律儀さにしても、白人にもやはり見受けられることが多くあるからである。が、その何れにも、白人ともなれば、知性が優位を占めてゐる。よしんばそこに於て知性がアクションを浮き出させようと、或ひはまた知性が諸情念を反芻しようともだ。だが白人種にあつては珍らしからぬ知性タイプが、他の人種の他のタイプより、優れてゐるなどと速断してはならない。かういつたことは、金髪が好いか栗色髪が好いか、または百姓が偉いか町人が偉いか、或ひは詩人と計算家とどちらがましかといったやうな、世上の愚問と同じくらゐ無意味な問題でしかない。人にはそれぞれ己れの力で達せねばならぬ獨得な自己完成があるものである。ところが相手をおのれと生寫しのやうに、歪曲せしめねばおくまいとする暴君的な精神は、他國人といふので獨乙人を、異人種といふので黒人を、同じやうに嫌忌して、人種觀念などを勝手に作り上げて、他人種を輕蔑して快哉を叫んでゐる。が、この私はその病ひは持つてゐない。私はあくまで人と人とのあひだの違ひや變化を、親愛する一方なのである。

黒人の若者を見て觀察したことだが、彼等はごく些細なことがもとで、長續きはせぬながらも驚く

べき狂暴さや、憤怒の深淵を見せることが時たまある。もつともすぐと子供つばい微笑とともに信頼心、愛着、感謝の念が、再びそこに舞ひ戻つて來てゐる。物を理解し、また記憶する充分の能力は、彼等にもあるやうだが、精神の力といふものが、まるでそこにはない。が、この精神力といふものは、いつたいにどの人種にもあまり恵まれてはをらぬやうである。しかし黒人の場合、それが特に甚しいのは何故かと云ふに、イデ^エを待伏せる擇り好みなしの好奇心といふものが、黒人にはないためなのである。われわれ白人種の理想とする人間のタイプは、愛することより考へることをその得意としてゐるが、調和的な陶冶を必要とすることに於ては、他の人種にも劣らぬのである。白人種とても教養のない野蠻状態にとどまつたなら、やはり毛色の異つた蠻夷に成下つてしまふに違ひないからである。われわれ白人が宇宙の數學を研鑽し、その際、黄色人がわれわれに行動を教へ、黒人がわれわれに誠實の道を教へてくれるとしたら、かうした交換教授で、差引きもつとも得をするのは誰だらうか。誰でもない、みんな得をするのだ。人間社會をつくりあげるには三人種の協力が、まさしく世には必要なのだから。

黒ん坊の召使を知つてゐる人達は、いろいろと黒人の美點を擧げるが、黒ん坊の乳母が預り子をまるで生みの子のやうに愛し、どんな逆境に陥らうと、ためらふところも悔むところもなく、まるで喜び勇んでのやうに忠義立てすることは、決して珍らしい話ではない。黒人はその寛宏な心根からして、

肖像畫や、金目にならぬ何かの記念品などを重んじて、金錢などいさぎよしとせぬ場合が多いが、——どんな體裁をつくるはうと、常に先き先きの用心ばかり心にかけてゐるわれわれ白人にとつては、全くそれは信じ得べからざる程のことである。以上きはめて簡略的な事例ながらも、白人と黒人のうち、どちらが主人に適し、どちらが奴隸に適してゐるかは、おほよその見當が樂につくだらう。また憤怒は愛に近く、復讐のなかにも一徹さがあることを想察するならば、この世の首席取締役ゴッパといったものは、何れにせよ冷徹な白人種の柄にあふことが怖らくお解りになれよう。精神は一面から云へば、もろもろの價值のうちの最小のものであるが、しかし悉皆の價值は、精神を王者として崇めてゐるのである。といふのはあらゆる價值が正しく認められるのは、畢竟は清廉な精神のお蔭に依るものだからである。

第五十章 筆 蹟 (FOURTURES)

ゴブセック^{*}は人と握手する際、一本指を出すのを流儀としてゐる。いつたい手と手との迎接は一種の言葉のやうなもので、いかなる他の意思疎通^{あひま}機^{あひま}關^{あひま}よりも真正直なことは、誰にもそれと認め得られよう。口言葉となると語の選擇が自在だし、それに一種の歌のやうな口調といふものが、そこに入るので、どうしても技巧が加はつて来る。顔面の動きにしても、儀禮に依つていくらか整へられてゐるのが常だ。だが一緒に會食する慣はしに依れば、一つならずの祕密を相手から洞察することを得よう。といふのは人の顎の動きから、その人の本當の微笑といふやつを、想見することが出来るものだからだ。だから食べる際にもさりげない外交官的^{外交官的}こつがある^{こつ}と云へる。しかし人は通常その手に對しては、あまり用心してをらぬもののやうだ。手の動き、殊にペーパー・ナイフなど持った際の手の暴露的な敷衍的な慄^{おそ}へ方から、うはべはいかに伴はらうと、隠しきれぬ相手の烈しい焦慮の念を、それと看取したためしは、私にも度々覺えがある。差伸べた手が率直と信賴を象徴することも、あながち偶然ではないのである。反對に手のさうした不用意さから、相手の邪推深さまでこつちに解るもので

ある。

金を拂ふ手つきにも、驚くべきほどの多種多様さがあるやうに思ふ。人の虚榮心や、無關心や、強欲心や、心の機微などを、金を拂ふ際のさまざまの手つきから看破することも得よう。もつとも紙幣の流通以來、さうした手つきの悉くが、すつかり改まつてしまひ、その自然の反動で、金を拂ふ人の感情までおそらく變化したとも云ふことが出来る。金の重み、殊に金貨の重みのすつしりした手答へは、格別の知らせであつたからだ。手の動きからその人の人柄が全部あらはれるといふ正しい考へから、手のかたちに関するフアンタステイクな探究が唱へられるやうになつたのも、決してゆるなきではない。手の筋のなかにその人の行動の由來^{ムツヤントリス}を辿らうとして、手相見といつた煩瑣^{ヌコロラステック}哲學的傾向が遂に生ずるにいたつたが、それは天文學的關係に就ての人間感情が、長いこと占星術を支持してゐたのと、軌を一にするものである。

もしも人の手の上に自動記入装置計を備へつけることが出来たなら、その針の描く密度や偏差や振幅や屈曲は、よくその人の内的動搖と、生き且つ考へしてゐる心的均衡のその些小な移り變りにいたるまでを、描出する結果となるであらう。しかしこの種の觀察の機械的なそのコンディションと、人の自由率直な即興的アクションとを、如何に一致せしめ得べきかといふやうな場合、そこにあらはれるのは一管の筆である。字を書く人は、おのれのすべての性質を書くのである。もとより共通なモデル

に従つて筆を運ぶのだが、その辿り方に彼獨特の流儀が出るわけなのである。従つて筆蹟を見てその人の性格を判するといふ考へは、決して間違つた考へではない。字面（じめん）には書かうと思つたことが表示されてゐるのだが、筆致には隠さうと望んだことが、あらはれてしまふのである。字面（Ligne）には一般共通の言葉が描かれ、筆致（Style）には個々の性質が描かれるのである。意思の力で字面ならどうとも修飾が出来るが、いくら意思を以てしても、長い間の準備なしには、筆致を變更することは出来ぬし、またそんな準備をしてゐるうち、人柄が變らずには濟まぬのである。思考の上のしかかつた肉體の重みと想像力を云つてもよいが、多少なりと訓練を受けた想像力といふものは、字面への添へ物（incidents）によつて、そとに現れ出るのであるが、かうした附けたりや添へ物が、實に筆致をかたちづくつてゐるのである。だが斯様な表徴（シグニフ）の解釋は、もとより非常に厄介なので、それを好いことにして本當のアートの代りに、煩瑣哲學派（スラスラテイク）はすぐとこれを擔ぎ込んだものなのである。

筆蹟は相反した二つの缺陷をあからさまに露呈するものである。何の附けたりのない字面は、肉體的性質から普通はなれてゐる抽象的思考をあらはしてゐる。まことの教養を持たぬ連中によく見受けられるやうに、そこに亂れはないが、調整といふものがない。それに反して字面を破つた筆致には多少の訓練を受けた奔放さと、すつかり自制し切れぬ豊かさや力が、きまつてそこに現れてゐる。ちやうどダンスが不動の姿勢と、烈しい痙攣との中間にくらゐしてゐるやうに、書道に於ても藝術家的

靈妙（インテリジヤンス）さは、まさしく以上二つのあひだに存してゐる。賢人の經て來た試煉と、その凱歌とが、そこに描かれてゐると云つてよいのである。かうした場合の裝飾といふものは、石造の聖人像のやうに、塊り（マス）のなかから取られ來つたものであるか、或ひは石膏の聖人像のやうに、抽象觀念で鑄造されたものであるかが、ここでよく解るのである。さうは云つても時折り私は、紙に入り込まぬ清淨な筆蹟を、羨んだことがないでもない。「鳩は真空のなかなら、もつとよく飛べると思つてゐることだらう。」これはカントの言葉だ。

註 *ゴブセック　バルザックの小説中の人物、典型的な高利貸。

筆蹟と同じやうに、デッサンもモデルと人柄とを同時に知らせてくれる。ただし筆蹟のモデルは萬人共通のものゆゑ、書く人の人柄のみ、とりわけこの場合強く目に訴へて来るのも、當然なところであらう。二つの顔の間にある違ひより、肉筆で書かれた二枚の紙片の間の違ひの方が、ちよつと見てさへ甚だしい場合のことが屢々とある。なかで最もどぎついのは、一種の粗暴さと重苦しさを書かれた筆致 (style) のそれだが、そんなのになると、紙の背の方から見ても、彫刻みたいなものが、——と云つても、むしろ醜惡なお粗末なものだが、浮き出してゐるのが見受けられる。可塑的な質料の上の塑造法といふものは、すべてそこに何時も重さが感じられて、醜い氣がするものだが、それは二つの實體の衝突がそこにあらはれるためであり、メカニクな暴威が表示される故なのである。それに反して大理石の上の彫刻は、——石片を飛散させてものしたと云はれるミケランジェロ式の荒つばい遣り方を以てしたものでさへ、そのフォルムのなかには、すこしも手荒さなど刻されてをらず、それどころかフォルムがちゃんと敬重され、解き放たれてゐるのである。ヴァイオリンであらうと、太

鼓であらうと、およそ例外なしにありとあらゆる藝術は、かうした體の抑制 (retenue du corps) を必要とするものなのである。だから溝のやうな醜い痕がつかぬやうに、先以て手配されてある紙片に對してのデッサンなら、見事な精神修養の資ともなるわけである。以上はペンの場合であるが、鉛筆で書いた痕にしても、同じやうな局面を呈することが屢々とある。が、次に荷車押しのやうに力んで、物を書く人の立場を想察してみることしよう。つまり掴み合ひでもしてゐるやうな氣で、筆を運ぶ人の場合だが、御當人は手の動作の上に、ありつたけの全身の力をのしかけて、緊張しきつて、身體全體まで痙攣を起してゐる。筋肉のかういつた取締り方 (regime) が、實は情念そのものなのであつて、心の激發のために、取締りをこころざさうとする考へさへ、臺無しになつてしまつてゐるのである。紙のパルプのなかへ、かく没入したやうな書體の數字で書かれた足し算なら、きつと加へ違ひしてゐることは、私は賭けをしてもいいくらに思ふ。だから一人前の代數學者かどうか見分けるには、綺麗な圖形で記號や符號を記してゐるかどうか、紙一面にまるで美しいデッサンのやうに、正確な代數計算を行つてゐるかどうか、それを見極めさへしたらよく、私の知る限りでは例外なく、この鑑定法が常に正鵠を射てゐたと思ふのである。

ペンは極めて鋭敏な器具である。紙にささつたり、靄ほに引掛つたり、はぜいてインクを迸出させたりする金屬性のペン先きとききたら、なほさらのことである。だからペンを使ふ場合には、手はのさば

り出すに、われと自制につとめねばならぬのであるが、とかく字體の太さや、文字の連結や、筆端の旋廻などに依つて、力や焦慮や憤激の念が、そこに現れてしまふのである。精神の錯亂を意味するところの鉤形文字や、ダブつた渦巻文字や、投遣りか誇張の結果の亂れ書き文字などに、屢々接することがあるのは、さうしたためである。だから炯眼家なら筆蹟だけで、すぐと相手を狂人かどうか鑑定し得るのである。またそれほど甚しい外徴からではなくとも、同じ類の特徴からして、具眼者は相手の性癖や、またその性癖の權勢振りをも、ちやんと看破出来るのである。

私が全幅の敬意を寄せてゐる唯一人は、私の見た限りのもつとも美しい筆蹟のまた持主であつたが、細心と、慎重と、物に對する尊敬の念の溢れてゐるその思索の仕事の場合などは殊に、彼の綴文字は點のやうなものにしか過ぎず、各綴はそれ自體では判讀しがたいものが多かつたが、それが一語として寄せ集ると、そこにちよつとした開きが出来て、記號は想念に従屬し、構想力は悟性を模するといつたことに變るのであつた。こつちに話しかけてゐるのは、まるで紙底そのもののやうに見えるレンブランドのデッサンの明るい部分(空白)に、私はこれらの文字あとの字面を、較べてみたく思ふ。が、かうした字面とデッサンの間に、著しい相違があることを、また忘れてはならない。といふのは繪の明るい部分のデッサンの運筆は、一つのフォルムから他のフォルムに移る場合に於てさへ、何のとぎれるところなく走りつづき、その點では自然の召使になつてゐるに反し、文字の場合は殆ど各記號

ごとに中斷されて、美しい沈黙のやうなものをしるしづけ、自然と結ぶことや、自然に身を託すことの拒否を、示現してゐるからである。音楽のなかの沈黙のやうに、白紙が語り告げるとはこの謂ひに於てである。惟ふに品さまざまな完成といつたものがいろいろとあるやうに、人それぞれに救ひの道といつたものが、まさしくあるのである。おのが持前の惡靈を統御することは、それぞれの人の努めとも云ふべきであらう。

第五十二章 身真似 (MIMIQUE)

人間は身真似師である。悲壯なくらゐ荒々しく身真似をする。極言すれば人間はその思ひを感じるものでなく、その行ひを感じるものなのである。私の前で私の敵が齒ぎしりしたとする。そんな外徴は私に擦過するかしないか知らぬの僅かなものだ。が、私もやはり齒ぎしりする。さうなると忽ち相手に劣らぬくらゐ、こつちも奮然と猛つて来る。いつたい外徴といふものは、こつちのかうした加勢なしには、外徴たり得ぬものなのである。筋肉を攀縮して未來を身真似で演ぜずには、人に未來のことは考へられぬのである。たとへば懸崖を目にしたばかりでは、べつに何處といつて加減のわるくないことはないが、懸崖をあたまで想ひ見た場合、墜落の身真似を覺えずにゐられようか。かうした場合の痙攣と内的破滅^{カタルシス}が、實に人をして加減をわるくさせるものなのである。つまり全身の血は逆流し、内臓器官は攪亂されるといつたことになる。が、實際の墜落の場合なら、こんな疾患は覺えぬ筈のものなのだ。

小石の微粒子のため白墨が軋つたり、絹地を爪でしごいたりする場合、人は背中のなか、いのちの

最も奥深い個所に、その軋みを感じて、身體ぢゆうが浮くやうな思ひをすることがある。もしも私が俳優で、さうした仕草を演じようとなら、收縮した腕の震動が胸部にまで傳はり、ために胸ががくがくして恐慌を來たすさまを現さうと思ふ。またもし私が観客なら、さうした耳障りの音を感じるのは、矢張り私の背中のなかでだ。私の耳から勿論そこへ傳はつたのだらうが、そんなことには氣づかず、私は悪寒や身顫ひを身真似するばかりで、私が感ずるのはさうした身真似だけなのである。私の頸の上を、毛蟲が這つてゐるのに氣づくとしても、私の心騒ぎは毛蟲の肢の微かな接觸で起るのではなく、ただ驚愕と、唐突なアクションとから、われからわが心騒ぎを覺えるので、あの驚くべき嫌惡は、ひとへにそこから生じて來てゐるのである。かやうな激しい衝動^{インパルス}が、手と同時に全身の血を、皮膚の一部に投射するのだが、弱い心定まらぬ者には、特にかうしたことが著しい。だから毛蟲など影も形もなくとも、そこに毛蟲のマークが現れるといふことがあり得るわけだ。よしんばほんのひとり合點に過ぎなくともだが、ひとり合點とはこの場合、性急なアクションのそのの謂ひのことだ。従つて憤激家は釘で身を裂く場合もあれば、釘もないのにわが身を引裂くこともある。これがすなはち想像力の働きといふやつだ。想像力が實際に人を傷つける場合があるのを、人は時折り吃驚してゐるが、想像力といふものは先づさうしたもので、ほかにすることなどはないのである。憑かれたやうなかうした身真似に依つて、恐怖は人を蒼くさせたり、赤くさせたり、氣持悪くさせたり、身慄ひさせたりする

ことがある以上、火傷や傷害を人に覚えさせることは出来ぬとは、よもや言ひ切れないだらう。

だからあらゆる苦痛、よしんば肉體的と稱するそれにしても、すべて痙攣と憤怒とから由来してゐるものなのである。身體全體がさうした苦痛をこしらへ上げ、身體の全部分を寄せ集めて、痛み苦んでゐる一點に苦痛を集中させてゐるさまは、ちやうど盲人が用心深いその身動きのすべてを、手の窪みにでなく、杖の先端に集めてゐるのと、まつたく同じやうな具合である。手足を切斷した人がその無い手足に感ずると云ふ苦痛にしても、やはり趣きは同じで、いづれも獨り勝手のでつち上げといつてよく、そこに於る間違ひは、ただ場所違ひと云ふまでの話である。同じやうな例だが、たとへば齒の根が痛む場合、そこをちよつと離れた瑛瑯質の先きに、微かに物が觸れても、ずきんと疼痛を覺えるが、さうした痛みを顎や舌までまた性急に身真似するものなのである。もしもわれわれが平靜に身を持し得たならば、精神的苦痛などいふものは、おそらく覺える筈のものではないのである。といふのは憤激した死刑執行人たるわれわれは、精神的苦痛の本體たる身真似や、痙攣や、捻轉や、緊束に、もつばらひたむきとなり、それらに翻弄されがちのものであるからである。同じやうなことは、所謂肉體的苦痛に就ても、言ふことが出来よう。いつたい麻酔劑などといふものは、身真似のかうした顫動や、そのあらゆる影響を、ともに鎮靜するだけの働きしかないものなのである。傷害そのものと同様に、局部的痙攣などいつたものは、人に生命がある限りは、除き去るわけには行かぬものゆゑ、た

だ身體全體がそれにつれることのないやう手配が出来れば、それで多とするに足りるのである。だから他人の手に手術を施すか、或ひは知らぬ國の言葉で、悪口雑言されたくらゐの軽い氣持で、これに接するやう身構へが出来ればよいので、よしんばさうした悪口が耳さはりとならうと、そんなことは問題とするに足りない。何故なら侮蔑の言葉なり傷口なりから、勝手にパセテイクな感動をでつち上げるのは、自我といふものの仕業なのだから。

第五十三章 手 (MAINS)

手の本来の動きといふものは、掴んだり握つたりするにあることは、赤ん坊のちつちやな手を見れば、それと解らう。赤ん坊に指を出せば、留り木にとまる小鳥の肢のやうに、それにしがみついて来る。あらゆる情念はわれわれの手を閉ぢさすものであることが、ここからも思ひ知られよう。拳しはこつちに用意が整つたことをあらはす。開かれた手はそれに反して靜觀的な想念の表徴である。それは手を開いて左右に高く擴げるのが、崇拜の手振りとされてゐる如くだ。何の防禦も警戒も畏怖もなく、強大な宇宙に身を委せてゐるすがたを照覽あれと云つてゐるやうなのが、聖餐捧持の身振りであるが、これなどは人間をすっかり武装解除させてゐる神學的ゼスチュアと言つてもよからう。かうした身振りに對應し、屢々その續きともなつてゐるのが、實行的な身振りで、われわれは両手を合はせたり、握つたり、組合はせたりする。これらは自省のしるしであり、情念の發動であるが、また何物をも奪ふまい、誰をも傷つけまいとする用心がそこにあらはれ、いはば縛された憤激のやうなものである。両手を組合はせず、互ひに押しつけただけなのが、その中間の身振りといふわけである

が、これは常に誰にとつても、靜觀と祈念の身振りをあらはしてゐるものであり、思索家のゼスチュアと云へよう。同じやうな感情の場合、働き慣れてゐる人の手は、その指を組合はすが、それはおのれ自身を制するために、さらに手が働かねばならぬからである。

握手することは相手と結ぶことである。それは攻撃や奪取や、また竊盜などをせぬといふ一種の保證をなすもので、盗人や詐欺師には、握手がうまく板につかぬのは、さうした譯だからである。手との接觸のなかには、顔の表情ほどにも數々のニュアンスがある。裏切人の手はもう浮足立つてゐる。おどおどした移り氣の人の手は、良にかかつたやうに不安氣である。のびやかなひらひらした手には、達辯さがある。だから手振りを辿るばかりでも相手の話の核心を想察することも出来る。掌を内側にして手を舉げた場合、それは引受けを拒む靜觀的な手つきである。手を急に身體の方に寄せることは、俄かにあたまた閃いた分別心のしるしである。手を首の方、それも屢々耳のあたりに持つてゆくことは、やはり一種の分別心からだが、それはもつぱら知覺に縁があつて、どちらかといふと、イデから來た分別のそれで、俳優が巧く演ずるあの傾聽の仕草の下圖のやうなものである。手が額のところへ行つたら、それはよりよく見ようとする動作のそれで、額を覆ひ眼を隠すあの省察の身振りにしても、やはり同じ目的のためと思ふ。つまり眼を休ませて、眼差に出足をつけさせるためのだ。すべてかうした身眞似は思案と詮議をあらはしてゐるが、それに反して握つた拳しは斷案と決定

とをあらはしてゐる。拳しの男はもう考へを纏めることをしない。考へを披露し、それを行為に變ずるのみで、おのがアクションの力を試みんとしてゐるのである。テーブルの上にびたりと置かれた手は、拳しと趣きは違ふが、やはり斷乎たる決意を表明する。二三の問題は保留中としても、もう何の懸念の翳もないといったそれはかたちである。

頬杖となつて休んでゐる手は、睡りの構へのやうなものだ。それは雄辯のなかには、決して見られぬゼスチュアだが、聴衆や判事などが、ある程度の無關心さに達した折りなどには、殊に見受けられるゼスチュアである。それと反對に讚歎する聴衆の両手は、しげんと擴がり、まるで祈りでもする時のやうに上に擧つてゆく。が、かうした手振りもいよいよの終りに來れば、情念のために負けてしまひ、両手を騒がしく拍たせる烈しい動作に依つて、感情は感動にと再降下する。驚愕の効果をもつて俄かに終る面白い物語も、かうした自然の喝采を時折り得ることがある。拍手といふものは、かやうにして始まつたものなのである。長い間の注意や緊張を、この拍手の音がしげんに終へさせてくれる。だから拍手の音は、性急なあせりがちの身體の表徴、或ひはむしろその想ひ出といつたものなのである。

第五十四章 鼻 (NEZ)

今こそちよつと忘れられたが、昔はたいへんな勢力のあつた、さる官界の大立者の胸像を、私は眺めたことがある。この大行政官が小學教育に盡瘁した記念として、市井の女と子供が恭しく棕櫚を捧げてゐるすがたを、彫刻家は彼の胸像の下部に添へたが、當の胸像の主は、鉤形に曲つた威壓的なほつそりした鼻をして現されてゐた。御本人はさうした曲り鼻の持主だつたから、別にそれは異とするには足らぬが、寫實的に模す必要のない副像の女子供たちが、圓い釣上つた懇願的な鼻をしてゐたことは、ちよつとその對照の妙に、私は驚かされた。この彫刻家は統制的な鼻と、被統制的な鼻に就て、独自の見解を持つてゐたに違ひないと思はれるが、かうした點について、人は哲學することも出来るだらう。いつたい人の顔立ちの特性に就て、言ひ得ることの悉くは、何れもみな不慥かなものだが、しかし人間の顔には、きまつて特異な表出がそこにあつて、それを明確にしたいと、誰もが思つてゐることは全くの話である。

鋭い鷲鼻はきまつて何時も、傲然とした苛酷さのやうなものを現してゐるが、かうしたことから、

顔立ちと性格との間にある何等かの眞正な關係を假定してみることも出来よう。といふのは顔立ちのフォームそれ自體では、何一つの意味もないが、そのフォームの喚起するところの一つの態度、一つの聲音、一つの眼差、つまり言葉や行爲などといったものが、恐怖なり畏敬なりを、見る人にもつばら起させずには濟まぬからである。鷲鼻の人の顔つきに、天真爛漫さや、純真さや、のびのびした嬉しさが現れてゐる例はごく寡く、その反對に、ちつと集中して抑へに抑へた感情、習慣的な冷やかさ、斷乎たる性急さなどが、そこに現されてゐるのである。かうした基調をもととして、人さまさまの千種萬態が鷲鼻からは出てゐるのであるが、鷲鼻をした賭博者、劍士、沈鬱家、邪推家、氣むづかし家、根性曲りなど、私はいろいろと思ひ浮べてみることも出来るが、怠け者、乞食、陽氣な酔っぱらひなどに、かうした鼻をつけて考へあはせることは、やすやすと私には出来かねるのである。われとわが鼻を見ることの出来る人、さうした人達には特有ななにかがある、私はかねがね考へてゐる。つまりキリツとした隆鼻の持主で、眼の高さのところまで、鼻の彎曲がもち上つてゐるので、鼻の尖りがしぜん視野に入るといつたわけだが、かうした鼻の人たちは、怒り易く喧嘩好きの性分であることが常だ。それといふのが、自分で自分があまりにも鼻につきやすく、自分の身體の一部に、絶えず視界を遮げられてゐる業腹さがあるからだ。自分の眼と眼の間にあるこの衝立のせいで、彼等はおのづから一つ事ばかりに固定し、周圍八方にまでは眼が届かぬ嫌ひがあるのである。偉い學者でかうした隆

鼻をしてゐる人を、つひぞ私は見たことがない。要するに人間には、これといふはつきりした性向のない人にもせよ、みなその持つて生れた顔つきに向いたやうな役割を演ずべく、仕向けられがちなものであることは、考慮に入れてよいことだと思ふ。例へば他人を魅するちからを、自分にも揮へることに氣づき出すことが、怖らく野心の始まりともなつてゐると云つた具合にだ。またちつと眼を据ゑて見る性分の人は、べつに一徹な考へを始めから持つてゐたわけでもなくとも、まはりからさう思はれるに従つて、遂にはさうした考へが、當人の身についてくるといつた調子だ。人が勝ち續けて、遂には勇敢になるのも、やはりさうした譯合からだ。それと逆に、慈悲忍辱の顔立ちを生來してゐる人は、容易に心も柔和となり易いものだ。いへば人間界到るところ、假面芝居に於けるが如くである。

多少仰向けになつた猪鼻の持主は、それとは別性格の人柄を現してゐて、情の深いお人好しなところ、笑ひ崩れ易い點、人への信賴の深さ、氣立てのやさしさなどが、その特徴である。子供はみんな始めの頃は、かうした鼻をしてゐるし、子供の無邪氣さをかうした鼻に幾分とどめてゐる大人は、威壓的に人に振舞へぬのである。それに人から尊敬されることになつたにせよ、猪鼻の人は外見の凛々しさにそれを負ふより、實際的の學問のお蔭に、それはまさしく相違ないし、いつたいに野心家肌といふより意地張りの氣性と、私は彼等を認めたく思ふのである。彼等の權勢や、剛毅さや、勇猛心のなかに、特異なさまさまのニュアンスがあるのは、かうしたせいで、彼等の邪氣のない傲慢心は、人

の嘲罵には參らぬながら、阿諛追従には、おそらく屈せざるを得ぬのである。無頓着さといふことが、彼等本來の生地なのである。仰向鼻が長いこと鉤鼻によつて支配されてゐたのも、怖らくさうした理由からであらう。アルマヴィヴァ[※]は鉤鼻で、フィガロは猪鼻である。しかし今の御時世は勿體振らぬ王たちの時代のやうだ。當然な復歸だと、審判官たる眞直ぐな鼻は仰有る。

註 [※]アルマヴィヴァ、フィガロ

何れもポーマルシエの喜劇『フィガロの結婚』中の人物。

第五十五章 人間とその囀り (L'HOMME ET SON RAMAGE)

人間の^{エッセンス}あたまはいろいろのイデエが藏されてゐる小箱のやうなもので、必要に應じて當のイデエを引張り出すことが出来るが、それと共に多くの場合、他のイデエも抱合せになつて出てくると考へて見ることが面白い。それも一つに限らず、いろいろのイデエぐるみごつちやになつて、束ねられて出て來たり、或ひは習慣の絆によつて、珠數つなぎとなつて出て來たりする。たとへば百姓に政治の話をして向けると、すぐそれを耕作の話にして返答して來るといつたたぐひで、兵士ならそれが戦傷の話、士官ならすぐと位階録や昇級の話に變じてしまふ。話のかうした進展具合は、すらすらと行くものゆゑ、話を切り出すに際して、かやうな始めやうをしたがよいと思ふ。それは精神に依る^{エッセンス}事物の最初の見取圖^{エッセンス}といつたものだからだ。但しここで云ふ事物とは、誰もがそれぞれ最高度の關心を寄せてゐる^{シヨス}事物の謂ひで、それだけにまた極めて扱ひにくいものでもある。横時計や焼串回轉機とは何かといふ場合なら、とつくりとそれを熟視するなら、その何たるかを知るに充分だが、そのやうに我々は人間を、齒車仕掛のメカニク^{メカニク}のやうに考へ勝ちで、従つて人間のイデエを、メカニク^{メカニク}の動きにつれて

廻り、押され、引張られる部分か車輪か構成物のやうに想像して、人間にはとつておきの出来上りイデエが、豫備として貯へられてゐる如く見做しやすい。なるほど狂人ならさういつた機械仕掛にそつくりで、何時も同じやうな二三の調子外れた幾節かを、繰返し唱へてゐること、恰も囚はれたつぐみそつくりである。「好い煙草もどつさり」といふお馴染の節を、巧く歌ふつぐみがゐて、この始めの一句はすらすらと行くが、その次の句がどうしても出来ず、また始めに逆戻りして、楽しさうに轉るといふ話を、實見したわけではないが、私は人づてに屢々耳にしたことがあるが、狂人がちやうどそれと同じだ。

かうした例は好い見せしめで、機械家として物を考へ過ぎてはならぬことを、遠廻しに諷するものである。といふのはつぐみの自由な歌は、固定せしめることも、模倣することも出来るやうな代物ではなく、それは各度毎に新たに創り出される工夫物で、まさしくつぐみの身體の構造（それは常不斷大差のないコンディションだ。）を、あらはすと同時に、さうした工夫物は、周圍の事物に關聯する状態や動作を、——これらは可變的なコンディションであるが、——あらはしてもゐるのである。たとへば翼の羽ばたきにしても、二度と同じ翼音が出ることはないのとそれは同じだ。それにまたつぐみの楽しさうな啼き聲は、さらに好くさまざまなけじめを、移してみせてくれてゐる。すなはちつぐみが飲み食ひしてきた後、長い旅に飛出す前、單に憩つてゐる時、びよんびよん跳んでゐる時、——さう

いつた場合場合に應じて、その啼き聲も異つてゐるのを見ても解らう。だからつぐみの歌は音楽箱のなかのやうに、その體內にそつくりそのまま藏はれてゐるなどと云ひたがるものは、つぐみの歌によく耳を藉さなかつたものと、云ふことが出来る。

人間とその轉りをよく耳にとめれば、いろいろのイデエのその生れぎはのことを、もつとよく掴むことが出来るやうかと思ふ。人間が繰返して云ふ時、すこしも考へごとをしてゐないことに注意せられるがよい。それは借りものの歌を唄ふ囚はれのつぐみと同じやうなもので、そのさはりを過ぎて次に移れば、必ずぼろを出してしまふのである。さうしたわけゆゑ、會談などの場合、外交官肌の老つぐみといつた仁は、絶えず同じ歌を口に乗せてばかりゐるのである。しかしかやうな人物とて、決して莫迦といふわけでもない。ただ過ちに陥らぬかほりに、眞にも打ちあたらぬといふだけである。いへばすこしもあたまを働かして考へようとせぬのである。だからそのお得意の歌、——馬に就てなり、彫りのある家具に就てなり、古代陶器に就てなりを歌はせたら、忽ち颯爽として、のびのびと多藝多才に若々しくこちらに映じてくるだらう。それはすぐ忘れ去られ易いながらも、美しい眞實味のこともつた際物のイデエを、彼が物に應じ、態度に順じて、纏め上げて見せるからだ。しかもその場合、坐し或ひは立ち、飲み或ひは食ひしてゐる現在のからだ、——事物に巧みに適合し、手先き一つ口先き一つで、傑作品とも云ふべき眞實さをでつち上げてゐる現前のからだに、それは悉く發してゐるだけ

で、他に何の記憶の助けも、かりてはゐないのである。だからしてつくるはぬ人間を數多く見、それらの人間がすぐと忘れてしまふことを、正確に記憶にとどめて、忠實にそれを傳へ得る人は、獨り勝手なモノローグを唱へてゐる哲人より、遙か豊かなイデ^エに恵まれてゐると云ふことが出來よう。ゆゑに同じルウソーにしても、『エミール』より『懺悔録』の方に、より多くの現實的イデ^エがあると私は信するのである。またどんな『回想録』でも、讀めば必ず何か得るところが同じくあるものである。が、人間を識るには何を讀んだらよいかとのお訊ねに接するなら、私はむしろバルザックやスタンダールを讀むやうに、お勧めしたいと思ふ。人間に就て筆を揮つたラ・ロシュフォーコーなどは、同じ歌を繰返すことに専心したに過ぎぬが、それにひきかへバルザックやスタンダールは、人が逸した數多くの言葉を、蒐め鏤めることを心得てゐたからである。もつともラ・ロシュフォーコーとても、歌の繰返しの最後まで歌ひはしたが、しかし彼をぢかに知つてゐた人達は、もつと伸び伸びした自由な歌を、彼の口から必ずや耳にしたのに違ひないのである。眞の觀察家は常に放心してゐるやうに見えるが、それはつぐみの豫見し得べからざる自由な歌を窺つてゐるためのことに御注意ありたい。

第五十六章 シニ^ニの王國 (LE ROYAUME DES SIGNES)

行政 (administration) の生命は説得にある。説得とはこつちの目論んでゐる目的に應じて、相手を威したり安んじさせたりすべく、シニ^ニを手配することである。戦争も平和も説得一つだ。あらゆる分業もまた説得を先決條件とする。だが説得の王國にも範圍があることを、行政者は遅延なく悟るところだらう。すなはちその及ぶ範圍とは、人の使ふ器具の先端までで、人には機關車やボートや河川を、説得することは出來ぬ。しかし馬や、犬、或ひはライオンまでも、これを説得することを得る。ユリシーズは彼の弓を説得出來なかつた。しかし彼は弓を愛した。一種獨特な流儀で、弓に祈念をこめさへした。弓といふものは射手の確信の念と沈着次第に大いによるものであるから、自己に對してわれと祈念することも、弓に向つて祈ることも、ともに極めて有效なるわけである。あらゆるアクションのうちには、その組立^{モンタージュ}や實證^{ヴェリファイケーション}の部分、つまりその構成^{コンストラクション}の一部に、すつかり犬儒主義^{ドグマティシム}的なところが何時もあり且つあつたが、それは當爲者^{ウツツリエ}の身振りやその眼差などで、それと察することが出來るのである。従つて恐怖や憤怒や焦慮に抗せるやう、人間を心構へさせる必要から、仕事の前に常に

祓ひや呪禁まじなひが行はれた所以なのである。事物は昔と變らず、人間もまたすこしも變つてゐない。機械の手ぬかりで死んだ人間より、情念のために身を滅した人間の方が、遙かに多いからである。機械の場合、たとへば機關手がそれと知らずに取付具合のわるい待避線に入つて、急場に差しかかつてから目前の危難を認め、いきなりブレーキをかけてレールから離れるといった調子には、人間の情念はゆかぬのである。人間はわれ自らが御當人にとつて、何よりも危険で物騒なのである。

説得の及ぶ範圍は、手の窪みに隠されてゐる。逆らふのは棒であらうか、それともわれとわが腕が逆らふのであらうか？ 従はぬのは弓であらうか、手の方だらうか？ 情念は先見しがたい點からして、氣違ひ染みか用心振りといふものの正體がかなりと納得參られよう。あらゆる情念のうち最悪なものは、確信ある絶望の念だが、これがものの曲り角などで、不意にわれわれを襲ふのである。偶然のシニユから、とつくに忘れたものと思つてゐる呪咀の觀念がひよつこりあたまたに浮び戻つて來ることなどもある。牢固とした迷信といふものは、かく何時何時迄も續くものである。さうした氣の迷ひを超克することは、自我に抗せんとする働きかけといふ一段の辛苦を必要とするのである。だからしてこちらの確信 (Persuasion) をぐらつかせるやうなシニユが些小なりとも現れたらすぐ、手を束ねて何もせぬがよいといふことを、經驗そのものがわれわれに訓へて呉れてゐるのである。かうした譯合ゆるシニユの親玉あまじには絶えて制御がしきれぬのである。

それに對する療法は手先きのわざ、つまりメチエをはげむことにある。メチエといふものはその結果が直ちに現れるし、よしんば過ちを犯さうと、僅かで濟むし、また償ひもつくからだ。奴隸が常に主人ほどは迷信深くない所以である。無聊と疲勞が昂じると、人間は一種の我不關焉に達し、僅かながら理性を取戻すものである。何時の時代にも最善の助言者は、微賤の人間と相場がきまつてゐる。敢爲者は行政者を絶えず制してゐるものである。自力で身を築いた人 (Parvenu) とは腕で稼いだ人 (ouvrier) の謂ひであるが、さうした成上り者もシニユのあるじとなるや否や、その分別を悉く失ひ、王座から顛落することだらう。何故なら事物が君臨してゐる世の中だからだ。

事物の王をプロレタリア、シニユの王をブルジョワと私は呼びたいと思ふ。機械技師の作業服は、印象づけんがための目的からではない。それに反して官廷の袍衣たういは、單に印象づけのためのものでしかない。短上衣は便利だから用ひられ、長上衣にはシニユとしての効果がある。寒さ防ぎの襟飾りは、プロレタリア的であり、普通の襟飾りは一つの禮節であり、人を説きつけんがための試みでしかない。説き落されまいとの構へは、まさしく精神そのままのすがたであるが、服装にはそれが見受けられるのである。また疑懼の念といつたものは、説き込まれまいとする始まりかけのやうなものだが、それが服装にも見當りもする。肥し塚のなかへ、木靴ごと入つてゐる農民を、説いて信ぜしめようと試みすることは、狂氣の沙汰だが、彌撒へ赴くべく着飾つてゐる農民を説きつけることなら、まんざら望み

がないでもない。襟飾り對襟飾りの對決となるからである。しかし農民といふものは、決して心の髓までブルジョワでもなければ、また完全なプロレタリアでもない。といふのは農民にしても、その飼馬を説きつけることぐらゐはしてゐるからである。しかし馬はあまり結構な顧問とはいへぬ。何故なら一種の短氣さと、至極荒々しい修辭學レトリックを以て、こつちに報いて來るからである。畢竟はたつた一つだが、いろいろの轉義を持つてゐる *chevalier* (騎士) といふ言葉が出て來た所以だ。つまり豪膽、尊大、腹立ち易さ、それにまた一種の情の脆さ、——さういつたものがこの言葉の餘韻だ。馬を操る人といふものは、他の人達に對しては、こつちが馬となる。といふことは人は自ら揮つてゐるやうな力を、人から揮はれても甘受してそれを忍ぶといふことの謂ひである。自己のうちにわれと感心するやうなものを、人は上長のうちにそれと認めて、またもや感心し直すものだ。獐猛な副官も上官殿の前にあつては、小さな赤子よろしくだ。それと同じやうにリーダー(un chef d'industrie)の性格から、如何なる種類ジャンの専制者を、彼が希求してゐるかがこちらに解る。が、それに反して自由人は、何の感じも持たぬ事物以外には、奴隸たらしめようともせぬし、また奴隸を持つことを潔しともせぬのである。プロレタリアとなると、當人がわが身を律してゐるやうに、人から律せられることを斷じて拒否する。人と事物との分離が、プロレタリアの持つ用具の先きを起點として行はれる。そのためあらゆる完璧さには未だに達せぬが、シイニユを易々とは信ぜぬといふ完璧さには、常にまさしく到達してゐる。

ただしシイニユを輕んずることを能くせんがためには、必要な手先きのメチエのなかにあつて、充分機敏に立廻ることだけは、是非共必要である。機械を運轉する人より、手を使つて働く人の方がよりプロレタリア的ではない。かういつたニユアンスはまたもつばら當の人柄に依るものである。たとへば珍らしい物、清らかな物、新鮮な物を、お客に得させようと骨を折る商人は、さういふ意味でプロレタリア的だが、賣り捌きにくい品を先づ賣らうと心掛ける商人は、すぐ説伏に走る點からいつてブルジョワ的である。プチ・ブルジョワといふものが、私にも解る氣がする。それらは人を説き落すことを後生大事にしてゐる貧乏人たちだ。また偉大なるプロレタリアといふものもある。これまた一廉の人物である。

第五十七章 禮節 (POLITESSE)

禮節は大いなる神祕である。諸々のシニユの何一つ考への伴はぬ術であるとも、それは怖らく云へよう。挨拶をわきまへたからといって、挨拶の意味するところを知つてゐるときめる譯には行かぬ。禮儀外れとはある意味を挨拶に與へることである。ちよつとした身振りに際しても、人がどう解するだらうと案じ出すことから、臆病者の悩みは主として起つてゐるものである。世渡りの祕訣は禮節に没入して何も考へぬこと、人がそれをどう思はうと意に介さぬことにある。だから先づこちらの動作を相手の動作に適はせて、相手の懸念を除くと共に、こちら懸念から免れるやうにすることが、何よりも問題なのである。立派なお辭儀は立派なダンスのやうなものだ。見事な口振りは見事に踊るやうなものだ。彌撒などに於て何かの譯を解さうと思つてゐるうちは、なに一つ吞込めるわけのものではない。彌撒に歌はれるラテン語など、およそ誰一人にも解らぬが、禮儀の大いなる訓へとは、先づはさういつたものである。言葉と動作との協和によつて、彌撒は大調和の一瞬となつてゐる。膝まづくことはお辭儀するアクションと同じく、當の人をのびのびと解きほどこいてくれる。それにかうした

アクションの係はるところは、單に筋肉や肺臓や心臓の部分のみなのである。こむづかしいわざや、並外れた藝當を、斷乎として拒んでゐる點に於て、これらのアクションはダンスに似てゐる。要するに椋鳥の飛ぶそのやうに、生理學的に群團を結ぶことが問題なのである。さうした存在の全體が一つの大きな幕のやうなものとなり、強ひようとするものもなければ、強ひられるものもなく、またそれに打當るものもなければ、打當てられるものもないといつた風に行けばよいのである。

歌もまたわれわれを訓へるところが多い。いつたい歌が快く響くのは、聲音の安らかな移り具合に依る。不意打ちなどは歌のまつたくぶち壊しである。あらゆる集りのうちに、またあらゆるダンスのなかに、變化といふものがそこに於ては必要である。といふのは人は同じ一本足で何時迄も立ち止つてゐるわけには行かぬし、それこそ他の筋肉が倦怠してしまふだらう。従つてあらゆる藝術はぶつかることなしに變つてゆくところにその本質がある。たとへばポピュラーな歌は決して倦きが來ぬ。といふのは人がそれを完全に知り、續きがちやんと豫見出来るからである。それにまた美しい歌にあつては、先行の部分が後續の部分を手配して行つてゐるから、禮儀知らずが微笑をあはてて引込める時のやうな唐突な停止を、口がしなくて濟むやうな具合になつてゐる。王様は名さし違ひや人違ひを御自分でなさると、まるで侮蔑を蒙つたやうにお考へだ。甲が乙に似てゐることが容赦ならぬと思召されてゐる。だが何故だらう？ が、これは王様の理性からは解されぬ。こつちでそんな積りもなく王

様を強ひて阻止したこと、内的なショックを餘儀なく王様にさせたこと、さうした結果にそれは依るものなのだから。曲り角で俄かに階段の中絶に行當つたやうな感じを、王様は抱かれたからだ。自我を無理に曲げる結果となつたため、體液（氣分）が長いこと紊されたからだ。いつたい體液といふ流動體やその揺れ動きにはまつたく奇妙なものがある。飾らぬ安らかな、のびのびした氣易い通じ合ひには呼吸づきよい大氣のやうなものがある。ことばのあらゆるシニユには、先づ以てかうした意味が備はつてゐるものなのである。たとへば私が話す。聞く人にはこつちの言ふことが解る。が、私には私の云ふことが解らぬ。自分の言つてゐることは誰にだつて解らぬ。またそんなことは誰も考へてみようとせぬ。そんな必要はないからだ。

だからあらゆる懇懃な會話は、ラテン語の彌撒文句のやうなものだと云つてよい。みんなが返事の方にばかり氣配りをしてゐる。そこには懸念もなければ、何のひとり思案もない。シニユの第一契機といふやつが、ちやうどこれだ。それはまるで歌かダンスのやうなもので、社會はそこでわれとわが確信をつけるのである。社會の平和の成立を、そこに認めるのである。かういつた一致に乗じて敏腕家はそこへ一つの、或ひは二三のイデエを、何の邪魔立ても受けずに据ゑるのであるが、ただこのやうな不協和音が巧く音樂に溶けこむかどうか、シニユから意味への移り具合が充分にこなされてゐるかどうか、そのところを見定めるのが、敏腕家の腕一つといふわけである。もろもろのシニユのう

はべに、かくの如く探りを入れてゆくことを手際と云つてゐるが、けだし名づけ得て妙と云ふべきである。といふのはイデエが巧くうつるかどうかを我々が知るのは、まさしく我々自身の感動の接觸に依るものだからだ。自分が云つたばかりのことを、その裏からわれと消してゆくわざは、優にエスプリの半ばを占めると云つてよい。しかしさういつた楫とりのむつかしさは、有閑社會特有のものだなどと、早合點してはならない。どんな集團に於ても、先づその慣はしに従つて歌ふといふことが、必要なだし、おのが聲を確保することが、何よりも肝心なのである。つまりみんなが豫期してゐることを最初云ふこと、みんなと歩調を揃へてゐることを示すこと、——これが就中大切なことなのである。このことは辯論家が、巧みにそのすべを心得てゐるところで、辯論家はその聲の調子まで用ひて、満場の喧騒に乗じ、そのさはめきを模しつつ、遂にはその聲音に何等かの意味を含ませるにいたるこつを、會得してゐる。そこからして思ふのだが、英語を學ぶ最上の方法は、子供のやるそれだと私は考へたい。つまり英語の音や笑ひ方を、一生懸命に模して、それ以上のことは何も考へぬといふ遣り口がそれだ。

第五十八章 シニエの術 (LA SCIENCE DES SIGNES)

禮節は決して人を柔弱化するものでもなければ、また無能化ならしめるものでもない。まさにその逆なのである。云はうと思つてゐることを、人に云ひそびらせたり、しようときめたことを人に翻意させたりするのは、斷じて禮節の目的ではない。平手打は決して失禮といふわけではない。そんな積りもなく相手を撲つといふことが、失禮といふまでである。とつくりと考へ抜いた言葉を弄して、こちらに耳障りなことを云ふ人として、やはり失禮の域には入らぬ。こちらの氣に入らうと努めつつ、思はず發した一言で、こちらを嚇怒させるといつた人こそ、失禮と云へるのである。だから失禮とは不調法の謂ひにほかならぬ。意を固めて人の前を突切る人は、無禮と云へようとも、失禮とは云へぬ。こちらの足を踏んだくせに、何食はぬ顔をする人なら失禮と云ふべきである。

人がよく無禮 (insolence) を失禮 (impolitesse) と取違へるわけは、無禮は故意の振舞たること稀なるがゆゑである。臆病のしるしと殆ど何時も云へるやうな不愉快な聲の調子がある。われとわが激昂を怖れて、どんな單純な行爲をするにも、さながら突撃にでも向ふやうな意氣込みで突進することも、

人によくある。無禮にはおのづと申し開きが利くが、失禮に對してはなんの辯疏の齒も立たぬ。こつちの鼻先きをとぼとぼ歩む邪魔つけな盲人を、突き飛ばしたとする。さうなると申し開きの餘地はない。大臣を屬官と間違へたとする。これまた辯解の仕様がな。これを見ても解るやうに、禮節は^{おとしん}慮の類ひであつて、後になつては取返しも償ひも、はや利かぬのである。申し開きなどは、なほと失禮の度を大きくするばかりなのである。初對面の相手の印象が、いかに滑稽にこちらに感ぜられようと、さうしたシニエを、毛程も相手に感づかすのは、常に失禮とされてゐる。が、さうしたシニエを取りつくりつたり、ごまかさうと努めることは、なほ一層と失禮さを増すのみなのである。といふのは一體、待ち設けも心準備も出来てないあらゆるシニエの現れは、そのシニエを窺つてゐる當の人の心を、きまつて傷つけるものだからである。ゆゑに禮節の本當のしるしは、生來なにも意味づけてをらぬ顔つきにあるとされてゐる所以である。あらゆる表情は攻勢的侵略的である。

形式などはどうでもよいと云つた心禮儀といふものがあると、人はよく云ふが、私はさうは思はない。立派な感情が大なる害毒を流すことも屢々とある。たとへば病氣で相の變つた人を見て、いささかの憐憫の情を示すことは、人間の初一念であるが、かうした最初の發動ほど、あとに多くの悔恨をのこす失禮さはない。だから喜びの表情の場合に於てさへも、ちやんと手廻しをし、程合を守らなくてはならない。相手をとまどひさせるやうな表情たつぷりの微笑や眼差しが、世には多くあるが、こ

れらは相手が鍵を持たぬシィニユと云つて差支ないものであつて、誰一人として、いな甚だしくは當のシィニユの示現者さへもが、解くべき鍵を知らぬシィニユであることさへ屢々とある。禮儀を知つた男なら、人にわけも知らさずに、獨り笑ひなぞすべきでないことは夙に承知のところであらう。が、譯も判らずに相槌打つて笑ふ人も、やはり困つた存在だと思ふ。禮節の根本義といふものは、あらゆる民族にあつて同一のものといふことが、ここからしてもお解りになれよう。禮式こそそれぞれ異なれ、顔を崩さぬことが、どこの國に於ても禮節の第一作法とされてゐる通りだし、豫期に反した烈しい身動きは、ましてや到る處にあつて、失禮とされてゐる所以でもある。だからしてお辭儀の仕方にして、握手の流儀キドにしても、みんなのするやうにやらねばならないのである。流儀に従ふことは、決して滑稽なことではないのだ。モードは最善の前置まへおきだし、社會の談話を端から端まで、モードが殆ど何時も調整さへしてゐるのである。何に對してもすこしも驚きの情を示さぬといふかやうな習慣しきたりが、思想や感情の交はしあひに際して、大いに障害となつたやう信ぜられる方があるかも知れぬが、事實はまさに反對なのである。鞞め面の顔を前にして、鞞め面以外のこと、考へが及ぶといふやうなことはない。他の考へなどは、みんな消し飛ばされてしまふだらうからだ。だからして禮節の最高の方は、あらゆる無意識の動きを禁壓するにあるとされてゐる所以なのだ。これはまたあらゆる體操の方式でもある。體操を勵むことは、あらゆる人に一種の禮節を授けてくれることになるわけが、ここか

らしても首肯出來よう。劍道にしても決して人を喧嘩好きにはせぬ。喧嘩好きに人がなるのは、度すべからざる不調法さからのが、實に屢々なのである。

第五十九章 シニユの力 (PUISSANCE DES SIGNES)

ジャン・ジャック・ルウソーは『孤獨な散策家の夢想』のなかで、人が喜んでゐるのをまのあたり見ぬ限り、人の喜びをともにすることが出来ぬ性分と、おのれのことを云つてゐるが、人が喜んでゐるのを認知することは、しかし事柄が別で、それはいかにも頼りなげなものである。「だから私が人の幸福を共感出来た場合、それは感情の力に依るよりも、むしろ感覺の力のお蔭であつた。」と彼は結論づけてゐる。この場合でも、またどんな他の場合でもさうだが、ルウソーはわれわれをものの根元と、天真素朴な域にまで、導いて行つてくれる。私ならしかし感覺といふより感動とむしろ云ひたいと思ふが、言葉遣ひなどはどうでもよい。ただ感動は外徴に依つて直接に通じ合つてゐること、しかもそれはわれわれがさうしたシニユを解するからでなく、單にシニユをわれわれが知覺することに依つて、さう相通するものであることを、絶えず心に悟る必要があるのである。擧め面のこつちに倣つて、人を同じく擧めさせられるといふやうな例を見ても解る通り、あらゆる人間といふものは、その同類に對して、大いなる力を揮へるものであることが、ここからして私にはうなづけるのであ

る。あらゆるシニユは人の心を紊すものである。悉皆の身動きは人に不安の種を興へるものである。相手がこつちの眉の動きを危ながつてゐるだけなのを、なにかこつちの論旨を危ながつてゐるやうにとつて、相手の心底を訝るといつたことも世には屢々とある。太陽の光線の眩しさについて目ばたきして、ために事業の頓挫を來たしたためしもなくはない。つまり相手が該事業の検討に乗り出すかはりに、「何故この人は目ばたきしたのだらう？」と怪しみ出し、最悪の場合は目ばたきを同じくやりだして、よく見定められなくなつたやうな氣持に、相手もなつてしまふからである。

昨日どこかの犬が私にしきりに敬意を表し、あらゆる犬のするやうな滿悅の意を、あらはして來たが、これに應ずる私の逐一の仕草につれて、恐怖のさまざまなシニユが、犬の耳元から背中一面へかけて傳はり、すぐと狼のやうな舉動を、その犬はとるにいたつた。羨の悪い犬のやうに私には思はれ、さう考へたら思はず私は、吹き出してしまつたが、その時のことが何かあたまたに残り、人間のするあらゆる種の舉動のことが、すこしく解つたやうな氣が私にはした。もつとも人間のするわざだけに、犬ほどその舉動はあらはではないが、犬の所作より人間の所作の方が、むしろ私にも模しやすいと見えて、強い實感を以てさうした人間の舉動のことが、私に訴へて來たのである。馬の皮膚の上を傳はつてゆくやうに、また麥の穂の上を風が通り過ぎてゆくやうに、シニユといふものは人間の上を波打つてゆき、想念を越え貫き、想念を曲げうなだらせるのである。さてさうなると想念の道を辿ることが、

俄かにむつかしくなる。人のにしても自分のにしても、想念の辿り具合に、急に確信がなくなつてしまふ。へ意にかなはぬ(ne pas plaire)とはどういふことかと案ずる者も屢々あるが、これはつまり無意識の、或ひは半ば意識的のシニユに依つて、不安を覚えさせられることの謂ひである。大袈裟な身振り、なかんづく爆発的なゼスチュアは、せぬがよいと云はれるゆゑである。両手をみだりに動かすなどいましめるあの體操の初歩の訓へと、これは軌を一にするものであるが、諺にも「手の早いのは下司の業」と云つてゐる。このところを、よく省察してみるがよい。あらかじめ仕草よく身構へて、一つの態度から他の態度に移るにしても、また舞臺の一方から他方に渡るにしても、一種のダンスのやうな身ごなしで心得てかかるといふことは、俳優の藝の重大なる部分である。かやうな演技は見てくれがよく、また眺めて楽しいものである。といふのはそれをこつちで模し得るからだ。

顔面のゼスチュアといつたやうなものは、取締るに一段と骨の折れるものである。が、これは熱烈な注意の對象によくされてゐる。顔をちつと凝視しないことが禮儀とされてゐるのも、さうした譯だからである。もつともそこにも大きな抜け道が残つてゐる。何一つ見もらすまいとする横眼づかひといふやつがそれだ。そんな眼遣ひのために、談判も邪魔されることがよくある。ゆゑに人を説き落さうとならば、ふたりの眼を惹くなにかのスペクタクル、たとへば繪だとか犬だとか猫だとかを眺めつつ、話を續けるのが、一番好いといふことは、何度となく私が持出したところである。考へになつて

ゐない考へなど、判じようとしなないことは、常にとくのもとである。顔面の痙攣する病ひの人の話など、誰だつて注意深く辿つて行くわけにはゆかぬ。今にまた妙に顔を擧めるだらうと、そのことばかり氣になつて、ほかの考へなど、思ひ及ばなくなつてしまふからだ。何の考へなしに眉を擧めたり、眼玉をぐるぐる廻したり、言葉をもぐもぐ云はせたり、薄氣味わるくにやにや笑つたりすることは、人間のポンチ繪にしか過ぎない。またみだりに愛想の好いシニユを濫發することも、おなじく曲解されるもとである。滅法に早いリズムで、シニユが相繼いだだけでも、人に氣を揉ますには充分である。何の意味もないかうしたことづけを、好い氣になつて解かうと精を出し、擧句の果ては、「どうも彼奴の話は筋が通らぬ。」ときめて、不當に片附けることも屢々あるならひである。

ゆゑに大きな聲ではつきりと讀むことを教へるのが、何よりの訓練だといふことになる。美しい詩などを朗吟するなどは殊にさうだが、さうした訓練の結果、人は萬事にあはただしくせぬこと、些事に拘泥せぬことなどを、身につけるやうになるのである。朗讀のなかにも禮式セレモニーはあるわけになる。ピアノに倚りかかつてユーゴーの詩を吟じ上げたやや不見識な俳優を、私は見たことがあるが、身體に押されてピアノがぐらぐら動くので、ちよつと失笑せしめられた。いかにも人は人を笑はすことが出来る。が、それはアトが別だ。笑はせるつもりもなく、笑はせるとなると、それはちやうど怖がらせるつもりもなく、怖がらすのと同じで、ゆゆしい手落なのである。赤ん坊を泣かせずに抱くことが

出来ないとする、それは御當人は御存知ないかも知れぬが、なにかその眼差しにけはしいところがあるか、或ひはそんな積りはなくとも、なにかその聲音に、不穩當なものが宿つてゐるシニユであらう。こつちの許しも待たずに、先走りするさうした電信を厳しく取締ることは、是非共に必要なのである。豪さうな風をする人は子供のやうに人馴れぬ野性さがあると假定しても、十中の九は間違ひない。よしんば間違つたつて、何の七面倒な結果もそこには起らぬが、それに反して人をまるで稜堡のやうに心得て、襲撃するといつた間違ひには、常に怖ろしい結果が伴ふものである。ここで私が襲撃と云つたのは、軍隊式に觀測するあの注意深さ (attention) をも含めての意であるが、かうした遣り方では何時も得るところより、失ふ方が大きいのである。だから一番好い方法は、話してゐる當の相手を見ぬやうな習練を積むことだ。談判の上手な人といふものは、正面に坐るより、傍に坐る方を好むことは明らかな事實だ。會談の際など、二人で同じものを一緒に見ながら話し合つた方が、ずつと話は圓滑に運ぶことは屢々ある例である。これなどは互ひに控へ目に振舞ふための一つの流儀だが、出來たら名匠の繪などの前で、談判を始めるに限るやうだ。

第六十章 曖昧なシニユ (SIGNES AMBIGUS)

いろいろなシニユから人の心を臆測することは難なく出来るが、さうした臆測が確證せられたためしは、千に一つとしてない。日常生活に處する私の信條として、先方から繰返しシニユを誇示せられた場合にのみ、その人の心にまで、私は遡ることとしてゐる。かうした目立つた場合を除いて、私もつばらシニユをもつて、考へなしの原因に基くものときめてゐるから、徒らな詮索をしないで済んでゐるのである。人によつて寒いとにやりと笑ふ場合がある。まぶしいとひどく眉をひそめる者もある。髻も刈り方によつては、威かしともなり、頭髮も逆立ち具合で、思索家らしく見えることもある。腹がへると氣が散つて、いやに不愛想になる人もある。晝飯のベルの五分間前になると、家ぢゆうが妙にはしやぎ出す家庭を私は知つてゐる。私はむかし上品なあるお館の家庭教師をしてゐたことがあるが、炊事婦の手落から、晝飯が半時間以上も遅れ、そのためにお客は空腹に惱み、主人たちもじりじりしてゐたことがよくあつたが、さうした場合の人さまさまのシニユは、空腹といふものを知る機會に恵まれなかつた私、——その點では幸ひ今も昔とすこしも變りはないが、——單なる一觀察家で

あつた當時の私にとつて、それは全く見てゐて面白い光景であつた。だからして思ふ、腹の減つてゐる男の考へなど辿らうとするな、と。

さういへば狂人の考へなども、およそ辿らうとする勿れと私は忠告したい。そんなことより、メカニクな變調が、いかに何の意味のない數々のシニユを生起せしめてゐるかを、觀察した方がまじのやうに思はれる。いや、むしろさうしたシニユは、單にメカニクの變調のシニユだといふことに、思ひを致されるがよい。以上の考へはフロイドの心理分析書を読みながら、私の心に浮んだところなのであるが、いつたいフロイドの學說などは、およそありもしないものを判ぜんとする技巧テクニックでしかない。しかもこの場合、判じ當てようとする技巧は、説きつけようとする技巧と、肚をあはせてゐるのである。といふのはこの種の醫者は、患者が醫者の考へを鵜呑みにしてその心に抱き出すまでは、決して容赦が出来ぬからである。かうした醫者の藝當が世に幅を利かす場合も、かなり屢々だが、しかしそれはシニユのメカニク性に對する信すべからざるほどの無知をあらはすものでしかない。毛を筆り皮を剥ぎ、まさしく成佛してゐる雛つ子の胸部を、烈しく壓すると、悲鳴に似たぎゆつといふ驚くべき叫び聲が出る。それを見て驚愕の叫びを發した女がゐたとしたら、雛つ子の叫びより女のそれの方に、より多くの考へが潛んでゐると云へるだらうか？ とんでもない。さうした叫びは筋肉が俄かにめざめ引締り、それが胸部を強く締附けた結果のものに他ならぬではないか。いつたい諸々の

シニユの四分の三といふものは、かうした死んだ雛つ子の叫びのやうなものにしか過ぎぬのである。

ところがそれと反對に、それぞれの叫びに、何か一つの想念を求めようとする危かしい臆測に人が耽り出すとなると、〈無意識〉が立現れてくることとなる。こつちが待ち設けるからこそ、すぐと登場遊ばすことになるのだが、およそ無意識などといったものは、心の餘計ものにしか過ぎぬ。われわれの臆測する場合など見ても既に解るやうに、心の本家などといったものからして、はや餘計ものことが屢々とある以上、無意識などは心の餘計ものに過ぎぬことは、目を賭るより明らかではないか。この場合なにが甚だしい誤謬かと云ふに、人が考へ及びもせぬ心の發動ムウヅマンを臆測してかかることが、甚だしい誤謬といふわけではなく、その反對に、人が考へ及びもせぬムウヅマンが、同じく考へ及びもせぬ想念を意味するものだといふ二重の臆測が、甚だしい誤謬だと云ふわけなのである。つまり人が考へ及びもしない想念を、御丁寧にも考へる役目の別種のところ、いはば心のダブルのやうなもので、つち上げられてくるからである。しかもかやうな誤謬のなかには、なほ二つの誤謬が含まれてゐる。すなはちその一つは、あらゆるシニユ、或ひはムウヅマンは、一つの想念をあらはすものと臆測する誤謬であり、他の一つはこの臆測された想念を遡つて、その想念を懐いた未知の考へ手に思ひ及ぶといふ誤謬である。つまり神々のお化けといふわけであるが、かうした誤謬はいかにも本當らしく見え、また人の心を強く搏つものであるから、これに對しては充分に警戒してかかる必要がある。さうした

證據は枚擧におよぶ暇があるまい。あらゆるフォームは何かを意味してゐる。生きざわめいてゐる人間のフォームも、そのまはりの空間ぢゆうに、數千の電信を送つてゐる。單純な連中はかうした電信を解讀すること、つまりそのシニユから想念へまで遡つてゆくことが、至難事と思つてゐるやうであるが、ちやうど稀代の大政治家が英吉利や獨逸や波蘭のそれぞれの考へを無視しようとするやうに、具眼者は、さうしたものは曖昧なシニユから危かしげにでつち上げたものとして、屑籠のなかへ投げ入れて顧みぬのである。デカルトの天才のもつとも驚くべき一面で、且つもつとも人に知られるところ妙い一面は、動物に精神があると臆測することを、常に彼が拒否し續けた點にあると思ふのである。

第六十一章 閉ぢた眼 (LES YEUX FERMÉS)

船長はその非力をもつて、おのれより遙か強大な大洋を乗り切るべく、黒船を指揮するが、絶えず海といふこの大なるシステムを觀察し、これに對して術策を弄し續け、微細な變化なりと施さうとして彼は止まぬ。外的の力に面し、意地を遂げようとする勢ひがこの船長にはある。さまざまの抵抗と優に取組むだけの氣力が彼にはある。が、この剛毅な船長も人から受けたあしらひや、何かの陰謀や、戀に就てなり野心に就てなりの想定的な張合ひなどを、思ひ廻らし出すとなると、われとわが想念の上を、ひどくたどたどしい航海を續けるのである。波が押寄せて來るのが見える。もう口のかながが鹽水くさくなる。で、口を開けたまま、波濤のなかへ身を投じてしまふといつたことになる。こつちの論法一つで、われと絶望に陥りかねぬことは、百も承知のくせに、進んでさうした論法を求め、招かうとさへする。その論法がつゆ間違ひないことを確かめようと、獨りゆつくりひねくり廻さうなどと期する。が、もつと始末のわるいことは、些細な譯柄わけがらまでも追求せずには、氣が濟まなくなつてしまふことだ。だがいつたい精神のなかに行爲つゝを探さうとするほど、狂氣染みたことは、まさしく

他にないのである。行爲といふものは外部にあつて、抵抗によつてそれと知れるものなのだ。かやうに對象のない場合、われわれの不安や疑念や悔恨などの輪舞の音頭をとつてゐるのは、それは常にわれわれを同じ道のなかに引戻すところの習慣の轍であり、また人を得心させようとする躍起さ、筋が通つたといふ嬉しさなど、共にあづかつて力あるものと私は思ふのである。さういふ意味でわれわれは同時に訴訟人であり、辯護士であり、裁判官である。それに人の本性として、氣遣はしいものに對しては、兎角これを信じ込み易いといふことを、附記しておく必要があるだらう。想像上の災難に對して、われわれがから意氣地なく兜を脱ぐ原因の二三は、けだしこんなところにあるのである。だからして實際のところ、われわれにはこの具體的世界といふものが、無くてはかなはぬものである。といふのは具體的世界は、そのあるがままにあるといふ長所と、人間の理窟や情念を以てしては、變へることが出来ぬといふ長所とを、すくなくとも持つてゐるからである。

我々は對象なしには、眞劍にまた有効に思考することの出来ぬものであることを、しかとわきまへてゐなくてはならぬ。ロダンが作つたやうに、眼を瞠き、事物と繋がつた思索家を、へ考へる人として表象することに私は興するが、しかしこれは斬新きはまる考へかも知れない。眼をつぶつて考へに耽る人が、如何に世には多いことだらう。何もせず心でだけ考へを辿る人が、なんと多くあることか。が、數學家などにしても、絶えず書いたり畫いたりして、おのが思考の支へとなるやうな確乎た

る對象を創り上げてゐるのではないか。だからこそ彼等はその仕事をやりかけのままおくことも出来るのである。世界がその仕事をちゃんと數學家のために守つてゐてくれる。世界は思考の唯一の番人だからである。仕事を始めかけた上でなければ、考へに耽れぬといふ性分の人ほど、恵まれたものはない。手仕事のあとを辿つてゆく思考の一部を、世人は一般に輕んじてゐるが、しかし世人がおのが思考、大事な彼等がパンセと呼んでゐるものは、實はその情念でしかないのである。かうした場合に於てもまた、愛の情念は憎しみの情念より遙かに授かりが多い。といふのは愛はその對象を追求してゆくのに對し、憎しみの特性は出来るだけ敵から遠ざからうとし、ためにひとり孤獨のなかに於て、敵を判じたり敵を再びつくり上げたりするからである。われわれの敵は實は幻しなのである。

なるほど、ではそれに對する療法はといふに、先づ次のことを心得ておいて頂くことだ。すなはち想像上の經驗はすこしも實際の經驗とはならぬといふ常に忘れがちな平凡な眞理を、しかとわが肝に銘じておくといふことだ。見たことのないものは考へがつかぬと、よく人は云ふが、それでは言葉がすこしく足らぬ。何故なら見もし、觸りもしたこと以外のものは、何一つ考へがつかぬと云ふべきだからだ。だからもし建築技師的觀念、つまり足が地についたイデを心に起さうとならば、踏みしむべき地面や地形を熟視するがよい。つくづくとそれを見るがよい。悉皆の現實的觀念は、世界との接觸から生れてゐるものなのである。ところがその現實的なるべき人間が、一度、眼をつぶるとすぐ

樂しさうに謔言をならべ、それをまた傍らの人が信じ込んでゐるといつたやうなところから、われわれの混亂した歴史の説明がつくのである。へさうした浮遊性のイデオに抗する何かの助けが、われわれにはないものでせうか。人から想念を引離すことが出来るものでせうか。とけだし案ずる方もあらう。なるほど、それは大切なわざだが、深く秘められてもゐるわざだ。いつたい我々はわれわれの想念に對して、まるでそれが生き物でもあるかのやうに、烈しく取組んでゆく慣はしがある。が、要するに想念を考へ、抱き、支へてゆくのはこのわれわれなので、われわれなしには、想念は我々に對して何一つ齒向へるものではないのだ。だから不愉快な觀念なぞ心に起すまいと決意するなら、さうした不愉快さの力や棘などは、すぐとれてしまふ筈のものと、私は信するのである。これがつまり浮薄さ (frivole) の奥儀といふやつだが、これは輕蔑すべからざる奥儀なのである。本氣さ (serious) を拒むことを、一般の言葉でエスプリと巧く名づけてゐるが、これなども極めて本氣な訓へなのである。

第六十二章 聞分け (SAVOIR ECOUTER)

へ人間のうちに何の想念をも想定せぬがよい。とパラドックス好きの賢人は云つてゐる。といふことはつまり、人の云つたことをこつちが云つたとした場合、こつちの裡にあるに違ひないやうな想念を、その人のうちに想定してはならぬといふ意味である。ひどく非條理的な言葉や、うはべだけ尤もらしい口先きといふものは、あらかた情念の二字で説明がつくものである。われわれのからだの仕掛といふものは、名づけ得て妙なエモーション (感動) が、筋肉のあひだをかけ廻り出すと、何の許しもなく慄ひ出したり、そそくさしたり、たまげたりするばかりか、叫ぶこともあり得るし、また何のつもりもなく、ただ記憶の襲に基いて、言語を口走らせたりさへすることがある。酔つばらひが悪態をつく時、なにも神や悪魔を考へての上ではないのである。お喋りの言葉にしても、殆どすべては、いはば機械的に組上つてゐるものだし、凝つた念入りの言葉にしても、そこには無駄言葉の一部が含まれてゐて、以前はなるほど考へ抜かれたものだらうが、今はすこしもさうではないといつた一部を露呈してゐる。だから結局のところは、言葉も單なる音響に過ぎぬことが屢々とあるのである。鋤が古

鐵の音を發するやうに、サーベルががちやがちやいふやうに、風が吼えるやうに、また扉が軋るやうに、興奮した人間は言葉の音響を出すものなのである。さうした譯合のものを、理解しようと努める人も憫れだが、理解し得たと信じてゐる人ときたら、さらに憫れなものだと思ふ。といふのは理解すべきなものも、そこにはありはしないのだから。

が、ここが注意のしどころだ。といふのは生きた、肉色をした、歌ふ人間のその言葉のなかには、理解すべき美しいものが屢々とあるからである。美は均齊のとれたからだ、規制づけられた情念とを告げるものゆゑ、決して人を欺かぬ^{シニユ}しと云へるのである。立派な歌ひ手は正しく歌ふと云はれてゐるのもさうした譯からである。同じ理由からして私は詩人に信頼を繋いでゐる。といふことは常に私は、詩人の言をもつともよい方に解してゐるといふ謂ひだ。すなはち言葉と一致し得るもつとも美しい、もつとも人間的な、もつとも完璧と私の眼にはうつる想念を、私は常に詩人のなかに想定してゐるのだ。それこそ世に云ふ聞惚れ(Conter)の如きである。また私が幾何學者に耳を澄す場合も、それとちやうど同じことで、彼のやさしい始めの證明の餌に惹かれて、私は彼の美しい證明を待つ氣持になる。その結果、もし私に證明が見出せなくとも、それは相手が支那語を喋つてゐるやうなもので、解することの出來ぬのは、ひとへにこつちのせむだと、むしろ私は考へたく思ふ。そもそも柳眉を逆立てた女の言葉に、耳をかしたとて何にならうか。そんなのは支那語もどきのちんぷんかんと、

すぐさま私は見極めをつけることにしてゐる。云つてみればそこには何の考へもないのである。偉大なものも、美しいものも、人間味のあるものも、何一つとしてそこに解しようがないのである。だからして私はそれを、聞いて聴かずと受け流すことにしてゐる。

柳眉を逆立てた女といま私は云つたが、それではすこしく片手落ちだ。癩癩を起した男にしたつて、より論旨明白とはお義理にも云へたものではない。たとへば男が長靴のことや、カラー・ボタンのことで苛立つた場合の悪態文句ぶりなどには、およそ耳をかしてやるだけの値打もないからだ。だが柳眉を逆立てた女の方が、男より多辯にまくしたてるとぐらゐは、云つて正しいことだらうと思ふ。女といふものは突き詰めやすいだけに、わからずやのことが多いからである。また言葉を絶ち切るだけの爆發力が、女のうちに取置かれてないためにも、それは怖らく依るのだらう。だから女の長文句は鉤屑のやうに、長いきれきれとなつて出て來るのである。ためにこつちが世慣れぬ聴き手だと、綿綿として盡きぬこの長文句を、あたまた刻まうとか、想念として翻譯しようとかいつた氣に、唆られ易いために、男の呪咀の言葉の場合よりはるか欺かれがちといふことになる。だから車轆きが悪態をつらねたり、女が長々と咎め立てをするなどは、きまつて單なる噪音に過ぎぬと見てよいのである。

ピアノは音楽を奏するために作られたからといつて、その上に手をおく人には、みな巧く奏せられると思つたらそれは氣違ひだ。人間の言葉もちやうどピアノのそののやうなもので、拳固でそれを鳴

らしておいて、残すべき価値のある音の組合せを出させようとしても、さうは巧くは行かない。事實、私が癩癩のあまり口走つたこと、最初の衝動に驅られて云つたこと、または苛立つたり驚いたりして口を衝いて出た言葉、——さういつたものが當の私にとつて、何かの意味があつたためしはつひぞなかつたが、それが聞く方の相手にとつても珍分漢聞だつたことは、むしろ有難いくらゐるものである。私が最初の瞬間に口走つた聲のひびきのなかに、なにかを掴まうと骨を折る人は、だから賢くもなければ正しくもない。人間は人間を聞分けることを、學ばねばならぬものなのだから。

第六十三章 酩酊 (L'IVRESSE)

酔つばらひのなかには、深遠なものが潜んでゐる。つまり全的拒否と、人間稼業の辭任とがそれだ。秩序立つた呑み方をするには、本氣さに抗するもつとも本氣な手立てである。むかしのギルドのなかには、酒を飲む一種の術(サイエンス)があつて、それに長じた人を Sublime (えらぶつ) と云つてゐたが、極めて深遠なアイロニイと、極めて蠻的なアイロニイとが、この一語には見受けられる。といふのは一定の方法に依つて、われとわが身を廢せんとすることは、sublime (崇高) とまさに對蹠するものであり、従つて一種の崇高味を帯びるものだからである。まさしく凡庸でない二三の呑み助を、私は知つてゐるし、眞の詩人のなかにも、さうした飲んだくれは、一再ならず見出される。聰明すぎるため、或ひは感受性が強すぎるため、酒に親しむことも、人には往々にしてある。けちんぼがしらふなのは、おのれといふものを出し惜みするからで、つまり一種の逆刷りといつたわけだ。

呑むのは渴きを醫やさうがためではない。また欲望のためからでもない。欲望などは微力なものに過ぎぬ。あらゆる熱情家は渴望のない呑み助である。動物的生活を見れば解るやうに、欲望などは意

に満ちさへすれば、それで充分にかたがつくものやうに思はれる。だから欲望に随ふことは、慧智の一部なのであるが、かうした慧智はさげすまれ過ぎてもある。以上のことを換言すれば情念につける薬があるといふことになる。すなはち愉悅プレイジューを興へることがそれだ。なるほど快意プレイジューは最善の暴君だが、しかしその御治世は短い。それにひきかへ興奮や苛立ちは、ますます苦痛を烈しくしてゆく點からいつて、遙かに怖るべきものがある。呑む愉しさに自然は制限を加へたが、呑まんとする狂熱に對しては、施すところがない。熱情家はその欲するものに飛掛るのでなく、むしろその懼れてゐるものに飛掛る場合の方が、遙かに多いやうに思ふ。人を殺さうとする欲望が、人間のうちにあるものは、さう易々と私には信ぜられぬが、人殺しといふものは、それと知りつつ、われとわが不幸を仕遂げに、まつしぐらに突進してゆくといふなら、私にも解る氣がする。つまり人殺しは理性や分別に疲れ倦んで、力づくの荒療治にわが身を投じ、以ておのれ自身や他人をも、安賣するに到るのである。かういつた憤激や絶望の念は、賭博者のまたよく知るところで、いはばこれらは悲劇的な自殺に他ならぬのである。おのが母親を手にかけてオレストは、われとわが身を殺すにも等しいのである。存在に害を及ばさうとするこれら苛立つた存在たちに對しては、用心をなさるがよい。が、酔つばらひといふものは、後悔と犯罪の一聯の結果を、つくづく眺めて、さて盃をさらに一杯と重ねてゐるのである。

酩酊イグレスにもいろんな型ジャンクがあるし、またこの酩酊イグレスといふ怖ろしい言葉にも、いくつかの意味が含まれてもゐるが、その總てを通じて浮上つて來るものは、反省の拒否、或ひはわが身に對する濟まなさの確信の念といつたものである。より悪い度過しを以てしなければ、醫やしがたいといつた度過しがあるものである。熱狂的心酔は人間最高の特質である。何故なら精神の前で赤面することは、最も大きな恥だからである。だから證明が拙いことを感ずる人は、結論に早走つて、あらゆる過ちをしでかす。道理を聞きわけぬことは、怠惰によるよりも、興奮のあまりのことが、遙に屢々である。どんな些細な議論のなかでも、さうしたことはよくあるが、事のむつかしさや、不確實さに比例して、ますますそれは甚だしくなる。虚妄は法外な虚妄ヴァンにまで達する。政治に憑かれた連中が中立を嫌つて、左右の兩極に奔るさまを見ているがよい。みな同じ譯合からだ。彼等とても人として決して悪い方ではない。しかし彼等の思想の未熟さか、考へることの七面倒さそのものが、彼等を驅つてさうさせるのである。食人種よろしくの政黨が出來上つた所以である。

かうした驅り立てムッパマンに、すつかり無關心でゐられるといつた人間は誰一人としてない。あらゆる社會主義者はコムミュニズムの方を眺めて、心そそられてゐる。それは妥協するといふ不都合さから免れさして貰へるからだ。同じやうにあらゆる穩和派は、專制や、奇特な戦争の方に引きつけられてゐるが、それらはヒロイックな救済の道であり、また渴望の的たる陶醉だからである。熱中のあまりのこ

となら何をしようか赦されてゐる。あらゆる戦争のなかで、宗教戦争がもつとも残忍を極めてゐたわけが、かくて私にうなづけるのである。つまり想念に依つて、残忍となつたのだ。疑ふことが怖いので、かうしたことになるのだ。だから假りにでも疑つておく必要がある。これこそ人がおのれの精神に對してつくすべき禮遇だ。それに反して屈辱的とも云ふべきは、弱みの疑ひ方、つまり受け納れた疑ひ方だ。その逆が強味の疑ひ方だが、これはもつとも果斷な、またもつとも鞏固な^{パッセ}想念から來る。かうしたこむづかしい戦鬪のなかを突破することを手始めとしたデカルトは、だから出だしが極めて見事だつたと云へるのである。

第六十四章 見物人 (LE SPECTATEUR)

見物人であるといふことは、些細なことでもないし、また容易なことでもない。人間的スペクタクルに對しては、われわれは極めて感動を覚え易く、それに自體、他人の不正義や情念に關しては、われわれは鋭い批判家ゆゑ、すぐとドラマの渦中に、飛込みたがるからである。行動に及ぼうとするかうした苛立ちの念に、是が非でも超克せねばならぬとする恐怖の念が交つて、われわれは最も烈しい躁狂者の列中におかれることになるのだが、それはちやうど醫者が病人を看護しながら、自分も病氣同然になつてしまふのと同じやうな具合だ。眞底には高邁なものが潜んでゐるかやうな過激さの作用といふものは、一般にあまり氣づかれてをらず、人はただ諸結果のなかによからぬものを認めるばかりで、そのよからぬものの起りが、情念のなかにあると認めるまでには、極めて稀れにしかいたつてゐない。これは何世紀とも知れぬ昔から、人間がかかつてゐる罫であつて、これが警しめとしてプラトンの次のやうな言葉をあげてみたい。眞の不正義とはおのれの心の内部に於ける擾亂のうちにあるのに對して、第一義の正義とはわが身を自制し、われとわが統御を全うするにある。よつて冷

然と意識的に人のものを奪ふ場合なら、道理あつての譯合となす望みがある。たとへば醉漢の手から刃物を奪ふ場合がそれだし、または自分で耕しも出来ぬくせに、百姓の手から土他を奪つた場合のやうに、結果を見てから翻然とその非を悟るといつた具合にもなれる。が、怒り猛つた人がその持物を、奪はれた元の人に返すといつた時には、先きゆきもう何の望みもない。盲目滅法の憤りが巧い具合にあたるといふことは、ただの偶然に過ぎぬし、よしんば正義の義憤であらうと、左右に不正義を幾分かまき散らすには濟まぬのである。さういへばどんな改革だつて、抽象的なその動因ならいざしらず、およそ正しいものでも高邁なものでも決してない。といふのはその内幕といつたものに入つてみるならば、どんな改革でもおよそ正しくはないし高邁でもないからだ。改革の諸々の結果に關する詳しいことに就ては、いくらでも議論がつくものだから、ここには取上げぬが、もつとも高邁な人が必然的に排され、そのくせもつとも卑怯でもつとも嘘吐きのものが、生殘るチャンスに一番恵まれてゐるといふあらゆる改革に通ずる一原則を、勘考してみるがよい。かうした見方でゆけば、改革はその用ふる手段が、狂暴になりゆけばゆくほど、ますます變質し退化してゆく定めのものでお解りにならう。

だからこれが救済の道は、常に審美的なものにあるといつてよい。何故なら人間的スペクタクルを無視しようとするのは、愚の骨頂だらうし、またおよそ出来得べきことでもないからだ。ゆるに

方に於ては、感動的なまた眞實一路な人間的スペクタクルが必要と共に、同時にまたあきらかな、忘れぬ表徴サインに依つて、見物人からそのスペクタクルが隔てられてゐることも必要である。そのことは演劇が獨自な手法をもつて、證あかししてゐるところだ。即ち演劇に於ける最も力強い手法といへば、舞臺と棧敷との隔離がさうだ。われわれの現實生活とかけ離れたその架空譚がさうだ。叫びわめきを退けるあのポエジーがさうだ。また観客がほつと目ざめわれに返るあの幕あひや、感動を中斷する書割や場所の轉換や、また何の現實性のないその舞臺装置など、いづれもさうした手法の一つに他ならぬ。詭計トリック澤山で至妙なこの技法は、同じくドラマをアクションや、短刀一閃や、鮮血の滴りにまでも追ひやるが、一方に於て観客の注意を常に臺詞の方に連れ戻してゐるので、それを理解しようとする唯一の必然事から、われわれは克ち難い感動の深淵に危く陥らずに濟んでゐるのである。かういつた馴れ合ひの約束事の技巧に依つて、観客は椅子にふみとどまつたまま、舞臺上の罪のない犠牲者を救はうとする義俠心を思ひ止まつてゐられるのである。かやうな意味合ひから、これと對立させてメロドラマの特質を擧げてみることも出来ようかと思ふ。すなはちメロドラマは人を感動させることを唯一の目標とし、たやすく所期の目的に達するのであるが、それと同時に極めて怖るべき腕づく自慢たる人のドン・キホーテ性を、不謹慎にも煽つてゐるものなのである。ともあれ私は高邁な感情が稀れなものとは、決して思はぬのである。稀れなのはおのれに對する訓練であつて、かうした訓練なしには、判斷な

どおよそあり得ぬものなのである。が、判断だけでは事は足りぬなどと、決して云つてはならぬ。何故なら判断だけで事を試みるといふことは、人には絶對になく、きまつて人は理解しきる前に變へようと望んで、手を差伸ばすものだからで、それだけではや別のドラマがそこに持上るものなのである。

第六十五章 見物の見物 (LE SPECTATEUR DU SPECTATEUR)

想像力といふものは、先づ以て驚ろかしのためし方 (un essai de l'épouvante) のやうなものである。二人の子供と下女が、狼ごつこの遊びをやつた話を聞いたことがある。寢室の敷物に使つてゐた狼の皮を下女が冠ると、子供たちはひどく怖がるやうな振りを見せてゐるうち、すぐと本當に怖くなつて来て、夢にまでそれを見るやうになつたので、親たちはその遊びごとを禁じたといふ。子供は自分で塗りたくつた自分の顔に、怖氣づくことが屢々だと、モンテーニユは見事に云つてゐるが、子供は叫び聲や身真似に依つて、ことさらに恐怖を探し求め、ちやうど笑ひの場合に於けるやうに、こちらで望んでゐる以上に、遠くに連れ行かれるものこのことを、それに附言する必要があらう。氣違ひ笑ひと巧みに稱せられてゐる笑ひは、さうした點でわれわれを教へるところが極めて多いのである。それにこの種の痙攣といふものは、健康のためには頗る好いが、しかしわれわれの内臓部分を、いたつて不躑躅きはまる遣り口で、かき亂すのがならひなのである。恐怖も一種の病ひであるが、笑ひに劣らずわれわれを動願せしめてゐる。われわれの全生涯は、恐怖を打負かすのに費されてゐるとも云へよ

う。われわれは恐怖を克服したと考へることに、限りない愉快を持つ。われわれは恐怖を審問する。恐怖を操る。——と、まあいつたのがスペクタクルの核心なのである。俳優の藝のすべては、狼の皮の下に人間の顔を、常にたつぷり示すことにある。観客の心得といふものも、俳優の藝に劣らず機略澤山のものであるが、それはこつちを怖がらせたり安心させたりするあらゆる表徴に對して、ちつと注視を怠らぬことにあるのである。

怖ろしいお話を、人にせがむくせに少女は、おのが感動が許された限度を超えようとする、あらかじめ用心深く兩耳にあてがつてゐた指先きで、時折りわれと耳を鎖すやうなことをする。人が感じ方を學び、恐怖や驚駭に名稱を與へるに到るのも、その趣きはちやうどこの少女の場合と同じで、いつたい現實のドラマにあつては、恐怖にも驚駭にも、名も形もないのが本當なのである。だから謂れない恐怖に陥つた場合、逃げる人は遁走してゐることも、恐怖を抱いてゐることも、解つてはゐないものである。といふのはスペクタクルに對してゐるやうな餘裕が、すこしもそこにはないからである。もうわれ自らのあるじたり得なくなつてゐるからである。つまり世間で云ふ「自分で自分がもう解らぬ」ためなのである。スペクタクルは大いなる力の制定 (institution) であり、おのれといふものを考へる最初の試みであることに思ひをいたさねばならない。「observez-vous」(身を慎しめ。汝を觀察せよ。) といふ日常語が今ふと心に泛んだが、これなども身を治め自制せよとの一つの警語である。言葉

といふものには、かうしたいろいろの祕密が藏されてゐる。おのが言葉をよく知るものは、世の大切なことすべてを知るにいたるだらう。

《良心》(conscience) といふ語は美しい言葉であるが、その一般的な意味合ひから云ふと、束縛なき自由を拒否するものである。あるがままのおのれを知ること大切だが、これは決して容易なことではないなどと半可通は云ふが、見物人としての第三者のポジションを、充分に考察してをらぬために、そんな言を吐くのだ。良心には自我の拒否が含まれてゐる。これがつまり遊戯規則、プレイのルールといふわけだ。人がおのれに就て知り得るところは、その變りゆく點だけなのだ。だから鋭敏すぎる人には、眞摯さといふことが、致命的なイデオといふことになる。オセロがその強い手でデステモナのうるはしい頸を締めた時、まさしく彼は眞摯であつた。樵夫の上に倒れる木のやうに、眞摯だつた。物質が眞摯のやうに彼は眞摯そのものであつた。しかし精神といふものは、およそそれとは種類を異にするものなのだ。

私をほとほと感服させるやうなトリックを、むかしの古代悲劇は案出してゐる。すなはち中央にスペクタクルをおき、そのスペクタクルのまはりに、スペクタクルの見物人を配して、それをコーラス團に組織したことだ。だから一般の見物人は、その眼下にドラマのみならず、見物人であつてはならぬ見物人を、自分が見物人といふことを知らぬ見物人を、見ることになつたのであるが、これこそ省

察の崇高な表象であり、まことに想念の道場でもある。へもしもわれとおのれをなほざりにしたら、またわれとおのれを信するやうなことをしたら、あれがこのおのれの姿なのだ！と見物の見物には考へ込む餘裕が出来、かくて人は信じ込み方、またモンテーニユの所謂不信じ込み方を習ふにいたるものであるが、この遣り口を忘れて狼ごつこを演じようとするものは、狼となつてしまふだらう。

第六十六章 演劇 (LE THÉÂTRE)

偉大な俳優は身振りすくなで、擧め顔などつくることは、なほさらに寡い。それに一つの姿勢から他の姿勢への移り具合といつても、實に手早くなので、たとへば人が名優を回想するやうな場合、名優の動き廻つてゐる姿でなしに、ちつとして喋つてゐる面影が、髣髴とするばかりであらう。もつともそれにはいろいろ外部的な理由もある。例へば現実的なアクションは、常に眼にとまらな勝ちのものだといつたやうな次第で、短刀一閃とか、倒れる男とかいつたものは、親しく眼にしたものといふよりは、さまざまの結果に依つて建直してみたものと云つてよい。だからさまざまの結果を見ずに、ただその移り具合だけを眼にした人は、常に疑ひ半分の裡に取残され、本當に見たのかどうか、わが眼を訝らざるを得ぬのである。ところが自然的な身振り、つまりアクションの始まりかけといふやうなやつは、さらに漠然としてゐるのが常だ。いはば控へられ止められたそれゆゑ、當人自身の裡に於ても、しかく曖昧を極めてゐるのである。無言劇俳優といふものが自然から遙に遠く、結局はゼスチュアを組成したものの、いはば一種のダンスのやうになつてゐるわけが、ここからしても解るのである。

従つて身振りビズネチャの規律とは外的なもので、外形的なものを表現するのみと云つてよいのである。

次にそれとまた違つた、遙かに内的な理由を、身振りに於て省察してみることとしよう。人間には自分の喋つてゐることが自分にも聞えるが、動いてゐる自分をわれと見ることは、問屋が卸さぬのである。動いてゐる時のおのれをわれと感じ、われと觸れることは出来るが、しかし見物の眼に映じたままのおのがアクションの外形といふものは、當の演じ手には認知し能はぬのである。つまり自分自身の外に身をおくといふことは、人間には出来ぬからである。だからその身振りなり、アクションなりをもつて現した自分自身のすがたといふものは、他人の證言 (testimony) に依つてしか、われとおのれに知り得ないのである。《模倣の模倣》であり、對者たる同じ人間の鏡のなかに、身真似ビズネチャを辿る手段でもある本式の舞蹈ダンスといふものは、かくして生じたものである。相手がこつちを模倣するそれに、こつちも跋をあはせつつ、こつちが相手を見るやうに、われとわが姿を、いはばそこに於て見る。自分の姿が自分に現れる。如何なる表徴を自分が現してゐるかが自分に解る。自分自身に就いて、人の眼にする通りが、自分に映る。——かう云つたやうなことからして、本式のダンスの入念さなりスタイルなりを、十分に解明することも出来よう。演劇の真正なゼスチュアといふものは、集合體的なものであることが、ここからも察せられるのである。

それと同じやうに、言葉といふものも、その當の人柄の固有の本性を、他の人達にあらはす如くに、

その人自身にもあらはすものなのである。對話などの折り、言葉といふものに依つて、對者が私にあらはれてくるやうに、私自身といふものもまた、當の私にあらはれてくるのである。言葉に依つて私にあらはすものを、私は知つてゐる。それを私は調節することも出来る。隠れた接觸コンタクに、感情に、感情に、それを私は合致させることも出来る。私がこれから云はうとすることと、私がいま云つてゐることとを、同時に私は知つてゐる。私は私自身の見物人である。——といった具合にだ。いつたい思考するといふことは、どこかにゐる一見物人と、意見が符合することの謂ひであるゆるゑ、私の言葉は私の想念であるとしてよいが、それに反して、私の身真似は、それが規制せられたものである限り、他人の想念パシエでしかないのである。だから身真似は一般共通の想念を現はすものとしてよい。身真似は典禮と儀式とからとされてゐる所以である。

言葉は創意のはたらきをする。といふことは、人間のもつとも隠れたところを、言葉は表現するといふ意味に於てばかりでなく、話し手自身が話してゐるうち、われと氣づくに従つて、絶えず言葉が修正されゆくその過程から云つてまさにしかりなのである。言葉上のかうした効果によつて、演劇に於ては、現前の人生がそこにくりひろげられてくることとなるのであるが、さらにそれはへ出たとこ勝負の口先き一つといふ先きの見透しつかなさの所爲で、ドラマ自體が新たに若返へりをさせられ、恰も一度限りで繰返しの利かぬもののやうに、そのドラマが見え出し、いへば未來の縁カキにと、ド

ラマが吊下げられてくるのであるが、さてさうなつてくると俳優がどうこの先き演じ出すかが、見てゐる方には皆目わからなくなつてくる。俳優はそれぞれの分別でことを断じたり料簡したり、或ひは躊躇したり、突進してみたりしだすからだ。従つてそれは俳優の聲と、彼の全身との間の演技にしか過ぎなくなつてくる。が、かうした演技が實にアクションそのもののシンボルなのである。だから悲劇俳優は各度毎に彼の王冠を賭してゐるといつてよい。かうした隱喩法メタフォールがつまりは彼を王者たらしめてゐるのである。それに反してパントマイムの俳優は、言葉といふ鏡に、おのが姿を映してみることが出来ぬゆゑ、自由さには遙に乏しい。どちらかといへば記憶に依つて、おのが身を律してゐるだけだ。従つてそのすべてはもう見越されてしまつてゐる。未來といふものがそこには既にない。時間ももうそこに存在してはゐない。ところが本當の演劇の場合にあつては、観客は（避け得られぬもの）と（豫見し得ないもの）との二重の混淆に依つて、何よりも痛切に時間といふものをそこに悟らされてゐるものである。そこからして思ふことだが、言葉のメカニクな再生を添へて、スクリーンの上スクリーンに映じ出された映畫俳優のゼスチュアなどは、到底に舞臺俳優のそれと、取つて替ることの出来ぬ理由が、思ひ當られもしよう。古代演劇にあつては、コーラス團といふものが俳優の代りに喋つて、観客の圓陣にお知らせの役をつとめてゐたが、現代のあらゆるスペクタクルにあつては、見物人はその緊張ぶりや、水を打つたやうな沈黙のヴォリュームや、敬虔な沈黙の律儀な實證エビデンスともいふべき喝采カホーの報償

などによつて、語つてゐると云つてよい。それに見物は、俳優にさうしたこつちの意味が解つてゐるし、また現に解りつつもあるといふことを、ちゃんと承知し、俳優からのそのお返しレスポンスを心待ちもしてゐるのである。かうして見物は俳優を急場のなかや、感情激發パロクシスムのなかへと擔ぎ上げてゆくのであるが、「詩」や「雄辯」の性質を同時に享けてゐるかかゝる力強き効果は、生けるなま暖い言葉を先づ前提としてこそ、その實も上つてゐるのである。

第六十七章 喜劇役者 (LE COMÉDIEN)

アルパゴンの「持參金なしでだぞ。」とか、スガナレルの心臓右側説の「當節は何もかも變りましたな。」とか、ハムレットの皮肉な「言葉、言葉、言葉ぢや。」などといった有名な臺詞文句は、極めて云ひ方のむつかしいものである。かうした臺詞を、人に合點のゆくやうに抑揚をつけて喋ること、つまり讀者なり見物なりにそれと察せられるやう、わからせるべく努めることは、もつとも甚だしい誤りと私には考へられる。といつたからとて、眞實のめりはり (intonation) といふものがあつて、それは音樂のやうに、聴きながら覺えられるものやうに、私が思ひ込んでゐるわけでは決してない。佛蘭西の俳優でもつとも有名な一人は、彼の名高い劇團を訓練するのに、體操をもつてしてゐるといふ噂を私は聞いたことがあるが、體操で身ごなし方ばかりを調整しようと企てたのであらうか、または發聲法の準備にもなるとの心算もあつたゆゑであらうか。そのところは寡聞にして私は知らぬ。しかし齒をくひしばつてアの音を出すことの出來ぬのは、誰しも知つてゐよう。が、齒ばかり分けて論ずることは出來ぬ。呼吸や、姿勢や、全筋肉のマスが、發聲にはかかはつて來てゐるからである。

ゆゑに立派な歌ひ手の場合にあつては、指の先きから足の裏までの身體全體が、音を嚮導してゐるといふことが出來よう。まさまざと眼に見えるやうに、一種のダンスがその場合それに伴つてゐるのだ。ところがそれとは逆に、足から離れて、まるで情念とは關係のない支へ臺の上にもおかれたやうな胸部から發してくる聲遣ひに接することがある。だがこのわれわれを運ぶ足、擔つてゐる足、大地を打ち、思案に立止り、或ひはためらひ、或ひは引きする足、事件に邁進する足、さういつた足が情念と何のかかはりなしに濟むものであらうか。一本の指に疼痛を覺えたばかりで、われわれ人間は身體全體ごと跳び上るではないか。さうした具合に、あらゆる藝術のうちにあつては、身體が一團として不可分的に現れるものではないだらうか。流動體のやうに權衡が取れ、均勢を保ちながらにして。ところがそれと反對に、からだが僵儻のやうに結ばれ、鈍重な厚ぼつたさができ、隔ての壁が設けられたみたいになり、死んだやうなそれが重さとなつたら、そこには何一つとして美しいものが約束づけられぬこととなる。生理學のこのやうなコンディションは、詩人にも作用し、散文の藝術家さへをも變へてしまふものである。しかし私が昨日スピノザのなかに見つけた次のやうなデカルト式命題「心象といふものは人間のからだの妄動 (affection) にしか過ぎぬ。」といふ卓言を、完全に理解することは、何人にもしかく容易ではないやうである。

それよりもつと誇示的な、一種の告白藝術ともいふべき俳優藝術に就いて、話を戻すことにしよう。

俳優の場合にあつては、聲は一種のゼスチュアにしか過ぎぬことを、私はすくなくとも認めるものである。臺詞一つにも時として素晴らしい効果を得るすべをわきまへてゐたかの名優ゴット^{*}は、そのゼスチュアを前かがみにして發聲することを、彼の手段の一つとしてゐたが、それは自在に口腔を開かんがための一便法たるに過ぎぬ。ところが術學者は舌を按配し、口を圓くして、メカニクな母音を出したりなぞするが、モリエールがかうした好餌を見逃さう筈がない。私も一人知つてゐたが、舌を英國人式に操らんがために、鏡や鉛筆で小細工をする教師がゐたが、かうした奇態な音聲に煩はされた人間を、英人そつくりと人は思ふだらうか。決してそんなことはない。先づ以てこつちが、頭天頂から足の爪先きまで、英人式になるやうに出来るだけ努めてみるがよい。さうすれば自然と英語のアクセントが出るやうになるだらう。服装や、履物といつたやうなものまで、アクセントを出すのに、大いにあづかつて力あるものなのである。

舞臺はすつかり人間的なものである。ある種の音聲をこだまさせ、他の種の音聲を消しつつむといつた肉の窪みのやうなものである。だからどんな偉大なる名優でも、先以て舞臺におのが在り場と、通り場所とをきめなければ、その颯爽たる登場も、聲加減に依つて散々になつてしまふだらう。といふのはわれわれの態度や、準備や、發進^{エラン}といふものは、他の人達や、またその人達がわれわれに開けてくれる通り道に、依存してゐるものことは、明らかだからである。だから相手の俳優が右側でな

く左側にゐたばかりに、首を急にねぢむけねばならぬ仕儀となり、そのために締め殺されさうな聲が出ることも珍らしくはない。さうなると出だしを變へて、その第一歩の踏み出しから初めに遡つて、なにもかも改めなくてはならぬこととなる。だからして俳優はそのポジション^{ポジション}や通り方に、さしも入念な注意を拂つてゐるのである。シチュエーションといふ言葉がよく示してゐるやうに、舞臺上の位置^{ポジション}といふものは、ダンスに於るフィギュール(型)のやうなものである。それに反して寫實的なドラマのなかにあつては、いはゆるシチュエーションといふものはなく、諸情念はそこで衝突しあひ、話振りは戸にはさまれたレッツ卿の場合のやうなあはただしさで、さうした際の自然味といつてもそれは人間から湧くのでなく、一聊の詩句から過ぎぬのである。いつたい臆病心は自然らしいが、臆病者は自然らしくないといふことは、人のよく知るところでもあらう。演劇は感情の道場^{エコー}であり、その公立^{公立}技藝學校の如きものであると、ここからしても云へると思ふのである。

註 *ゴット 一八二二—一九〇一、有名な喜劇俳優。

第六十八章 舞 蹈 (DANCES)

情念の害毒のすべてといへば、いらいらと人をあせらせることにあるが、ダンスが悉皆の情念を教化するものことは、明らかな事實である。人間にとつてその身體の裡に顫動や震慄を覺えること、つまり各瞬毎に抑止されてゐる發進デールを感ずることほど、始末の悪いものはない。優柔不斷はこの世に於る最悪の状態であると、言葉は違ふがデカルトも云つてゐる。が、苛立つてゐる人達に、かうした類ひのお説教は、するだけ野暮といふものである。憐れにも彼等はかう反駁するに違ひあるまいから。

——(この世で最悪の状態は、おのが愛情のかづけ場所を誤ることである。つまり相手の女に見榮や背信や不實を見出すことである。) かう云ふ彼等には嫉妬に狂つた男が、長々しい夜すがら眠れずよづにゐるといふわけは、心の發動よづのためで、決して想念オッセのせむではないといふこと、——また固定や定着が想念を睡らせるやうに、斷乎たる振舞は想念を新しい道に導くものこと、——これらを彼等は悟りきれずよづにゐるのである。いつたい情熱家とは論法好きの男の謂ひだが、論法することこそまさしく當人にとつて、もつとも性に合はぬところのものなのである。だからその反對にプラトンの勸めてゐ

るやうに、體操や音樂に従つて精を出すならば、——また今してゐるやうな身もがきのかはりに、彼の筋肉を一齊にそのフォームに順じ、その力に應じて鍛鍊するとしたら、さうした苦い想念から見事に解き放たれるに違ひないだらうし、その効果の靦面さには、けだしわれながら驚くに相違ないのである。ダンスといふものは精神全體を占めるものことは、ダンスをする人の顔の均齊さでそれと解らう。踊り手は彫刻家の最初のモデルであつた所以である。

しからはダンスの最初の教師は誰であつたらうか。神か、或ひは神に依つて訓へられた神官だと、彼等は想像するだらう。が、社會學者は眼鏡を光らせ、ここに割込んで來てかう云ふ。「人間は人間にとつて一つの神である。が、それには崇拜の時機、つまり模倣のモーメントを擲む必要がある。孤獨の人間は長いこと疲勞のため氣力なく、ついで倦怠のため痙攣症にと陥つたのである。が、やがて人間が孤獨から集團へ移行するにつれ、集團グロウプそのものが痙攣症となり、そこから違つた神、違つた宗教が生じたのであるが、同じく人間はそのおのが動きを、さながら鏡のなかに於るやうに、他の人間同胞のなかにそれと認め、おのれを模倣する人をまた模倣するといふ結果になつたので、そこからして人それぞれに、相手を驚かすこと最も妙い動き、ひとりでに待たれる動き、なだらかに後が續く動きに、赴くやうになつた。かくして必然的に自己と對者との間に注意力が分たれることとなり、最古代の言語ともいふべき甲から乙へのあの絶えざる不斷の應答レスポンスが、生み出される結果になつたものであ

る。」

「ちよつと私にも臆断をお許し下さい。」と社會學者に私は云はう。「さうした場合、視覚といふものは紛れ易くなつてゐることを附記する必要があります。こつちの動きが、相手のすがたをさらに踊らせてゐるばかりか、いつたい如何にして踊つてゐるかは踊る當人には見えぬものだからです。それが知れるのは、ただこつちの内的の感じに依るばかりなのです。踊り手の群が手をつなぎあつて踊るあの伏目のダンスは、シニユの交し合ひに依つて、生れたものと私は思ひます。手を直接につなぐことによつて、筋肉の身構へ方のその些小な告げしらせにいたるまで、相手にそれと知れるのです。ですから踊りの共同的な規則が、却つて踊り手の一人一人をさらによく解放することになつてゐるのです。ブルタニユの市場の下で、さうした伏目のダンスのうねりながらのぐるぐる廻りを、嘗て私は見たことがあります。それぞれの踊り手の顔に泛んだ好ましい清朗さは、一樣にみな彼等を美しく輝かせて、さながら繪様帯^{フレイズ}の人物のそのやうでした。ダンスのかうした奇蹟的な効果は、また最古代の彫刻に見受けられるところですよ。といふのは人間のからだ、先づおのれ自身をわれと纏め得られるのは、また最初の制作^{クワッツル}ともなれるのは、それは秩序のなかに於てのみだからです。人間といふこの立騒いだ動物のなかに於る最初の氣まじめさ (sérieux) といふものは、だからダンスに依つて世に生じたわけで、そればかりか、最初の崇拜、最初の感謝、また目論まれ成就されもした秩序に依つて生

じた最初の想念といふに憚らぬものなど、何れもダンスが基となつて存在したわけなのです。各々の男のうちにアポロンはかくして現れ、各々の女のなかにヴィーナスは、詩人の云ふやうに、端正なグラーズたちの合唱を伴ひつつ、かく現れたのです。以上申上げたことからして、繪様帯打毀しの最初の主題を御判断願ひたいと思ひます。あまりに孤立的過ぎる主題と思はれますから。」

第六十九章 詩、音樂、舞蹈 (POÉSIE, MUSIQUE ET DANSE)

云ひづらく聞きとりにくい一聯の語呂文句、たとへば「狩りうど雁^{かり}を驅立^{かた}つ。」などといった類ひを誰しも御存知だらう。笑ひ話と云ふかも知れないが、ちよつとぐらゐ考察してみること、まんざら時間潰しともなるまい。人はこのやうな場合逆にとつて、いはば反對聯想法に依つて、云ひよく、または聞きざりのよい一聯の文句を心に懐くもので、かうした愉快がまさしく詩の一部をなしてゐるのである。それにもしも想念がさうした口調と巧く調和することになつたら、われわれの裡に想念は、大びらに堂々入り込むこととなるし、われわれのからだ構造に、言葉がかう巧く適合することが、われわれを豊かに生きさせる手筈ともなるのである。いへばこれはわれわれを内部から把握し、何の比喩なしに云つて、まさしくわれわれにタッチするところの名づけ得て妙なあの魅惑^{シヤム}である。安らかなそのゆとりから云つて、滑り具合から云つて、またわれわれの内部の皺目を悉く伸びさせるその開花から云つて、美しい詩句ほど深遠にして強い醫術は、およその他にあるまいと思はれる。病人はその反對にまるで結ばれ硬くなつてゐるといつてよい。それとうつて變つて、崇高さは穩かな泪を催

させる驚くべきシニユなのである。

かうした考へを辿ることに依つて、私は言語が二様の意味に於て、調和的と云ひ得るものことに氣づいた。すなはち耳にとつてなだらかな場合と、咽喉にとつてなだらかな場合とがそれである。もつとも咽喉といつても、私のは身體全體のその謂ひだが、その譯は發聲器官は、呼吸や心臟、つまり姿態やその他なにもかにも、直接にかかはつてゐるものだからである。耳にとつての調和はスペクタクルから來る。詩人が自分自身にわれと耳を傾け、他の人達の意を迎へようと、しきりに考へることを、これは前提としてゐる。これがすなはち外的の規則といつたもので、多くの味も素氣もない詩句の祕密は、まさしくここに存するのである。が、眞の詩人といふものは、その身體全體の傾向^{ディスポジション}に順じて、先づ自己に話しかけてゐるものことは、明らかである。さうした場合の玄妙な調和を耳は認知こそすれ、調整は出來ぬのである。だから詩人であれ、音樂家であれ、耳のために作るものは誤謬を犯してゐるのである。ベートーヴェンが聾者であつたことに、私はすこしも啞然とはせぬ。言葉にせよ歌にせよ、それが耳障りのよしあしは、遙か隠れた心の發動^{ムウヴマン}によつて、あらかじめ天才はそれと知つてゐるものだからである。

恐らくは打ち克ち得ぬ難場に直面し、ここで私の分析の筆も、はたとどまらざるを得ない。が、またもや逆手もちひ反對聯想法に依つて、すこしく考へ續けて行つてみたいと思ふ。さて耳によつ

ておのが作品を味ひ、耳の氣に入るまでそれを變へてゆくへば、音楽家の場合をもつと詳しく考へて見るとしよう。さうした遣り方は鍵盤を責めるのも同じで、ホルンやバスーンに意見を伺ふのと變りがない。が、偉大な音楽は決してそんな生れ方はしない。ホルンやバスーンが勝手に手筈して身を落着けるやうな風に、下級の楽器が先きに持ち場に入り、噪音がすべてさう統べられたとなると、そんな音楽に瞞されるやうなものは、誰一人だつてありはしない。だから詩に上下の二種類があるやうに、音楽にも二種類あるわけである。

さういへばダンスにも上下の二種類がある。眼に訴へるダンスといふものがあるが、これはすぐと品下りやすい。長い前から佛蘭西のオペラ・バレエは、物珍しいひねくれた動きを以て、人を瞠目させるまでに成下つてしまつてゐる。踊り子はその脚や腕を、思ひきり身體から遠く投げようとしてゐるやうな狂亂のゼスチュアには、人はすぐと倦きが來るものである。この種のダンスにあつては、變りとの垂衣裳は、人爲的な異質的なものに感ぜられるが、それと對比して悟れるのは、本式の變の意義であり、また重力によつて終始一貫、調整され、動作に堅く結ばれてゐる内的な垂衣裳の意義である。いへば重力と動作との二重のコンディションのせいで、姿勢や、身構へや、均齊のあらゆる働きは、そこで目立たせられてゐるわけなのである。長いデリケートな、何時も地の方へと垂れて、ちよつとした手立てにも動きやすいあの襞積は、真正のダンスとも云ふべきおのが爲のダンスの、何よ

りの生證人である。真正の音楽や、真正の詩などの場合に於けるやうに、さうしたダンスの動きの一つ一つは最善の續き具合、つまりからだの構造や、打ち克つた感動に、もつともふさはしい連なり方をするので、踊り手がおのれの裡に於て感じてゐるあの正しい移り具合や、豫報などを、垂衣裳の動的な垂直線を追ひゆくことに依つて、眼はそれと見定めることが出来るのである。それはちやうど耳が音の調子に依つて、遙か内奥に隠れた別の調和を把握するのと變りがない。噪音が音楽に、叫びが詩に、それぞれ無縁であるやうに、ダンスに荒々しさはそぐはぬのである。なにか不易の重力に依つて、常に引戻されてゐる垂布のかすかな動きに、われわれは外部から内部へと索きゆかれる。かくしてスベクタクルはシニユの列にまで下げられるわけゆゑ、想念を以てこれが償ひをつけねばならぬのである。覆はれたフォルム、盲ひた彫像、耳遠い音楽家、これらは同じ一つのものを意味してゐるのである。

第七十章 服装 (COSTUMES)

この指導者には、まだ彼の身分にふさはしいほどの、本氣な神妙な調子が見當らぬ。彼のソフト・カラーや、眞深に冠つた帽子や、活潑な歩き振りや、ステッキの振り具合などから推して、戦争に行つて来た人といふことが一目で解る。(銃後の勤務に勵んだ人には、一種獨特な行列式の、獨斷的な歩き振りが残り、様々の所信の船跡オビニオンシラージュといつたものとどめてゐるのが例だが、前線で戦つた人はまるで一人ぼつちだつたやうな身ごなしをするものだから。)既に大事業にたづさはり、毎日のやうに工夫をこらしてゐるこの瘦せた指導者の裡には勿體振りの跡など微塵もそこにない。凸凹の地形で鍛へられ、眼は常に障碍物に注がれ、一足毎に事を決し、事を考へてゐる彼は、もろもろのイデエの獵人である。かやうな自由な男のすがたに、思ひなぞらへられるのは、愛にほほゑみかけ、可愛らしいその嬰兒に笑顔を見せ、何の取りつくろふところとてない若き婦人のすがたである。

だがモードがかうした男女をねらつて、再びものにしようとする。さうなると指導者として機械の下僕メカニクシたることを、免れるわけには行かぬ。モードが要求するままに、何の飾りとてない狭いワニス塗り

の箱組のなか、タイヤの四輪車の上に、彼は腰を据ゑる。塗つた鐵板の衣裳が彼をすつかり別人にする。交通巡査の棒に、忽ち彼は服従する。モラルの力や當局の貫祿ある態度に毫も眼をくれようともせず、意識的にわれからストップする俄かの彼の姿態には、私もほとほと感心をする。彼の眼と耳との注意力は、悉く彼の鋼鐵製の服装の方に、引寄せられてゐるので、彼自身にしてからが、ちよつと他所行き振つてゐる。取りつくろつた澄し顔をし、政治的なフォルムを身に作つてゐる。まるで儀式の際のやうに腕を伸し、眉毛一つ動かさずモーターをかけるその恰好や體裁ぶりに、是非とも御注視願ひたい。踊りの教師のやうな鹿爪らしさで、彼は急カーヴを切るのである。フィガロは舞踊教師を嘲つたが、私は當のフィガロを嘲りたいと思ふ。ダンスは外交官の學校モコルである。

女もこの狭い座臺に腰を卸すと、政治的莊重さに直ちにあづかる。この鋼鐵製のコルセットは、彼女に奇態なくらゐ威嚴を興へる。むかしの無蓋四輪馬車オープンカーや引き馬のあがきだつたら、全然違つた想念イデオロギを乗る人にインスパイヤするだらう。スタートする時、ストップする時、カーヴする時と、絶えず感得せられる自動車の機械的な荒々しさは、人のエスプリを別種のちからや、情念のない指揮にと、導くものである。おのが想念を統御するにしても、馬上のナポレオンのそれと、自動車のクッションの上での現代の將軍のそれとは、おのづからそこに異ならざるを得ない。人間が人間を運んでゐた奴隸時代にあつては、指揮の身振りもさらに違つたであらうし、また想念にしてもやはり相違したと

だらう。人間は常に人間を運ぶもの、或ひは人間を曳くものの奴隸たらざるを得ないものである。敏感で強壯な動物と、親しく騎士は相接してゐるところから、見られる如き慇懃さがその舉措に備はつて來る許りでなく、その指揮ぶりや服従の仕方に就いても、獨得なイデエを遂には抱くにいたつてゐるのである。ルーソーは徒歩でばかり旅を續けたからして、あのやうな野生のイデエが生れて來たのである。

メカニクは今後われわれの想念や情念を變化せしめることだらう。その次第は一言にして云ひつゝ、しかし難いが、即興の振舞といつたものは、慥かにその影をひそめゆくことと思はれる。鋼鐵製の駿馬（自動車）に就てなら、何をこの先するだらうといふことは、あらかじめ人に解るが、しかしその代りに、すつかりそれに頼りきるといふ譯には、決してゆくまい。あらゆるゼスチュアはムウヴマン（動き）となる。そこからして嚴しい訓練が必要となつて來てゐるのである。ゼスチュアを統御するものすべては、また想像力をも統御し、わき道の考へを單的につづめるものである。自転車はまさしく乗る人のあたまをすつかり占めてしまふ。そこからして夢さへをも、變化せしめるに違ひない新しいたちの、鹿爪くささといふものが生ずるのである。が、障害物を迂回してゆくこつと、ちよつとした創意とが、まだそこには殘されてゐる。ところがメカニクな車となると、もつと斷乎として、人を作づづけ教化する。たとへば自動車乗りの眼は絶えず車輪の泥除けに心を配らせられてゐる。何故なら

車臺の幅からして、自転車よりもつと廣い餘地を自動車乗りは必要とし、また通行人に左右されることも遙かに甚だしいし、いろいろの交通規則をもなほざりにすることが出來ぬからである。さればわが指揮者はおひろひの際は、何も創意が働かぬわけだ。といふより創意を控へてゐると云つた方がよい。本氣な鹿爪くさい男とは、およそこんな風なのである。ちやうど鐵の王冠をつけた國王のやうに、その王冠のことばかりが頭にあるといつた具合なのだ。

第七十一章 田舎帽子 (CHAPEAU BRETON)

このブルターニュのやうな田舎では、服装が想念である。石屋の親方は顔を身につけてゐるやうに、自分とほぼ同年配のやうな大きな帽子を冠つてゐる。田舎女の鄙びた冠り物にしても、蜻蛉に羽根が自然なやうに、彼女にとつて自然である。都會から來た海水浴の男女たちは、裸身で服装がないため、仕事も勤めも持たぬ裸足の子供たちのやうにしか見えぬほど、自然味たつぷりである。かう見えることが、また人間種屬につきものの不安定な一面とも云ふことが出來よう。避暑客の甲殻(自動車である。)は脱ぎすてられて、路傍に待ちぼうけをくつてゐる。まるでそれは製造所のレットルをべたべた貼られた變挺な鱗鱗詰の箱のやうに見え、捨てられた理念のやうに醜惡である。が、これがメカニックのメカニックたる所以とも云へよう。けものでさへメカニックに恥ぢ入らせられるのだ。それにしても着物をきた人間といふものは、なんと妙なけものだらう!

勁く凍として、獨斷的な、底の測り知られぬエジプト種の隼、さういつたすがたを御存知だらう。が、この隼の知つてゐることは、自分のことばかりで、つまりは何も知らぬのと同じである。それと

同じことが、畑添ひの百姓を外から見た場合に云へる。いへば一種の猛禽のやうな存在なのだから。しかも彼の服装は一つの避難所に過ぎなくなつてゐて、そのところから顔がすべてを看破し、すべてを判断せんがために、ぬつと突出してゐるのである。鳥や魚とさほどの變りもなくなつてゐるこの政治的なけもの裡に於て、まことに顔といふものは、妙な出現である。瞑想と精神と歌とが、顔には宿つてゐる。それにひきかへ服装の方は何一つとして値してゐない。海岸が海に沿つてゐるやうに服装は顔に沿ひ、その顔がまた眼、水のやうに自由な眼の縁かがりとなつてゐるし、眼の光りはさらに萬物を従はせてゐるのである。

人間とけものとの間の違ひには、顯然たるものがある。人間は道具や機械や服装を持つ唯一のけものである。道具に依つて人間は感覺のない、また損はれることのない手へと、わが身を延長することが出来るし、火を扱ふことが出来るのも、やはり道具のお蔭である。火の大好きな犬や猫に、火を起せぬといふことは、まつたく驚くべきことだが、しかしそれは火に堪へられぬ畜類の脚からおよその説明がつかう。だが人間のうちにあつてもつとも目ざましいことは、彼に至極しつくりと行つてゐるこの彼の一部分が、生物器官ではないことである。機械の母たる車輪もまたオルガンではあり得ない。といふのは轂から車輪を離すことも出来るし、古い車輪を捨てて、新しいのと代へることも出来るからである。ポートは同時に魚ともなれば鳥ともなれる素晴らしい道具である。ポートに依つて人間はそ

の手掌の上に水や風を感じられる。が、所詮ボートは身のうちではない。人間はボートを繕つたり、大切にしたり、名をつけたりするが、使ひ古せば棄てて顧みようとしない。以前は彼の大事なパンセだつたが、今はもう何でもない。魂はそこから移つて、他のからだへと住み替へてしまつたからである。

それに比すれば服装は、遙に大事に保持されてゐる。強情よりもつと甚だしい片意地なものが、そこには動いてゐる。といふのは例へば婦人の田舎帽子などにしても、それは道具といつたものでなく、一つの獨斷となつてゐるからである。川のこつち側に生れたゆゑかう考へるので、他に考へようがないといつたやうなところがある。いへばかすかすの想念に抗するそれは城壁のやうなものだ。隼にすれば生死にかかはるその獨自なフォルムを、飽く迄も保持するやうに、人間も彼にとつては死活問題たる政治的想念を、何處迄も保持しようとするのである。ただ然しさうした場合のリボンや花結びのなかには、氣隨氣儘なものがある。何故かと問はれても、さうだからさうだと云ふの他はないが、強ひて云ふならば、人を常に驚かしはするパンセだが、それに感服するのは誤りといつたやうなパンセのそれはシンボルだからと云へばよからう。何故さうしたものかと云ふに、さう頑張らうと自分に命じたからさうなのだとか云ひようがない。が、それがさう鞏固づけられることは嬉しいが、鞏固づけられたものを鼻であしらふといふのが、當のこつちの性分である。しかもこつちが鼻であし

らふからには、人から（彼奴、鼻であしらつてゐる）と云はれるのは癪だ。要するにボンネットが要することは要るのだから、要るままにしておかう。そして帽子の話なんか打切るとしよう。……かういつたのがおよそ人間の服装に於る專斷の調子だ。人間は何故ドグマに對して、そんなにかかづらつてゐるのかと疑ひ出すことは、獨斷に就いて大變な思ひ違ひをしだすものである。兎に角ボンネットが要ることは慥かなのだ。それ以上、服装について長談義しだすとならば、まる一生費してもまだ足りない。そんなことから滑稽なパンセが生ずる。しかもその滑稽さといつたら、天國や地獄に就いて、嚴かな評議を重ねるのに劣らぬくらゐ可笑しい。田舎帽子はかすかすの帽子に抗する一つの避難所だ。ちやうど神學は神學に抗する人間の避難所であるやうに。私は私の帽子を信じてゐる。笑はしちやいけない。さう顔が云つてゐる。

ところがこの顔といふやつがまた、變調や不順に抗すべく、ごく慎重にととのへられ、取締られてもゐるのである。といふのはすべての人がその面構へを以て、こつちの顔を威かさうとしてゐるからだ。すべての人がこつちも向ふに似るやうにと望んでゐるからだ。だがこつちは平氣でその前に出る。向ふのポルトレットを、こつちは向ふに示してやる。といふことはすなはちこつちの是認の相當額にあたるやつをだ。ちやうど堅く嚙んだ口許が、心の底の知れぬ協和の中心であるやうに。だからその場合のウイは氣音の有聲音で陰に閉ぢこもつてゐる。さうだ、私は承認する。同意する。が、

何をだ？ 何についてだ。それは諸君にも多分解るまいし、この私にも解らぬ。私は私の顔を信じ
てゐる。♡おやおや、こいつまた可笑しなことを云ふ。さう眼が云つてゐる。

第七十二章 モード (LA MODE)

服装 (costume) は慣習 (coutume) である。モードに大いなる移り變りがあるのは、われわれが親しく
眼にするとところであるが、それに吃驚する前に、省察に努める必要があらう。萬人なみのものは人
の氣に障らぬ。人の氣に障らぬものは、人の羞恥を損ぜぬ。都會の街巷を濶歩する眼もあやな色をし
た靴下の脚は、極めて似つかはしいものだが、海濱へ行けば跣足の横行に接しても、すこしも奇異に
感ぜられぬ。ただそれに吃驚させられぬのを吃驚するばかりだ。何故にさうしたことになるかと云ふ
と、それが一般共通的なものだからだ。その反對に、新機軸とか、吃驚させたいといふ氣などは、
却つて人の氣を損するものだ。もつとも結局のところは我々に話しかけ訴へてくるものは、何時もそ
れは人間の顔なのだ。破廉恥とか、またその兄弟分の不面目とかは、妙な風にわれわれを刺戟する
ものだが、モードに従つてゐる女性の顔の上には、さうしたものを絶えて讀み取ることが出来ない。
モードが彼女の隠れ場となつてゐて、女はその蔭に隠れ、身を避けてゐるからである。人の氣を損ぜ
ぬといふ確信があつて、誰一人氣に障つたといふものが、出なくなつてゐるのである。さうした確信

をゆるがさうと説法するのは、およそ無駄なことで、感情のなかに寸毫の變化をも、人は認め得られまい。だから無邪氣はあくまで無邪氣、愛はどこまでも愛といった具合で、あらゆる青春が常に繰返して来たやうに、青春は踊つたり契つたりに、むかしから變りはない。いさかひにしても、嫉妬にしても、常不斷同じだ。倦怠にしても變りがない。情念は同じ過ちを重ねつつ同じコースを辿り、同じやうな罰をわれとわが身に加へてゐる。誠實は常に愛に王冠を飾り、愛を十全たらしめてゐるものだ。従つてスカートが数吋短かからうと長からうと、そこに何のかかはるところもないのである。人間の性質といふものは、そんな僅かなことで變るものではないからだ。

あらゆる感情は捕捉し難い生き方をしてゐる。賤しい鶯鳥飼ひの女のやうなものでも、その心の未來に就いて夢想しだしたとなると、それをわれわれは事細かに絞へつくせるものではない。コケットリイは人の氣に入られようとする欲望だと、一般に云はれてゐる。慥かにそれもさうだが、しかしさうした欲望は、用心堅固な警戒振りをしてゐることも、云ひ添へておく必要があらう。人の氣に障つてはといふ懸念は、モードに従つて行かうとする心遣ひから、先づ第一に現れ出るものなのだ。それにまた人から氣に入られることに對する或る種の懸念、——と云つて云ひ過ぎなら、自分の欲するだけしか人の氣に入られまいとする決意といったものも、同じくそこには親へるのである。そこからしてあのさまざまな外面的粉飾や、習俗しきたりが生れ、その背後に美がちつと息をこらして潛んでゐるのであ

る。スタンダールの物語にある十六歳の少女ラミエルが、鍋墨のやうな「柎ルージュの葉」を顔に塗つたといふわけは、實にここにあるのである。羞恥はもろもろの感動に對する一つの物怖ぢであり、かすかすの表象シニユの一つの物惜みである。共通的な粉飾といふものは、臆病者に安堵を與へるお座なりの會話文句のやうなものだ。あらゆる感情は表現を怖れ、豫期されたシニユの蔭に隠れて、表現を準備するといつたことになつてゐる。ごくありふれた語をしか言葉に上せぬといふことは、また詩人や雄辯家の法則でもある。といふのは彼等は相手の心を亂れさすよりもつと高いところを目指してゐるからに他ならぬ。それに一方、雄辯家は聴衆の心亂れを怖れる有力な理由がある。だからして不軌な力を慎しまうと用心してゐるのである。ところが詩人は讀者の心騒ぎを怖れぬまでも、極度にこれを輕侮し、その反對に耐久的な効果を求め、それを手配りし配慮しようと、あくまで心に期してゐる。コケットな女が俄かに慣習のとばりを現して、その蔭に逃げ隠れるのも、それと軌を一つにしてゐる。それはおのが門を鎖ざすのと同じだ。われとわが自由を保たんとするのと同じだ。あらゆるシニユを消さうとするかうしたシニユには、人の精神を惹きつける力がある。

すぐと眼について、一目瞭然といつたやうな美がある。もつとも屢々輕蔑を以て驚かれてゐる場合もあるが、それに反し自分にしか與へられず、他の人達には消え失せてみえる美の閃きといったものを、愛は探し求めるものである。派手な美の運命といふものは、いはば公共的なるところにある。禮

讚は惜まれぬが、しかしそこには未來がない。いつたい人の氣に適はうとすることは、大いなるアヴァンチュールである。人の氣に適ふ適はぬは、あくまでこつちの意一つとして、その境ひだけはせめてこちらで示せるやうにしたいと、人は思つてゐるものである。さうした意味でモードは禮節と同じやうなもので、いきなり人を驚かさぬ限りは、多くのことを口にしても差支なくしてくれてゐる。ダンスもゼスチュアに依る驚くべき會話の一種であるが、案出につぐに案出を以てしたら、かなりと亂暴なものになつてしまふだらう。が、そんなことはなく、ダンスは齊一性と相似のヴェールを投じてゐてくれる。だからこそ自然さがそこに現れるのであるが、人間といふ考へる動物にあつては、癡癡と傲慢に依つて、自然さが正反の二方向に引張られてゐることが、實以て多いものなのである。

第七十三章 儀式 (RITES)

屠殺場の若者が儀式の正装をこらすと、——正装といつても、胸の上に斜めにかけて大きな前掛から、もつばら成つてゐるに過ぎぬが、——およそ一人の男に有し得る限りのあらゆる威嚴と權威とがそこにそなはる。彼は省察し、熟慮し、決斷する。彼の動作には一定の始まりと終りとがある。その身動きのすべては、ダンスのなかに於るやうに、統整されきつてゐる。といふよりは彼の動作のうち、に於るダンス的なものは、次のことにかかつてゐる。すなはち一つのアクションから他のアクションへの移り具合が、外的な法則を模し、それを續けようとする一つの内的な法則に基いてなされてゐると、そこにある。かうした趣きはしかし佛蘭西のバレエのなかでは、殆ど見ることの出来ぬもので、何故ならそのすべては見せかけの振りばかりだからだ。それに反して、體操家の鍛鍊の場合、殊に金棒やブランコといったやうな事物シヨイズに依つて動作が統整された場合に、それははつきりと見得るところである。しかもかうした場合に於ても、服装はさらによくその威力を發揮するものなのである。何故なら背廣を着て烏打帽をちよこんと冠つた體操家の姿ほど、およそ惨めな貶しめられたものは、他

にあるまいではないか。さういへばさつきの牛殺しの若者にしても、その前垂を脱ぐや否や、見る見るその人柄が小さくなつてゆくことは、注意すればすぐと解らう。それこそ威厳も何處へやらで、まるで獸物のやうに、空しくわが身を打慰めてゐるといつた按配にだ。どうして人間が、こんなにたやすくその絶對最高の主權の一部を、失つてしまへるものは、氏素姓を何よりも重んずるヒンズー人には、まさしく理解に苦しむところに相違あるまい。

およそ悉皆の稼業は、當人に一種の確信乃至は厚顔さを與へるものである。またあらゆる身飾りはレール敷設工夫の青帯の如き効果を、まさしくあげるものである。身飾りはそれ自體すこしも美しくはないが、しかし人に確信を與へるがゆゑに、美しさを人に與へるのである。土方とてもシヤベルを握つた時は美しい。濠や盛土を眺めやる土方の眼差は、シーザーのそれにも劣らない。土方が暫時のあひだ憩ふ時、さうした威嚴の殆どすべては、まだ残つてゐるが、一日の稼ぎを終へて家に戻るとなると、さうした威嚴もめつきり喪失するが、それでも屢々その服装や、がつちりした歩き振りや、勞働の陰畫ともいふべき埋め合せの休息などに依つて、自分は土方といふことを思ひ出さうと、ことさらに努めるやうな節も見受けられる。彼の名譽はあきらかに常に土方たらんとするところに存する。階級は人に決して屈辱を與へぬ。青い野良着を身にまとい、自分自身に對する確信を覺えぬ百姓はない。が、もしこの百姓が町民のなりをしたとすれば、すつかり別人に接するの思ひを我々は抱くだ

らう。彼の良識も計りごとくもエスプリも、なにもかも躊躇と自己恐怖によつて、失はれてしまふからなのだ。階級の外に飛び出た者は、われと不安を覺えるがゆゑに、すぐと疑ひの眼を蒐めることとなる。つまりシニユの交し合ひに依つて、かうした不自然な立場は、ひとりでに敵意を挟むものとなる。だからどんなにあざやかに立廻らうと、泥棒といふ稼業には公けに出来ぬところがあるゆゑ、いかな達者な泥棒にもぶまさ加減といふものが出る。そこからしてあたりに疑心をまき散らす一種の疑心が泥棒の身に添ふのであるが、面白いことに、同じさういつた外徴は警吏——といつても官服を脱いだ警吏のその謂ひであるが、——さやうな仁のなかにも見受けられるのである。もつとも結局のところ、この御兩者に共通する風習は、なかなかもつて數多いのであるが、いつたい巡査とか守衛とかいつたものの御威光は、物を云ふその制服から御當人たちが覺える確信の念から、先づ生じたしてゐるものである。彼等が何者であるかはすぐ人にわかる。また人がそのことを知つてゐるといふことを、彼等はちやんと心得てもゐるからだ。

現代のシーザーともいふべき新しい種屬は、大型バスの操縦者だと私は時として考へたことがある。この種の威嚴にしても、決して一朝にして生れたものではない。彼の革帽子とても最初は何の腹案もなかつたものである。しかし次第に一種の雅致がそこに生み出されてゆくのを、見るやうになつたのである。たとへばブレーキをかけた後の手捌きとか、突破した障壁を見やる横目遣ひとか、遠く

を見過ぎまいとする心遣ひとかいつたやうな、いへば悉くが憤激に驅られまいとするあらゆる用心の用心といつたもののなかから、さやうな上品さが生じ出したのである。それはメカニックを規制する力は勿論のこと、あらゆる力といふ力は、憤激を以て何よりの敵としてゐるゆゑである。また私はそこに新しい儀式の生れたのを見る。偉大さがやはりなくもない儀式と思ふのだが、二つの車が衝突しかかつて、危く寸前で急停止する。衝突の驚き、それを阻止せんとする努力、危機への際會——かういつたことから普通は罵り合ひたい氣分に驅られる筈のところを、わが兩シーザーはすぐと互ひに相手を見ない振りをし、まるで百里も離れた人達のやうな風でゐることがそれだ。ここからして思ふことだが、外交官連中も、むつかしい難局に際して、このやうに自分自身に對してブレーキをかけるすべを辨へてくれたらと、私は望んでゐるのだが。

第七十四章 ロンド (LA RONDE)

握手は極めて明かな身振りである。私は君を握る。君も私を握る。私は君の力を感ずる。君も私の力を感ずる。さうした力が、先づ互ひに等しく感ぜられるところから、御存知のあの懇篤な攻勢が生れる。もつとはつきり云へば、その力は互ひに等しからんことを期する。従つて強者にとつて、出し過ぎずにきつちり等しいくらの壓力を、相手に感じさせようとするには、あれでなかなか微妙なこつが要るものである。力が入り過ぎると野鄙になる。といつて力を入れなさ過ぎるのも、それは一種の拒否であり、輕侮であり、或ひは懸念であり物惜みでもある。指一本出すのは、無禮とされる。腕を伸し足りぬのは防禦の構へとされる。といふのは腕で脇腹を庇ふことになるからだ。ゆゑにローマ式の敬禮には豪氣なところが見受けられる。それは暗殺者を見縊る腕恰好だからだ。すべて身振りといふものは一つの意圖を確言し、それを追認までするものである。軽く手をひらひらさせる挨拶は、その反對に解放をあらはしてゐる。これは小さな子供が、非常に巧くやることを知つてゐるそれだ。

フランドル踊りは足が手に従つてゐるダンスだ。だが踊りの頭から遠ざかるにつれて、踊りのチ、

インの力は、益々重く感ぜられて来る。さういふ意味で、フランスのあらはすものは専制であり、また専制の法則である憤激である。時として踊り方が激しくなると、列の最後の者などは、石弩の石のやうに旋廻する。だから私はブルタアニ式ブルタアニ式ののろいフランスの方に組したく思ふ。そこでは足の控へ目なりズムは、いくぶん手で調子をとられてゐる。手と手との極めて慇懃な結びつきは、安堵を興へあふためである。踊りの組は踊りのリーダーの鄭重さによつて結ばれ、次から次へとその鄭重さが模されてゐる。かやうな身真似はあらゆる情念や、また喜悅の情さへをも鎮めてゐる。聲の合唱ほどにも整つたそれは両手をもつてした愛の歌である。

同じやうに掌をうつて遊ぶ少女たちのロンドに就いて述べてみたいと思ふ。かうしたロンドには踊りの頭も尻尾もないゆゑ、その熱中さのびのびとし秩序立てられてゐる。人から引張られただけ、こつちもそれだけ人を引張ればよい。ただその引張り方はあくまで等しくなくてはならない。だからあまりにも稚い少女は両方から引張られることとなり、それと同時にカーヴはくづれる。もしもみんなの力が平等だつたなら、曲線のなかでもつとも美しいもの、すなはち圓が出来る筈なのである。ピタゴラス學派が云ふやうに、圓はもつとも公正なものわけが、ここからしてお解りになれるであらう。人間の楕圓は公正なるものではない。両端に暴君たちがゐることだからだ。踊りの音頭取りがダンスのカーヴや辿つたコースに、心を配つてゐた時代は、かうした象徴も明らかだつた。一緒に歌ひ

ながら齊唱から外れることがあるやうに、踊つてゐる圓(サークル)から逸れることもあるとは思ふが、最初の圓形といふものは、どんな踊りの曲線の中にも現前してゐたと私は考へる。その時こそダンスがあらゆる言語のなかで最も熾烈な、また最も表現的な時代であつたのである。つまりダンスは踊り手たちにとつてもスペクタクルであり、彼等の自我の鎮靜による自己認識の時代だつたのである。王はダンスのなかにゐた。そして各人が王であつたのである。が、今日では王はその安樂椅子にをさまつて、慰めて貰はうと金を拂つてゐる。かくしてダンスは賣られたのだ。

少女のロンドを見て面白いと思はれることは、幾何學が社會の起原からのやうに考へたがつてゐる人は見當違ひであつて、藝術や祭典のそもその純粹性、すなはち神も主人も束縛も、およそ何の拘束もない崇敬といふものを、忘れてゐるやうに思はれることだ。それといふのが彼等社會學者は揃ひも揃つて陰氣な御仁で、孤獨のなかに社會を求めようとしてゐられる。そして想念間の連絡をつけるのに、喜悅などでは充分でないやうに彼等は思ひ、もつとも嚴しい必然性を、彼等はずもつとも明瞭なそれと心得、常にホップス著すところの「レヴィアタン」(君主專制國家)の再建を志し、市民を國家の囚人たらしめんとしてゐるからである。眞直ぐな隊列は戦法からであるが、曲線はさうした場合、法に反することを現すのである。いはば *tout marche droit* (まっしぐらに進め、右側通行) だ。力は表徴シイニユをつくる。戦列や線といふ意味の *ligne* といふ言葉はまた歩兵のことを指す。戦列にあつては曲線は脆弱な

點、挫折した點に他ならない。前大戰に於けるあの有名な彎曲部ボクットや、はからざる突出部などは、その一例である。縦隊がうねうねすることは、悲しい制約に依つて歪んだ隊列オムドのすがたである。蛇がよこしまな力、われわれの美しい目論見を曲げる文字通りに悪魔的な力のシンボルとされてゐることは、またゆゑなきではない。その反對にロンドの圓を模して、尾を噛んでゐる蛇は精神の勝利と、獸性に對する永遠の君臨者をあらはしてゐる。されば隨喜グライムスと喜悅とはわれわれに幾何學のなかのもつとも自由な、もつとも美しい部分を發いて見せてゐるのである。

何故にかくの如き表象イマジネーションが民族の最初の想念であつたかといふ譯が、ここにして私には解るのである。がさういへばそれは同じ原因からして、常にさうあるであらうと思はれる。何故ならば人は常に子供から大きくなるものとは別としても、また人を生れながらに技術家たらしめる手段が未だ見出されてをらぬことは論外としても、——およそ人間は心臓や肺臓や胃などといつた、たまげやすいけものの性に、従はざるを得ず、従つて一種のダンスに依つてでなければ、人には決して充分に思考の出來ぬものであることは、明々白々のことだからである。それに人間はコンパスなどを使つて美しい圓を描けたところで、殆ど進歩なぞするものではない。それはコンパスを教化するに過ぎぬことだからだ。さういへば慥かに十五馬力の自動車はごく教化されてゐるとも云つてよい。が、その制動機を握つてゐるのは、性急な蠻人のことが屢々である。さうなるとまさしくけものが統治し、幾何學が

服従してゐるといふ二重に醜惡なスペクタクルがそこに出來るわけだ。おお、想念！ おお、古鐵！

第七十五章 めがね (DES LUNETTES)

寄る年波で眼鏡を掛けざるを得なくなつたある外交官が、かれこれ二十年もこの貴重な召物めしものを備へはぐつたことを歎じて「眼鏡をかけた男が世間で幅を利かしてゐるわけが、やつと私にも解りましたよ。」と云つた。なるほど裸かの眼だと、こつちの考へがむき出しになる。尠くもわれわれはさう信じ、また相手の方でもさう心得て、まるで劍術遣ひのやうに、人の眼の光點をばかり絶えず窺ふといふことになる。眼といふものはわれわれの考へてゐる以上のことを、きまつて告げてしまふものは考へる。つまりわれわれの考へを傳へるところのあのひそかな迅活な發動 (movement) を眼は露呈してしまふわけだが、いつたいかうした咄嗟の即吟などは、現して悪いものなのである。かやうな最初の發火のことを、人はエスプリと呼んでゐるが、さんざ面白半分に揺られ振られ突き戻されたこのエスプリは、まるで早足で馳けすぎた子供といつた恰好で、げつそりしてわれわれの許へ戻つて來るのが常だ。しかしさうなつては、反省もはや後の祭りなのである。韜晦することが世には如何に必要であるかが、これで充分にお解りになれよう。人に一度喋つてしまつたことは、なかなか筆に上せ

られぬといつた覚えは、多くの作家が屢々経験するところであらう。作家が放談を避けるわけも、先づはさうしたことからだ。外交官の慎重さが必ずしも偽装ごそうからではないことが、ここからしても思ひ當られよう。ところで本題の眼鏡の件だが……。

眼鏡の效驗ほど眞近で觀面で、しかもあらたかなものは他にない。こちらでは硝子越しに見る。が、相手は硝子に隔てられて、しかとこちらを見定められぬ。硝子の反射で一杯くつて、こちらの眼差を捉へかねるからだ。それでこちらには餘裕が出来る。慥かに眼鏡を掛けてないと、眼をそらさねばならぬ場合が時折り生ずる。これは既に内心の暴露と同じだ。一度かうして卑下してしまふと、なかなか元へは戻れない。人の精神といふものはシニユに對しては適應しやすく出來てゐるゆゑ、見抜かれたなど感ずると、からきし平靜を失つてしまふものだからだ。ところが眼鏡さへ掛けてゐれば、絶好な避難所が出来る。待合場が出来る。待伏所ともなれる。想念は眼鏡の背後にあつて悠々と勢揃ひしてその整備につとめ、期の熟するのを待つことが出来る。しかるに眼鏡を掛けてをらぬと、想念は貧寒にも頓へ上つてゐなければならぬ。時には止むを得ず鐵面皮をきめこんで、その胴震ひを制しなくてはならなくなる。おのれが眼の裸出を感じぬ人、それに考へ及びませぬ人のことを眼に冷氣を覺えぬ男、わるびれせぬ人などと普通云つてゐるが、かうした人の考へは、あらかじめ思案し、微塵の際のないものでない限りは、淺見短慮に陥らざるを得ない。眼鏡をかけた人間は鼻持ちがならぬと

ゲーテが云つてゐたのは有名な話だが、己れが強味を自信すること篤きゲーテなればこそ、むき出しの人間の鐵面皮をも、毫も怖れなかつたのであらうし、また人の胸中を讀むことに何よりも興味があつたゆゑでもあらう。なほまたこのオリンポスの神には、信徒のおどしたさまが、心愉しく眺められたからでもあるまいかしら。

眼鏡のなかには悪魔的な、ちよつとよこしまなものが潜んでゐる。ことさらでもないだらうが、何かそこには悪意地のやうな精神的な邪氣すら藏されてゐる。眼鏡のぴかりぴかりには劍戟の火花にも似たやうなものがある。たかが眼鏡屋から買った代物だから、始めは勿論なんのこれといふ下心あつてのぴかりぴかりではなからうが、それだけにまたそれがどつしりした構へに、こつちに感ぜられて來るのである。が、やがて眼鏡の扱ひ方の呼吸が當人の身についてくる。さてさうなると子供が鏡をもつて反射遊びをするやうに、迂濶者には世間の光が、遠慮會釋なく照し返されて來るのである。眼鏡を掛けた人に特有な姿態の變化とか、あたまの活潑な動かし方といったものがある。それを單純な男は早合點して、自己流に勝手に解釋しがちであるが、眼鏡のぴかりぴかりの間に、當の相手の眼はこつちに見られずにこつちを見てゐるといふことを忘れてはいけない。だから眼鏡を掛けた人と話すのは決して樂なことではない。それはまるでこつちから見えぬ人、見え損ふ人、そのくせ向ふではこつちをありありと見てゐるといつた人と、話をするのも同じだ。向ふではこつちを知つてゐるが、こ

つちでは向ふをすこしも知らぬやうな人と、話をするのとそれはちやうど同じで、どんなしつかりした精神の持主でも、さうした差向ひは辛抱しきれなくなるだらう。どうしても相手の名が要る。名を探し求めることで、こちらのあたまは一杯になつてしまふからだ。眼鏡を掛けた近眼の人の御利益はこればかりに留まるものではない。近眼の男はよく話の最中、眼鏡を外して呼吸をふきかけ眼鏡の玉を拭き出すことがある。さうなると御當人は立去つてしまつて、まるでこつち一人取殘されたやうな鹽梅である。何故ならこちらでは現に玉を拭く彼を見てゐる。が、先方にはこちらの姿なども見えなくなつてゐる。彼の宇宙のなかに、もうこちらなど存在しなくなる。ただ向ふでその氣になりさへしたら、こちらも彼の宇宙のなかに戻つて行けるし、同時に彼もこちらに戻つてくる。かうしておのが登場や退場を、彼は勝手に統制が自在だ。それも自然味たつぷりでそれをなし得るのだ。氣永に落着いて、しかも両手さへあかせずにとなつたら、さうした藝にはまことに敬服のほかはない。かういふ男を感動させようといふ希望など、はや捨てるにこしたことはない。果して氣の弱さが萬人の通弊だとしたら、近眼の人はかうした強味から云つて、全く幸福な存在である。

第七十六章 浮薄 (FRIVOLETE)

浮薄さといふのは、神妙な極めて眞面目な状態である。それは輕佻さや吞氣さや無智とはまるで違ふし、また無邪氣なものでも決してない。無邪氣さは浮薄なものではなく、ただなにもかも眞に受けて、あらゆる隅々をそのランタンで照し出さねば濟まぬのであるが、その反對に浮薄さの方は、どこかの隅が怪しいか、ちやんと承知しながら、そこから眼をそらすといったことをするのである。われと勇氣をつけようとして、夜分、歌をがなつた覺えは誰にでもあらうが、それは氣を惹かれさうな微かな物音を、わざとみんな掻き消さんがための遣り口の一つで、さうした物音に口説き落されるのが怖いゆゑなのである。薄暗い窓の方や、漠然とした彫刻の飾りの方へ、眼を向けさせなくする一種の恐怖に就いて、語られるのを私は聞いたことがあるが、怪奇的な影像しか人に起させないやうなものを、眺めまいとすることは、慥かに一つの見識であり、何かの怖ろしい想念から、斯くわれとわが身をそむけようとするこの力は、まさしく勇氣の一部でもある。さればこそ戦争などに於て、屍體の光景から眼を蔽はうとすることは、私は徒事とは思はぬのである。さうした場合、慣れると平氣になる

などと、人は餘りにも輕々しくきめてゐるが、しかし或る光景の下にある事物から、われわれの眼をそらすやうな何等かの強烈な關心に、私はむしろ據りどころを求めたく思ふのである。たとへば外科醫だつたら傷口を見るにしても、われわれと見方を異にする。それは彼の活躍の場に面してゐるからだ。彼はそこに道と手懸りを求め、忽ちにしてそれらを見出すことになる。それと同じく屑屋はその稼ぎ場に出るとすぐ、殆どみんな値打があるが、ただ混亂してゐるだけのさまざまな種類の物があるとそれを見るのである。要するに世渡りや處世法を抜きにしては、習慣などといふものは、おそらく無いのである。將軍は戦闘そのものの最中にあつて、恰も無感動の如くである。それは彼が血や屍體でなく、奪つた陣地や、奪はれた陣地、崩れた一角、必要な増援のことなどしか見てゐないからである。だからして戦闘が濟んで野戦病院など視察の折り、その光景に殆ど堪へ難い思ひを將軍はすることがある。それは彼が外科醫ではないからで、この種の考へから、なるべく遠ざからうと彼が決意してゐるためである。ナポレオンは彼の言に依ると、「判断の自由を保たんがために」、つとめて戰場の光景を見るのを避けてゐたといふが、自分でなほし方を知りたいとも思はぬそれは疾患だからだつたのであらう。

如上の場合、既にそこに浮薄さが現れてゐるが、ただし混淆のかたちにかたに於てである。といふのは意思は絶えず他のさまざまのアクションに、かかづらはつてゐるものだからである。無爲の浮薄さから、

精神の力といふものの別概念を悟ることが出来るのである。だうだう廻りの陰氣な同じ一つ考へを、思ひめぐらしてばかりゐる連中は、ちつとはブリッヂ遊びの人たちにも見習つて、われと自信をつけるがよいと思ふ。カルタ遊びなど見ても解るやうに、われわれの心をまぎらしそらせるには、ほんの些細な物と、取るに足らぬアクションとで充分なのである。いつたい禮節の主要なる効果といふものは、現すまいとわれから禁ずるものを、精神の裡から現實的に消すことにあるのである。だからして神妙さが常に禮節の反對とされてゐる所以なのである。何故なら神妙さは臆斷を厭ひ、結論へと果敢に邁進するがゆゑに、そこには規則に従ひつつ踊るワルツ踊り手のやうに、怖るべきものがあるからである。△立派な理窟といふものは、すべて人の氣に逆らふものである。▽といふスタンダールの怖ろしい言葉の新しい意味が、かくして私にはうなづかれるのである。そこからして私は、浮薄さは人の思つてゐるほど輕率なものでもなく、また無頓着なものでもない、云ひたく思ふのである。何故なら浮薄さは神妙さのその生れかけからごく厳しく監視し、眼差しの中に既にそれを看取して、神妙さのなかにある狂信的なものを、遙か以前に見極めてゐるからである。會話のあの微妙なあやと、蹤跡を纏らかすかの抗し得ざる諧謔とは、ここから開展して行つてゐるのである。逸話と事實との差異はどこにあるものかと、長いこと私は不審がつた覺えがある。といふのは逸話は屢々本當のことがあり、人を遠く導くものであるのに、逸話の形式ときたら、まさしく人をはぐらかせるに足るものだからだ。

らだ。エスプリといふ美しい名詞が、はぐらかし屋の遣り口をもまた意味してゐることは、決して偶然ではないのである。それはイデエの問題を隠し、フォルムの問題（わが思想家たちがすべて飛掛つてゐるのは、このフォルムの問題の上にだが）、それをあらはすことだからで、人間がいくら合理的にならうと、それだけではまだ巨歩を進めるといふ譯には行かぬのである。最高の教養ある者はわれわれが近寄るのを見て、素早く身を引込めるのに正しくもつとも巧みな者としてよいであらうと思ふ。愚昧といふものは、そんなに怖ろしいものではないのだ。

第七十七章 會話 (CONVERSATION)

人の集團ザイクルといつたものは、われわれにすべてを要求するくせに、われわれに何の返すところがない。目的こそいかにも殊勝だが、たちまち何の考へるところも、何の欲するところも、また何のなすところもなくなつてしまつてゐる悉皆の世の協會 (アソシエーション) を見れば、そのことはよく解らう。他の人たちとサークルになつて、ものを考へようとすれば、何等かの犠牲を拂はざるを得なくなることは、かなりに明らかなる事實だ。しかも現實にはさらに一段と嚴刻なるものがある。といふのは實際に於て、共通の考へといふものは、ただちにもつとも低い水準に低下してしまふものだからで、浮薄な女性が座にゐると、當人にその積りもなく、またそんな考へもないうちに、一座の人達に掟を下すといつたことになるし、また四歳の子供が席にゐたばかりに、みんなが四つの子供となつてしまふといふやうなことも起る。

ある面から見れば、これは美しいことだ。人間性ユマニテといふ深奥な禮節が、われわれ同士をからだで結びつけてゐることだからだ。われわれは銘々に生れた始めから社會生活の裡にある。子供は純然たる

模倣に依つて、あらゆるものを覚え込んでゐる。人の擧め面を見て、子供は同じやうに顔を擧めてみるが、何もそれは考へあつての仕打ではないのである。人間的なモデルに、子供はそのゼスチュアや、顔面を順應させてゐるだけなのである。さうやつて最初から、また何時何時までも、人を判じたり洞察したりしてゐるだけだ。だから背馳し云ひ逆らふことは、社會ソシエテから飛び出すことなのである。交遊ソシエテを求める異邦人の禮節ぶりは、畢竟するに注意力そのものの現れと云つてよい。それどころか同じ國言葉を話す人と面接の際でも、向ふの考へにこちらが縁遠くなればなるほど、こちらではその考へを理解しようとして、益々こつちの頭を下げ、こつちの模様替へを計るといつたことになり、さうした出會ひに於ては人は子供同然で、遂には人並にもれず、相手の田舎訛りをまで模さうとするにいたる結果、さうした後で反身反身にならうとしても、容易なことではないのである。が、また巧く出來たもので、議論して相手を打負かしたく思つてゐる人は、先づ相手の贊同を得ることに相手以上に躍起となつてゐるもので、そこからして人間の現前プレゼンスだけで、どんな果斷な人達にも、よい躰となるのが云へるのである。よしんば彼等が抵抗を示さうと、もつとも低いところの卑俗な水準で逆らはざるを得ないことに注目せられたい。その點、私自身も長いこと感違ひをさせられて來た。一つのイデに對する反駁には、イデエそれ相應の値打があるといふこと、つまりイデエへの反駁と、イデエそのものは、常に同じきイデエであるといふことを理解するのに、私には相當の骨が折れたからである。かる

がゆゑに私はヘーゲルの辯證法に敬意を表する次第である。

極めて教養の高い某婦人が、料理女や小間使ひに關しての雑談を禁じたく思つて、さうした話になりかけるとすぐ、澤山の逸話を例にとつて、華やかで痛烈な諷刺を口に上せて、座の人達の贊同と尻馬を期待したが、話はやはり料理女や小間使ひのことに落ちるのが常だつた。アイロニーはそれを口にした人が、きまつて負けを取るプレイである。見榮坊や愚人や不法者のことを、セリメエヌはその談話のなかで懇ろに痛罵したが、しかしそれらを否定することに依つて、却つて彼女はそれらを肯定したこととなり、いはば彼等を彼女は二度存在させたわけなのである。

まどろ(サークル)のなかには、人間を教化する結構なあるものがあるが、それも想念を教化するまでにはいたらぬのである。ゲーテのやうな傑物だつたら、一種のメニューエットを常に踊つてゐるやうな廷臣たち、——その言葉も舉措も、ともに豫見され規制されてゐる彼等宮廷人との交際を、なんとか巧く牛耳つてゆくことも出来るだらうが、いくらゲーテとても、銘々勝手に向ふ見ずな即興をこととしてゐる禮式知らずの連中との同席は、必ずや蔑んだに相違ないだらう。禮節の手前、跋のわるい沈黙の穴塞ぎとして、むきになつてわざと相手に反駁するといつたことは、一度ならず見受けられるところだが、お世辭半分のさうした辯駁に巧みなある婦人が、機嫌の好い折、私に打開けて云ふには、反駁はエスプリを空にするものだと教へてくれたが、なるほど、かういつた一種の愛想好さに、エス

プリといふ美名が授かつたのもいかに尤もで、それは決して溢美の言ではない。何故ならエスプリは、かうした場合、身を犠牲に供してゐるものだからだ。機智の閃きは常にイデーの終焉を告げるものだからだ。ゆゑに交際の生活のなかには、禮式といふ尊重すべきあるものがあり、會話といふ輕蔑すべきあるものがあると、脱俗的に確言する必要があるわけだが、これは輿論を常に蔑視し、儀式を絶えて嘲弄しようとしなかつたソクラテスが、炯眼よく看取してゐたところであつて、さればこそソクラテスは神々に對し、例の鳩毒を以て供へ物をなさんとしたのである。その舉措たるやまことに美しく、そこには禮節と拒否とが相共に備はつてゐる。ゲーテが大公にお辭儀したのも、やはりさうした舉措を以てしてであつた。

第七十八章 ドグマ (DOGMAE)

人間を尊敬することは、初め私に不名譽な賤しいもののやうに教へられた。といふのは私の最初の先生たちは、その教義に於ては粘強ながらも、目先の見えぬ考へ方をした教父たちだつたからである。神ひとりに盡すべき眞の尊敬と、人間に對する尊敬とを、對蹠的に彼等は考へてゐたゆゑと思はれるが、かうしたメタフィジックなイデオロギイは、自分が眞なりと判するところに従つて、何の假借もなく語り振舞はんとしてゐる人たちのなかに、今なほ見受けられるところである。ポリウクトが偶像を毀つたのも、かかるためであり、また彼以後多くの人達が、ポリウクトの崇めた偶像を破毀した所以でもある。だから人間に對する尊敬は、われわれが眞なりと信することを、われわれに云ひそびれさす一種の恐怖のやうなものだと云つてよい。いへばそれは禮節上の嘘であり、最大の害毒の源なのであつて、アルセストの言を藉りれば、考へてゐることと反對のことを云ふ (trahir son âme) に他ならぬのである。

しかし常用の言葉といふものは、われわれよりもつと考へが深いことが、ここでまた解るのである。

語には抵抗力があつて、力強い警告をわれわれの耳に響かせる。人間尊敬が輕蔑すべきものとは、言葉上からいつて、なりやうがなく、この四つの語はわれわれを思慮分別にと促がすのである。私の信するところでは、われわれの争ひといふものは、宗旨の争ひである。人の氣に逆らはうとする悪魔的な快樂によつて、侮辱的言動といふものは、益々鞏固になつて行くのであるが、さうした形式をとつてゐるさまざまの見解のなかに、相對立して見受けられるものは、カトリック的憤怒であり、またそれにも増したプロテスタント的憤怒である。外見からして判するに、人を狭量ならしめるものは、各人が持つてゐると信する確信の念にもつばら依るが、あらゆる争ひの諸結果の一つは、甲と結び乙と離れんとする欲求の所爲で、われわれの想念から、あらゆる分別やニュアンスが剥ぎ取られてしまつてゐることにあるのは、明らかな事實である。さうした觀點よりすれば、形而上學や宗教など、つまりあらゆる絶對的教理といふものは、争ひの原因であるよりは、むしろ争ひの結果であることが、お解りになるだらう。争ひはすべて宗旨より端を發すると云ふことが出来る。といふのは悉皆の争ひは、如何様なる見解オピニオンに對しても、それに宗旨の形式を與へてゐるからである。従つて人を激發せしめるのは、ドグマのゆゑでなく、むしろ人をドグマ化させるのが激發の働きであると云つてよい。が、異説黙認主義のお歴々は、かうした見方を肯んぜず、大切なことは啓發のみと考へてゐるやうであるが、憤激がすぐとドグマを創り出し、實際經驗で決し得るやうな問題のなかにまで、憤激が一つの神學よ

ろしく、ドグマを築き上げてゐるためしは、世上の経験が充分にこれを目撃してゐる通りである。

禮節は平和獲得の第一手段である。もしもこつちで最初に體面汚しを演じたなら、すぐと憤怒のあまり、相手もやたらに節くれ立ち、ひいては感動の模倣といふものに依つて、こつちも節くれ立つて來ることだらう。だからして人間尊敬は規律のなかの規律と云ひたく思ふのである。諸君の方に道理がある時こそ、諸君は劍のやうな諸君の傲慢の切先きを下げねばならぬのである。さればこそ平和のための戦ひのなかにあつては、——これは斷じて普通の戦争の如きものであつてはならぬのだが——相手がちよつとでもひるんだ氣配を見せたまさにその時に、こつちも引下るすべをわきまへてゐなくてはならぬのである。勝利を確保するためには、あと一足でよいと思はれる時に、すべてを放棄して、俄かに他のことを扱ふといふメトオドは、ここからして推擧し得るのである。見解のための戦ひは、その術略と策戦から云つて、力業のくらべあひなどは、まったく相反するものでなくてはならない。最善の論法といふものは、お伽噺に出る魔法の刀のやうに、人を傷つけることがあつてはならぬものであることは、誰しも屢々經驗済みのことであらう。といふのは最善の論法はすぐとあるがなかでも最悪のものと轉じ易いからで、人それぞれの内奥の考へといふものは、自由^に依つてしか變へることは出來ぬし、また自由に依らずして變へるべきではないといふ大なる理念が示す通り、相手の方もこつちの權幕に反撥して、その全力をあはせてこちらに對抗しようとし、ために抜き難い勢ひを揮ふに

到るからである。ゆゑに負かし難い議論といふものは、相手の方の反對意見に、却つて力を添へるものと云つてよい。訴訟人によく見受けられるあの奇態な盲目滅法さは、主としてかうした事情に基づくものである。だから裁判事の云ひ張りなどは、およそするものではない。もし本當のことを喋つて、その言に耳をかす人の料簡をとさすやうに仕向けられたとしたら、それだけで立派な勝ちと云へるのである。思考の道は直線體をなしてはゐない。人間尊敬といふつとめのために、その道はうねりくねつてゐるが、だからこそ人間を理解しようと望んでみるやうに、人は導かれるのである。

第七十九章 信念 (CROYANCE)

魚類界の神學者は宇宙が液體であることを證明するが、それは始めから彼にさうした確信があつたからで、また聽講生の魚たちにしても、その通りである。生物の形態は一種の認識作用の働きをし、そのさまざまなアクションはさうした認識作用を確認するものなのである。だから信するといふことは、生きることと同じことなのである。どんな器官であらうと、それはアクションの一つの紀律である。魚は草の上におかれた時も、なほも泳がうと努めるが、その時になつて始めて、今迄信じてゐたのとは違つて、この世のすべては液體ばかりではないといふ見解を、怖らく抱くにいたるが、さうした見解の序の口も彼とともに消滅が必至である。あらゆる生物はその形態に依つて、納得せしめられてゐるといつてよい。記憶とか豫見とかは、その當の身體と常に同物をなしてゐるものである。鳥のつばさの羽ばたきのなかにも、記憶と豫見とが一緒になつて含まれてゐる。鳥の形態の悉く、——例へば中空な骨、筋肉、羽根、翼の勁部や尖端などといったものすべては、瑕瑾なき大氣物理学を表出してゐるのである。だから鳥は飛翔の規則に常に結びつけられて、さうした規則の例外に抗しつ、

死ぬまでその翼を搏ちやめぬのである。かく規則の感情は動物的なもので、身體に堅く楔づけとなつてゐる。——いや、もつとはつきり云へば、それは身體それ自體なのである。

かやうな點をデカルトは懷疑した。デカルトばかりではない。あらゆる人には幾分デカルト式な趣きがある。われわれの形態から來るかうした説服力 (persuasion) は、時にわれわれを欺き得るものであることは、如何なる用具も立證してゐるところだ。弓や矢は走つたり届いたりする別種の仕方である。われわれの想念のあの驚くべき開花は、ここに由來してゐるのである。といふのは矢は翼と同じやうに、大氣の法則と落下の法則とを現してはゐるが、人全體と一緒に運んでゆくといふやうなことは、矢には出來ないからである。だから矢の訓へはおよそ無駄にはならぬのである。用具の數多い效能のうち、人があまり氣づいてをらぬそれは、われわれを茫然自失たらしめるやうな痛ましい經驗を、用具のお蔭で人はせず済んでゐることである。たとへば私の鶴嘴が岩の下にはさまれようと、それは驚くほどのことでもなく、私には悠々とそれを點檢する餘裕がある。が、もし私の手や足が潰されたとしたら、そんな暇は到底にあるまい。そこからして用具を遣はぬ手調べは、あまり遠くへは人を導かぬことが云へるのである。火は有害なものといふ見解が動物にはあつて、これが彼等の身體のうち、さながら一つの恐怖のやうに、残つてゐるが、それは動物に用具を遣ふことが出來ぬゆゑである。用具はわれわれに考へるだけの餘裕を残す手足のやうなものである。用具に就てのかうした反省、

——理念的反省と云つてもよいが、——それがわれわれをして、魚獸はもとより、ひいてはわれわれ自身をも、われと判ずるたよりに、まさしくなつてゐるのである。その理由は述べるまでもなからう。魚界神學者に似ることは私は御免だ。ただ私にとつて大切なのは、その方法である。如何にして科學が築かれたかを、ここからしてわれわれはかなりに知ることが出来る。つまりそれは身體の形態から來たあの説得力をまさしく克服することに依つてなのである。

克服するといふことは、排除することとは違ふ。自己に對する鞏固な信念が、幾分かそこに残ることとは、是非とも必要なのである。ダンスは絶對的に説得しようとする。といふのはダンスの場合、身體はわれ自らに對して自足的なものとなるからである。寺院や行列に就ても、同じやうなことが言へる。何故ならその際には周圍近邊が人間の形態に調和した移り具合をするからだ。魚對水の關係に於るが如く、さうした場合、すべては適合の極致を示す。かうした働き具合に依つて、懷疑や、また矢の訓へが、そこに暫時にもせよ消失してゐるのである。さうして人は自我對自我のあの證據立てと、自我の感情たるかの直接的認識作用を、そこに再び見出すのである。それは貴重な復歸であり、尊い内的沈潛である。想念はダンスの場合に於るやうに、首尾好いアクションでしかもはやない。さうした直接的説得の概念を興へるものに、軍隊儀式や、またそれほど大袈裟に云はなくとも、リズムある行進の例などをあげることが出来る。そこにあつては人は自ら演技者であると同時に觀客である。

意見を翻へすくらゐなら死ぬのがましといった古式な掟に人はすぐと心に向ける。その完璧なすがたは草の上の魚のそれである。信念と懷疑、つまり自我の小手調べと用具の小手調べとのこの二つは、人間のなかに一體となつて存してゐる。巡禮家デカルトは幾何學者デカルトと同一人であつた。この賢明なる例からわれわれは、信念をも懷疑をも禮拜することなく、むしろその一つが暴威を揮ひ出したら、すぐ他の一つを強化せよと訓へられるのである。狂信家は信念に没入し、懷疑家は懷疑に惑溺してゐるが、これらはそれぞれ人間の兩半分にし過ぎぬのである。

第八十章 證明 (LA PREUVE)

證明を丸呑みこみした人は、狂水病患者のやうにあちこち馳せ回り廻る。そのわけは云はずと知れよう。證明は食べるものではなく、むしろ眺むべきもの、それもちよつと距離をおいて眺むべきものなのである。證明が眞上から落ちかかつたら、素速く脇に飛びのくことに私は賛成する。それと同じく、證明が陥穽のやうに待ち構へてゐたら、それを迂回することに私は賛成する。畏へはまることは、何時だつて出来るからだ。この世界全體は一つの重い證明のやうなものゆゑ、慎重に探究の歩を進める必要がある。つまりちよつと距離をおいて眺めることが肝心なのだが、神祕主義者は世界を腹中にをさめるやうなことをしてゐるのである。

ドドーナの御神木は常に何等かのお告げを語つてゐる。一匹の猫にしてもその意味ありげなことに於て、甚だしすぎるくらいである。埃及人が猫や牛や鰐魚や河水や泉や巖を、崇拜したわけを、かくて私にはうなづけるものがあるが、いつそ反駁の出来ぬ譯も分らぬものすべてを、崇拜することにした方が、ましのやうである。存在存在に對してこつちから何かを與へるや否や、存在はこつちを握るのである。

ある。事實(。fact)は想念を殺すのである。精神界のナポレオンといつたやうに、デカルトが諸々の證明を前にして訓練するさまを見るのは、世にも美しいさまといふのも、かうした譯合からで、ノーと云はうと先づ努めることは、思考する自我に對してイエスといふのと、そこでは同じことになつてゐるのである。しかしこの精神貴族デカルトも、世間からかなりに讀まれるといふこともなく、また然るべく理想的に讀まれてもゐない。デカルトの名から世人は一人の哲學者をでつちあげ、デカルトを敬遠してゐるやうであるが、眞のデカルトから人が學ぶべきことは、劍士が巧みに名づけてゐるあの體の制御、すなはち慎重なる身のいとひ方、それと手捌きの輕快さ、この二つである。そのことはデカルトの神が、常に(考へる神)であつて、決して(考へられた神)でないことから、とりわけ解るのである。が、かういつた證明を、またぞろ呑みこみなどされては迷惑だ。これは單にスペクタクルであり、ノックアウト隱喩ノックアウトであり、人間のモデルにしか過ぎぬものなのだ。宇宙に關するデカルトのメカニズムも、やはりモデルである。事物のモデルである。何の豫想も、また抱負もそこにはなく、それは何の斟酌なく變へ得る物、純然たる物である。裸かの必然性である。裸かの存在である。そのことはメカニズムがその惰性及び無氣力性に依つて——素晴しいイデオロギイではないか。——先づ何よりも意味してゐるところである。かうした慎重な手配を施し、世界から魂を抜きとつて淨化し、魂から世界を排除して淨めさへしたら、懷疑家と雖も、慣習に對して抗しすぎるといふやうなこともなくなり、また

宗教や政治の場合に於けるやうに、何から何まで調べ抜かうとせず済ますといつたやうな心境に多く悟入も出来るのである。信ずるにしても、盲目的にでなく、さう衷心から望むといふだけのことになれるのである。デカルトが地動説に就いて、かうまで書いてゐるのが、その好い手本だ。——「自身の理性が私の想念の上に及ぼしてゐる勢力にも劣らず、私のアクションの上に同じやうな勢力を及ぼしてゐられる方々」のお氣に障ることを何よりも憂慮する、と。——この一句こそ自由人の憲章とも云つてよゝ。

モンテーニュもやはり傑物であるが、その信じ方や不信し方には、さらに隠秘なるものがある。その遣り口はさながら抜目ないレスラーが、相手への手がかりを窺ひつつ、無暴にかからうとすまいと、わざと仕掛るやうな眞似をしてみせてゐる風なところがあり、また常にダンスを踊つてゐるやうなボクサーの口、乃至は勝敗は陣構へにありとし、戦はずして殆ど成算を抱いてゐる機動に巧みな將軍の常に出没自在な振舞、——さういつた趣きを持つてモンテーニュは、證明のあひだに忍び込み、その赫々たる退却を行つてゐるのである。多くに、怖らくはすべてに、跋を合せつつもモンテーニュはその精神力だけには常に一指をも染めさせてをらぬのである。人から強ひられぬ限りは、われと誤らぬ確信を、彼は見事に抱いてゐたものの如くである。もつとも溫和な、そのくせもつとも鞏固な、且つもつとも自由な精神の彼は持主である。彼以後さうした面魂の人物を私は一人、戦友のうちに認め

た。ジャンセニストであつたが、勇敢に戦つてゐた。彼はあらゆることを知りながら、全く不慥かなことを除いては、何一つ信じようとしなかつた。そのことを私は彼に一度云つてみた。それが彼の氣に障つたらしく、それからは以前よりよそよそしくなり、私ともあまりつきあはなくなつたが、しかし矢張り親父のやうなところがあり、あくまで地味で剛健だつた。△意思といふことを除いて、この世で信ずるに足るものが、他にあらうか。が、これら重厚な兵士らにとつて、意思ほど信ずる価値のない不慥かなものは、他にないであらう。いままで脆弱な信すべからざるものと意思がされてゐたのも訝しむに足りぬ。こつちで意思を信ぜぬ限り、意思は何ものでもないのだから。▽年のために白けた彼の眼差は、まさしくさう告げてゐるやうに私には思はれた。彼の名はベールと云つた。十八世紀のあの懐疑哲人と同名のこの名は不朽の記念碑の如きものだ。ここに私の王冠がある。

第八十一章 懷疑 (LE DOUTE)

狂人は決して疑ふことをせぬ。——といったやうな着想は、思ひつき易いが辿りがたいものがある。終始嚴正な學者ルヌウヴィエは、この點を深く窮めた人と云つてよい。いつたい疑ふことを知らぬものは、考へることを知らぬのである。おのが權利に固執し、飽くまでおのれを辯護立てし、すぐと戦ひに走る人は、懷疑といふ暫時の呼吸つぎをわきまへぬのである。捕へたものを手放すことを知らぬのである。といふのはこつちの方こそ捕はれてしまつてゐるからである。あまりにも眞近すぎるところに、イデエを擁してゐるせゐである。須らくそこに間隔をおくがよい。傍から眺めるやうな餘裕を設けるがよい。懷疑といふこの美しい言葉の根元には、われわれの師父たる星辰がある。われわれの師父といふ意味は、星辰は遠い彼方にあるからである。そこに於ては判断するといふ樂しみが擱まうとする性急さに、損はれることがないからである。觸れることを禁ずる宗教のあの謹直さを、人が先づ學ぶのもここからである。私は大思索家を一人知つてゐたが、彼の身振りは、鳥を放つ人のやうに、手を上へあげるだけだつた。さうした際、彼が共に遠くへ飛去るとしたら、どうも具合の好い

ことではない。

《擱む》といふ比喩が何がなしここに現れたが、擱むことは大切のことだ。(片手を握りしめ、さらにもう一つの手でその片手の上を擱むこと)をストイック派は唱へたが、なるほどこれは至極美しいかたちだ。剣道を學ぶには一回の教へなどでは不可能だ。先づ身を固くしないことだ。硬ばつた握把の癖をつけぬことだ。さうは云つても一概に出來まい。手の握りに相談をしかけるがよい。手の握りを動勢ムツツンから自由にするがよい。手の握りに勝手に物を云はせるがよい。そら、さう云つてゐるうち、地上に落してしまつた。同じ一つの劍を、手から弛めると同時に、手に堅く握る必要があるのだ。同じ一つのからだを、時に抑制し、時に突進することが肝心なのだ。君の弓を弛め、それと共に握りしめる要がある。ヴァイオリンの練習に、まさしく十年はかかる。が、それをあたまに考へるだけなら、一時間たらずで屁理窟が述べられるだらう。あれほど繰返して練習する譯を怪しめるだらう。あれを知りこれも知りたと思ふだらう。たつた一度きりで結構といつた具合に。だがそこには稽古のための肩の硬張りといふことが、ちつとも考慮に入れられてをらぬのだ。

ここらで私はぐるぐる廻りをしてみたいと思ふ。長たらしいことは私の好むところだから。さて私のドグマを御披露すればかうだ。——疑ふためには確信を持たねばならぬ。といふことは知る前に疑ふといふことではなく、(さうなつたら何を疑つたらよいといふのだ?)疑ひは確信に添ふこと恰も

影の如くでならねばならぬといふ謂ひである。ここに精神の微笑がある。地球が廻ることを現に知つてゐる人達すべて、——或ひはその殆どすべては、そのことを知る前に疑つた人達だ。が、彼等は天體現象のスペクタクルを、——すなはち一團となつて廻るあの大きな星座のことや、さうした動きにつれて、いくつかの遊星が勝手に星のあひだを浮遊することや、昇り降りする太陽のことや、造作なく満ち虧ける月のことなどを、——充分にわきまへなかつたのである。つまり彼等にとつて不幸なことには、地球が動かぬといふことすら、充分にわきまへなかつたのである。現に小學校にあつては、地球が廻る星群の中央にくらゐりてゐるかどうか疑つてゐる。わけも知らずに疑つてゐる。といふよりは、そんなことはあり得ないと信じ込んでゐる。堅く堅く信じ、齒をくひしばつてまでゐる。さうなれば逆の定説のなにかぶりに附く用意充分といつてよい。そして齒をもぎとられるのが落ちだらう。彼等をして太陽のなかにくらゐせしめて、まはりの遊星もともに地球が廻るのを見させるがよい。もろもろの星にまで、彼等を連れて見させるがよい。アトラス神の子分にでも頼んで案内して貰ふがよい。そこに運んで行つて貰ふべしだ。さうすれば今度は太陽が浮遊し、諸遊星がその供奉をつとめてゐるさまを見ることがならう。もしも太陽なりヴエガ星なりの住民に、人がなつたとして、そこからの天體現象しか眼にしないとすると、われわれ地球人のそれより、もつと正眞にそれらを見得るものとは、到底に云へないであらう。他のことが彼等に思はれるに違ひない。しかもそれは常に

單なる外觀 (semblant) だけにしか過ぎなからう。

私は立方體を見る。その際に私が抱く配景 (パースペクチヴ) の觀念は、それが如何なるものによ、私を欺く。たとへば一方の角は眞直ぐに、他の角は平たく見える。一方の平面のみ現れ、他の平面は隠れ、しかもその幾つかはまつたく見えない。さうした外觀の何れもが眞實のものでなく、しかもすべてが眞實なのである。全體ひつくるめて眞實なのである。ただそれを全體にわたつて見得る人がないだけなのである。悟性の方はさう望むのだが、それが出来ぬのである。眼や手を抜きにして悟性といふものはない。物の中心に、つまりすべての面が平面的に現れ、すべての角、すべての直線が一覽の下に現れるといつたところにくらゐ出来るやうな精神はない。さうした場所はおよそないからである。従つてあらゆる外觀を御破算すると同時に、そのうちの一つをしつかと打ちたてなくてはならないのである。さうしなければ、すべては逸脱してしまふだらうからだ。ゆゑにその一つに心奪はれるやうであつてはならない。むしろ自發的にそれに捕はれ、自發的にそこから脱れるやうにしなければならぬ。しかし(二つのうちのどちらか一つ)と仰有つてゐられる方々には、どうやら私の言葉もお解りにならぬやうだ。

第八十二章 スピノザ (SPINOZA)

鳥のやうに軽い小さな手が私の肩の上におかれるのを私は感ずる。それはこつそり私に耳打ちに來たスピノザの亡靈であつた。弱い聲でそれは言ふ。「君が打負かさうと思つてゐる情念を、君自身の裡で模倣することのないやうに用心したまへ。なにしろ古くから仕組まれてゐる良のことだ。怒りに對して怒りが高まり、憐愍あまつて暴力に及び、愛が憎しみに變ずるといつたためしは、何世紀もの昔からある。一軍隊の代りは常に他の一軍隊に依つて占められて來た。目的こそ異なれ、常に同じ手段によつて汚辱され通しのこの世の中だ。だから人を悲しませるものを、好んで眺めようとしてはいけない。人間的隸屬や人間的弱點に對してはつづましくし、それ相應の公平さを以てせよと云ひたい。その反對に人間の徳やちからに對しては寛宏であつて欲しい。それらは人間たちを欣ばし、また君自身をも悦ばせる恰好のスペクタクルだからだ。その結果、爾後は人間たちはもとより君自身にしても、欣びの感動のみで事を行はうとするに到るに違ひないと思ふ。」

弱い聲音だ。あまりにも忘れ去られ易い聲だ。が、いつたい人間の裡に於る愚昧さは、當人の身か

ら出たものでは決してない。虚榮にしてもさうだ。邪惡さにしてもさうだ。感銘的エムツァンなこれらの見掛けは、實際のところ、外的原因に直面した人間の弱さを現すものでしかないのだ。諸君が諸君の想念をもはや統御し得なくなるや、口舌の動きだけに依つて、愚昧さはひとりでのさばり出るものなのだ。だから何も強ひてふさぎこんで、敵や迫害者をわれから求める必要は微塵もない。褒められて得意がつたり、譏られて苛立たうとするやうな必要もない。あらゆる過ちはわれから身を落すがゆるゑなのである。人間を殺させる人の裡には、意志などは無い。絶対にない。ただ彼は讓歩したからだ。遁走したからだ。逃げながら蹈潰したまでだ。戦ひのやうな激變のさなかにあつては、すべては外的なものである。すべては受動的なものである。そこに能動的なものは何一つとてないのである。が、これがまたわれわれの情念の擴大されたすがたである。だから人間の裡のさうした弱さを罵り撲たうとしても、徒らに空虚のなかでわめきまがばかりなのである。かやうな害惡は無にも等しいものゆるゑ、およそ打克ち得ぬものなのである。人間の裡にあるものは、當人にとつても、また他の人にとつても、すべてよいものばかりである。意志、佳。勇氣、佳といつた具合に。従つてさしもの害惡の張本人はと訊ねても空しいことだ。そこに見出せるのは、おのが想念やおのが義務を、われ自らの外に求めようとした人間があるのみだ。そのくせ「私には出來なかつた。」と云ふ。恰もフレデリック大王時代の兵士のやうに、みな銃劍の切先きをその腰部に感じ、押されながら押すといつたそれは有様でしか

い。しかしかやうな屈辱的な境遇を、必要以上に彼等に想起せしめようとしてはならない。かかる場合、私が陥り易いもつとも大きな過ちは、彼等がそのしたことに得々としてゐると信じ込むことだ。得々どころではない。むしろ彼等は悲しがつてゐるのだ。苛立つてゐるのだ。頑冥なのだ。

争ひに關してとなると、われわれはかなり甚だしいパラドックスに遭遇しがちだ。すなはち各人が争ひをこつちから望んだと考へたがらずに、それを隣人の所爲にするといふことだ。但しかう云つたからとて、彼等がわれわれを瞞さうとしてゐるなどと、私は毛頭考へてゐるわけではない。彼等はそれに就ての確信を充分に持つだけの氣概がないこと、むしろ彼等はそれを信じてゐないと云つた方が正しいことを、私は喝破したい。いつたい臆病心の表徴は、さまざまの怪^{フアンタスマチック}奇的な外見をつくり上げるところにある。だから敵對しあふ民族があつたら、互ひに各界の代表者、たとへば銀行家、労働者、政治家、文人などを出しあつて、彼等の本當の考へを明るみに出すことをしたらよいと、私はかねがね期待してゐる。が、強ひられてとは、いつたい誰にだらう？ さてさうなると、この空虚と沈黙のなかに、身體のない怪物、普遍的な恐怖によつてのみ強力なモンスターが、姿を現すことになる。しかし恐怖を怖がらせようと望むことが出来るか。とんだ救濟策だ。それより各人の裡にある人間を認めさせたがよい。喜びと希望に即して、物を考へるやうにみんなにすすめたがよい。争ひそのものにさへ祈願をこめたがよい。各人の裡なる統御力エネルギーとちからを、争ひが示させるやうにと。

かうした効果は僅小なものではない。相手の勇氣と、君の勇氣とを、誠意を以て敢て考へるがよい。かう判断することだけで、平和は布告されるだらう。私の怖れるのは卑怯者のみをだ。だから私の怖れる相手は何者でもないといふことになる。何故なら相手を生かすのは、一に私自身の恐怖次第だからだ。私の哲人スピノザに倣つて私は云はう。「喜びは平和の果實でなく、平和そのものである。」と。

印刷
發行 (5000部)

情念について

定價一圓八十錢^①

譯者 小西茂也

發行者 福岡清

印刷者 綾部喜久二

製本者 中野製本所

中野 和一

發行所 株式會社 白水社

東京市神田區小川町三ノ八
振替東京三三二二八番
電話神田(25)三五九八番

七番一

二作

吉倉範光・伊藤正義共著

若き獨創の危機

一・一八〇
一・二五〇

ブロンデル著・宮城音彌譯

未開人の世界・精神病者の世界

一・一八〇
一・二五〇

スウェドベリイ著・田中實譯

物質觀の歴史

一・一八〇
一・二五〇

木田文夫著

體質の科學

一・一五〇
一・二五〇

古野清人著

原始文化の探求

一・一八〇
一・二五〇

チッコチン著・稻村耕男譯

研究の組織

一・一八〇
一・二五〇

成層圏へ 一・一八〇
一・二五〇

テイボー著・村岡敬造譯

原子の人工轉換 一・一八〇
一・二五〇

吉倉範光・佐藤正義共著

青年の人格 一・一八〇
一・二五〇

桂井富之助譯

ゴムの化學 近刊

ブラウン著・貝田勝美譯

天才の疾患と宿命 近刊

マルクワルト著・近藤忠雄譯

エーリリッヒ先生の思ひ出 近刊

コルソン著・植村琢譯

佛蘭西化學史 近刊

135.9
A41
10

終